
風の歌声

沢風 炯

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

風の歌声

【Nコード】

N9946W

【作者名】

沢風 炯

【あらすじ】

平凡よりもちよつと下をいくレイリアは、ひよんな事から温和なお嬢様、イルアの住むバルクス家の使用人として招かれた。大好きな騎獣のお世話をさせてもらえて穏やかな日々を過ごしていた矢先、突然の襲撃を受けて、レイリアはバルクス家の秘密を知ってしまう事に??。

招かれたのは温和なお嬢様のお屋敷・・・の筈が！

（R15は保険です。残酷描写は最後の方にちよこつと。）

第一話 風の誘い（前書き）

句読点の位置がところどころ変です…。ご了承ください。

第一話 風の誘い

それは本当に偶然だった。

というよりはむしろ奇跡だったのかも知れない。

こんな贅沢が許される日があるだなんて…。

まさに、夢のようで。けれど、現実だなんて。

こんな幸せな事が、あつていいのだろうかと不安になる。
いつまで続くのだろうと、考えて不安になるけれど。

死ぬまで続くようにしよう、と笑う人がいる。
そんな大袈裟な、と呆れる人がいる。

こんなささやかな、けれどもこれ以上ない程の贅沢。

私は、そう感じて初めて、生まれて来て、生きていて良かったと
心から思った。

これも、かなりの贅沢。

?? 願わくば運命の女神よ、どうか気が変わりませんように。

空晴れ渡る季節。とある国のとある町。父、母、兄、妹という家族があった。

兄は大変賢い人で、十六で働きに家を出た。

妹は一般的に言えばなんの取り柄もない、というよりはむしろ、人よりも良く言えばのんびり、悪く言えばとろい娘だった。人より出来る事も少なく、なので出来る仕事もあまりない。

父は堅実が取り柄でそこその仕事を頂き、母はじつとしていられない性格で色々な情報を把握しているような人だった。

そんな両親から離れ、娘は町の外れの小さな花屋兼喫茶店で働いていた。

両親と兄には随分心配されたが、なんとかやっている。きつい仕事がない代わりに給金は少ないが、それで食べていけない事はない。

特に容姿に気を遣う性格ではないし、目新しいものが好き、というわけでもなく、手にした給金に不満を持つ事もなかった。

まあ、町を歩いているとどうしてもちょっと高級なお菓子が誘惑の香りをぶんぶんさせているので、そういう点では、財布の中身とにらめっこする事もあった。

（でも…ちょっと我慢して食費を切り詰めれば買えない事もないし、意外と贅沢出来てるのよねえ私…）

そう思つて一人浮き立つ。

小さな子供と目が合つて、お互いに嬉しくて笑う。

そんな事で幸せを感じ、満足出来る娘だった。

その日は仕事が休みで、娘は売り物の花の様子を見に、店の花畑へ向かった。咲き誇る花畑の中へ、柵の扉を開けて入る。大きな籠を出入り口に置いて、娘は花畑の中を進んでいく。

「良く育ってるなあ……！ここの土がいいのか、おばさんの育て方がいいんだわ。」

店の主人を、娘は親しみを込めて“おばさん”と呼んでいる。娘よりも先に店で働いていた同僚がそう呼んでいたからでもあるが、その名前で呼ぶ事にとっても親しみを感じるのだ。

「花束が作れるように刈っていったほうがいいのよね。」

以前言われた事を思い出し、組み合わせを選びながら何本かずつ刈り取っていく。

籠いっぱいに刈り取ると、日が少し傾いていきていた。

「まあこんなもんか。今日ってお休みなんだけどな……」

そう言いつつも、全く嫌そうでないのは、やはり彼女がこうした作業が好きだからだろう。大きな籠を両手で持ちつつ、柵の扉を体で開けた時だった。

「！？」

さつと大きな影が向かってきたのだ。咄嗟の事で、身動き一つ取れなかった。

「……ん……？」

影は、少し離れたところでこちらの様子を伺っていた。

大きいと思っていたが、こうやってまじまじと見るとそう大きくはなかった。

自分よりもかなり巨大に思えた獣は、目線が自分よりも下にある。二本脚で立てばまた違うが、思ったより小さくて若干ほっとする。豹柄の、美しい獣だった。

「わあ……綺麗！」

思わず籠を地面に置き、獣が逃げないように慎重に籠より前に出て、様子を伺う。

獣は宝石のような美しい緑の瞳を瞬き、踞るようにして、じつとこちらの様子を伺っている。

「うわあ、綺麗……！綺麗ねえ、君……」

興奮してしまって、行動は抑えられても言葉は抑えられない。

彼女は慎重に、一歩ずつ足を進める。正面からでは逃げてしまうだろうから、少し斜めからアプローチしていく。

「もしかして野生？まさか誰かに飼われてるわけじゃないでしょう？」

じりじりと近付いている間も、獣は大きな瞳でじつとこちらを見て、時折不安気に尾を揺らしている。

「でもすつごく毛艶がいいのね。やっぱり誰かにお手入れされてるの？」

触れてみたい、撫でてみたい、とはやる気持ちを抑え、彼女は徐々に距離を縮めていった……その時だった。

「っ！」

獣の耳がさつと後方へ動いたかと思うと、次の瞬間には彼女目掛けて跳躍してきたのだ。

（何！？）

とつさに頭を庇ってしゃがみ込むも、獣はひらりと後方へ着地し、彼女を一瞥すると走り去ってしまった。

「……………あーあ残念……。もうちょっとで側までいけたのに……！」

がつくりと、尻餅をつくようにして座り込み、溜め息をつく。

「あーあ……触りたかったなあ……」

そうごちていると。

「！？」

またもや大きな影がさつと現れた。

思えば花畑は林の隣にあり、どうもその林から、先程の獣も出て

来たようだ。

「……………」

今度はなんだ、と思って見ると、いかにも明朗、という雰囲気
少年が立っていた。

え、人？と思う彼女同様、少年もぽかんと彼女を見ていた。しか
し、すぐにはつとした様子で、足下を注意深く見やる。

（…何なに？どうしたの？）

「……………やっぱり来てる…」

そう呟くと、少年は慌てて走り寄ってきて、彼女を助け起こした。

「え、え？」

「大丈夫ですか！獣に襲われでもしましたか！？」

意外にも力あるんだな、と思いつつ、慌てている意味が分からず
に首を傾げる。

「ありがとうございます。…でも襲われてはないですよ？」

「怪我は！？」

本当に心配してくれているのだろうが、彼女には理由が分からず、
困惑するばかりだ。

「ないですよ？ちよつと座り込んでただけですから。」

それを聞いて、少年はようやくほつとしたようだ。

「良かった…あの、でも、ここに獣が来ていましたよね？」

何か必死な様子に、彼女は真摯に頷いた。

「ええ。白い毛並みに濃い茶の斑模様の、緑の目をした綺麗な獣で
した。」

「……………」

言った途端、少年は困惑気味に訊ねた。

「……………その、本当に怪我はないんですか？」

そう訊ねられて、彼女はさらに困惑する。

「ええ。ありません。」

「……………襲われかけたとか……………」

「いいえ？多分貴方が追いかけて来たのを知って、慌てて逃げたんだと思いますよ。その時に私を飛び越えていっただけなので、怪我もないんです。」

「……………」

黙ってしまった少年を見て、彼女はある事に思い当たって期待を込めて聞いた。

「あの、もしかしてあの子のご主人ですか？」

「は？…あ…いや、俺ではないですが…俺の主人が…」

何故か歯切れ悪くそう答える少年に、彼女は嬉しそうに手を合わせて飛び跳ねた。

「やっぱり！それであんなに綺麗だったんですね！すごい！」

「え…？」

啞然とする少年の様子も意に介さず、彼女はうきうきしている。

「あの獣ってあまり飼われてないですよね！珍しい！素敵！」

「あ……はあ……」

少年は困り果てたように苦笑いをした。

その後ろから、がさがさと草木を掻き分ける音がして、二人ともはっと林を振り返る。

すると、こちらは優美な立ち振る舞いの青年が現れ、その青年に手を惹かれ、まさに上品そうな女性が現れた。

見るからに彼等の主人はその女性だ。

白く華奢な体に、つつしまやかな雰囲気醸し出す服。青みがかった銀髪は片側に上品に結われていた。

その側に立つ青年もこれまたつつしまやかな雰囲気服に、若干威厳を感じる。こちら白い肌ではあるが華奢な印象はない。琥珀の瞳は穏やかでいて芯を感じられる。

その二人が佇んでいる様は、まさに絵のようだった。

「お嬢様、足下にお気を付け下さい。」

「ええ、大丈夫。まあ、こんな恰好で追いかけるものじゃなかったわね。」

確かに、林から出てくるのには不思議な恰好だ。というか、その恰好で林を歩いていたら考えるとかなりおかしい。

とはいえ、女性が高貴な印象によらず、気さくな人のようだ。

「ヴィト、そちらの方はどうされたの？」

女性がそう言うと、少年がさつと女性の近くへ行って娘を振り返った。

少年はヴィトという名前らしい。

「その…どうもリュミエルがここへ来たようなのですが…襲われたりはしていないそうです。」

「あら！それは良かったけど…不思議な事もあるのねえ…」

そう言つて女性は娘を見て、にっこりと笑んだ。同性でも魅了されてしまう、柔らかい笑みだ。

「怪我もないようで何よりです。私はイルアと言います。貴女のお名前は？」

「えっと……私はレイリアです。」

「レイリアね？私のシレイがご迷惑をかけたみたいで、ごめんなさい。」

「シレイ…ですか？」

首を傾げるレイリアに、イルアは優しく笑った。

「あの獣の事よ。シレイというの。私がつけた名前はリュミエルよ。よろしくね。」

「あ、こちらこそよろしく願います。」

あの獣とお近づきになれるかも！という淡い期待も込めてお辞儀する。と、イルアの笑う気配がした。

「怖くなかった？」

「はい、全く！すごく綺麗で感動しました！」

その台詞に、イルアに付き添っていた青年が驚いたようだった。

「……ともすれば、リュミエルの毛並みが良い、と褒めて下さいましたよ。」

そうヴィトが言うと、イルアは嬉しそうに笑う。

「あらそうなの！それはありがとう。でも実はね、お世話は別の人に任せてあるの。人から頂いた子なんだけれど、私は動物のお世話つてした事がなくてね……。だから今のはその人に伝えておくわね。」

「あ、はい！是非お伝え下さい！」

感動のあまり少々やかましくなってしまったが、イルアがあまり気に留めていないようなので安堵する。

（やさしそうなお嬢様……気さくだなあ……）

「お嬢様、肝心のリュミエルは逃げてしまったようですが……如何なさいますか？」

イルアの側に佇む青年がそう言うと、イルアはそうだったわね、と笑いを引つ込めた。

「もう仕方ないわ。こうなったらヴィトに捕まえて貰いましょう！」
イルアがきつ、とヴィトを見据えると、ヴィトはぱちくりと瞬きした。

「いいんですか？」

「だって……無理じゃない？野生に返してしまったら問題だし、今度あの方が訊ねていらした時に困るもの。」

「……………」

ぼそ、と何事かヴィトが呟いたが、誰の耳にも届かなかった。

「ではヴィト。お嬢様のご命令だ。リュミエルを捕らえて連れ戻すように。」

「……かしこまりました！」

ヴィトはさつと一礼すると、風のような速さでリュミエルを追いかけて行った。

（……すこつ……はや……！）

啞然として、しばらくヴィトが消えて行った方を眺めていると、イルアがそつと近付いてきた。

「レイリア、本当に怪我がなくて良かったわ。」

（あ、また……）

あまりに心配されるので、レイリアは聞いてみた。

「あの…そんなに危険なものなんですか？」

「うーん…」

イルアは困ったように苦笑いをした。その様も愛らしい。

「うちでは誰にも懐いていないの。本来誰にでも懐くっていうものでもないみたいだけどね。でもうちにいる時はね、お世話してくれている人に噛み付くわ引つ掻くわで。誰が行っても気に入らないみたいなのよね。私やセティが近付いても怒ったりはしないんだけど、触らせてはくれないのよねえ……」

（セティって誰だろう……というかそんなに懐かないようには思わなかったけどな…）

レイリアと一緒に首を傾げていると、側にいた青年が声をかけてきた。

「…レイリア様。」

（…えっ！？）

慣れない呼びかけに思いつきり動揺してしまう。

「リユミエルは貴女に対し、如何でしたか？唸ったり、警戒する素振りは？」

「えっと……特には。距離は置いてましたけど、結構近くに…」

言いながらイルア達から若干の距離を置く。

「これくらいまで近付いても、あんまり警戒してないみたいでしたよ？」

「……………そうですか…」

青年は軽く頷いた。

「まあ慣れてくれるまで待つしかないわね。」

「…しかし、その前にガイアスが激怒してさらに懐かなくなる…という可能性もありますよ。お嬢様。」

（ガイアスって誰だろう？…あ、あの子のお世話をしてるっていう人かな…）

「うーん…そうだったら困っちゃうわね…。ガイアスで無理となると、うちにはあの子をお世話出来る人がいないものね…」

うーん、と考えるイルアに、青年はそつと促した。

「その事はお屋敷に戻ってから熟考いたしましょう。如何ですか？」

「……そうね。ここで考えても仕方ないものね。」

頷いたイルアを見て、青年も頷く。

イルアはレイリアに顔を向け、微笑んだ。

「ではレイリア、私達はこれで失礼するわね。お騒がせしてごめんなさい。」

「いえそんな…リュミエル…さん？…に会えてとても嬉しかったです。」

くす、とイルアは微笑んだ。軽やかな笑顔がまた、魅力的だ。

「リュミエルに“さん”は要らないわ。」

「あ、はい…」

若干恥ずかしくて視線を逸らしてしまう。イルアはそんなレイリアに優しく言った。

「動物に敬意は必要でも敬語は必要ないわよ。」

「……はい」

その言葉に、自然と微笑み返す。

「ではね、レイリア。」

「はい！お気を付けて…」

「ありがとう」

イルアは軽く笑うと、青年に誘われてもと来た林へと歩いて行った。

（…林から出て来て林に帰ってくお嬢様って…滅多にいないよね。）

そう思い、イルア達の姿が見えなくなっってから、レイリアは少し笑ってしまった。

それから幾度花畑へ行っても、案の定誰とも会う事はなかった。少し期待してはいたのだが、当然来ないだろうとも思っていた。

（一番期待するのはもちろんリュミエルだけど……。あのお嬢様達にも、もう一回会ってみたいなあ……。なんだか……。どこもなく安心する雰囲気なんだよね、皆さん……）

そんな事を考えながら店番をしている。平日は客もそう来ないから、たまにこうやって、店のカウンターの後ろに座って、ぼーっとする時間がある。

（それにしても……。綺麗な子だったなあ……）

リュミエルを思い出してうつとりしてしまう。

艶やかな毛並み。宝石のような瞳。しなやかで力強い身のこなし。性格も過激ではなさそうだし、あんな獣が側にいたら、何時間でも見つめていられるだろう。

それはもう熱心に、お世話だっけてあげたい。

（あのお嬢様も面白い方だったな……）

イルアを思い出すと、綺麗な女性に対する憧れもあるのだが、それ以上に……。何故か微笑んでしまう。

いかにも上品で気品あるお嬢様なのだが、その性格はとてもさっぱりしているようだ。側に佇む青年も加わって、本当に上品なお嬢様に見えるのに、口を開けば高貴さがあつという間になくなってしまふ。本当に気さくな人なのだろう。

（楽しそうな人。）

そう思い巡らせ、レイリアは少し微笑んだ。

いつかまた会う事があったなら。それだけでレイリアは、ずっと
幸せな気分でいられるだろうなと思った。

第二話 再会と選択

??あれから二ヶ月が過ぎた。

この日は休日だったレイリアは、城下町へ買い物へ来ていた。店の買い出しではあったが、こういう用事でもないとしても城下町には行かないので、少し着飾って、気持ちも高揚気味だ。わくわくしながらもきちんと店の買い物を済ませていると、ふいに道行く人々がざわめきだした。城下町には時々、お偉い方々がいらつしゃると聞くと、人々が大騒ぎしない様を見ると、そこまで高い身分の方の登場ではないようだ。それとも、何か有名な方なのかも知れない。にわかに興味が湧いて人集りに加わると、繊細な飾りの施された高級そうな馬車から、一人の青年が降りた。

(えっ…)

驚いている間に、青年は馬車の中の人物に手を差し出す。その手を取って馬車を降りたのは、レイリアの思った通りの人だった。

(イルア様…!?)

はつとして馬車周辺をよくよく見る。すると御者席に、これまた知った人物がいた。

(ヴィトくん…いや、さん?)

まあ、実際に声をかけるわけではないから。この際、呼び方は曖昧なままにしておく。

(…やっぱり身分の高い人だったんだ…。それも、有名人?)
人に紛れてイルアを見ていると、周りの人々の囁きが耳に入ってきた。

「イルア嬢だ！今日もセティエス様と御一緒かあ…絵になるなあ…！」

（…ん？……前に言ってた“セティ”って、あのお兄さんの事かな？セティエスって言うんだ）

レイリアは改めて青年を見る。微笑をたたえてイルアをエスコートする様子は、本当に様になっている。

「今日は何の御用かしら…？」

「この間は擁護院を手伝いにいらっしやっただろう？なんて心の優しい方だろう…」

「それにしても、イルア嬢が騎獣屋に御用だなんて。あの美しく可愛らしいお方が、騎獣を扱うようにはとても思えないけどな…」

「セティエス様の為かも知れないわよ？」

「やはりお二人の噂は本当なんだろうか…」

「ああ、セティエス様と一瞬目が合ったわ！」

「イルア嬢…！笑顔が今日も麗しい…！」

（………えっと…人気者なのは分かったな…。）

レイリアはちよつとがっかりした。もう少し、イルア達がどんな人なのか知れたかったのだが。

（…騎獣屋…ってことはリュミエルに…何か買いに来たのかな。）

そんな事を思いつつ眺めていると、ぱちっ、とイルアと目が合った。

（あ…気付い………てはくれないよね、やっぱ。）

イルアが動きを止めたように思えたが、すぐにセティエスと話しているのが見えた。

（…なんかちよつと悲しくなってきたから、もう離れようかな。）

レイリアはそつとその場を離れた。

人々の囁きを聞かないようにさえして、買い物を済ませる事に専念した。イルア達がいた通りから少し離れ、買い物籠を足下に置いて、城下町の裏広場とも言える場所で休憩する。表の広場は様々な

大道芸人や旅の商売人などがいて華やかだが、この裏広場は忘れられたように人がいない。レイリアは城下町に来る度、好んでここで休憩する事に決めていた。レイリア以外に人がいた試しがない。寂しい場所だが、レイリアには落ち着く場所でもあった。

そこで、途中で買った小さなパイを口にする。小さく、ぎゅっと美味しさの詰まったこのパイが、レイリアの好物だった。さすが城下町にあるだけあって、値段はレイリアに優しいものではないので、この日の為に給金を節約していたりする。それだけに、幸せの味だ。

戻ってからも楽しめるように、二つ買うのがレイリアの決まりになっていた。

（うーん、美味しい！）
思わず頬が緩む。勝手に頷きながら食べる。

かさ、と肩越しに落ち葉を踏む音がして、レイリアは仰天して振り返った。
（なななに！？人だったら今の見られてたら恥ずかしいんですけど！）

「……………！」

人、だった。驚いてこちらを見ている。レイリアもさらに驚いて凝視してしまう。

「……………ええと……………」

相手はきまづそうに、でもまだ驚きながらも言葉を探しているようだ。

（な……………）

レイリアの思考もひどく鈍い。いや、いつもそうだが、いつもよりかなり鈍い。

「……………その……………」

あちらこちらに視線を泳がせながら、相手は少しレイリアに近付く。かなり困っているようだ。

（は……………）

思考よりも先に、感情の動きが一気に活発になった。と同時に、相手も言うべき言葉を見つけたようだ。

「…その…盗み見ていたわけではありませんよ。…あまりに嬉しそうにしてらしたので…声を掛けづらくて…」

（恥ずかしい！すごく恥ずかしい？！…！）

レイリアは返事も出来ずに顔を逸らした。完全に油断していた。誰も来ないから。誰もいないから。いつもなら？？。

「ええと…イルア様が先程貴女をお見かけして、衆目あるなかで、ろくに挨拶も出来ずに申し訳ない、と伝えてくるように仰せつかりました。」

「えっ！？」

恥ずかしさが一時、引込む。驚いてもう一度振り返ると、ヴィトはちよつと驚いた後、にこりと笑った。

「あれだけ囲まれていては、気軽に声をかけるのはばかられますので…」

そう言われて、レイリアは嬉しくて胸がじんとした。後から思い返すと本当に自分勝手に一方的に思いを膨らませていたのだが、やっぱり憧れている人に気にかけて貰えた、という事は、かなり嬉しい事だった。もしかしたら、涙目になっているかも知れない。そう思つて、レイリアは頭を下げた。心から嬉しいのを伝えるため。そして、泣きそうなのを隠すために…。

「あの…一度しかお会いしてないのに…私の事を覚えて気にかけて下さって……すごく嬉しいです！ありがとうございます…！」

そう言うと、嬉しさが滲んでくるようで、ますます頭を上げづらい。レイリアは少しの間頭を下げたままだった。あまり長くそのままでは

いると、相手が気まづくなるかも知れないから、2、3秒で感情をこらえて頭を上げた。すると、ヴィトはやはり、少し戸惑っているようだった。

（ちよつと大げさだったかな……けど……）

やっぱり、とても嬉しい事だったのだ。だから、それだけは絶対に伝えておきたかった。若干申し訳ない気持ちでヴィトを見守っていると、ヴィトは少し悩んだあと、慎重に言葉を選びながら言った。

「レイリア様。イルア様は……お会いした回数や時間は気になさらないのです。貴方に好意があつたからこそ、貴方を覚えていらつしたのです。ですから……あまり気負わなくとも大丈夫ですよ。」

そして、微笑んだ。

「とは言え、そのように思つて頂いているのですから、イルア様もお喜びになると思います。私から伝えさせて頂きます。」

そうして丁寧にお辞儀をしてくれた。それを見るとまた感情がこみ上げてくるが、なんとか堪えて笑顔で返した。

「はい！よろしくお伝えください！」

ヴィトのようにきれいには出来ないが、精一杯丁寧にお辞儀して返した。レイリアにとってこの日は、思いがけず素晴らしい思い出の日となつたのだった。

？翌日、レイリアは久しぶりに籠を持つて店の花畑に向かった。

昨日の嬉しさが一晩絶つても収まらず、うきうきしながら跳ねるようにして花畑の柵の扉を開け、近くに籠を置いた。晴天に白い雲が元気にたなびき、風も爽やかで心地良い。

「んー！良い日？！」

思い切り伸びをして、大きく深呼吸する。そして、一つ一つ丁寧に花を摘み始めた。すると、奥の方で何かが動いた。

（えっ？）

綺麗な花に紛れるように、大きな獣が身を起こした。

「あつ」

柔らかな日が注ぐ花の中で、リュミエルが寝そべっていた。かなりリラックスしている様子から、ここにはもう何度か来ているのだろう。その様子が嬉しくて、レイリアは微笑んだ。

「リュミエルよね？ここ、気に入ったの？」

近づいたら逃げてしまうだろうか。そう思いながら慎重に近づくも、リュミエルは瞬きをして視線を逸らし、目を閉じて寝そべってしまう。長い尾が満足そうにゆらりと揺れた。それを見て、レイリアはリュミエルが少しも警戒していない事を知って、ほっとした。すぐ側へ行ってもちらりと視線を寄越すだけで、少しも嫌がる様子はない。

「また抜け出して来たんじゃないでしょうね？」

お邪魔するわね、と言ってレイリアはリュミエルの隣に腰を下ろした。

「…ねえ、触ってもいい？」

少しだけ手を出して、リュミエルの様子を見る。リュミエルは差し出された手をじっと見つめ、頬を差し出すように顔を逸らした。

「……………触るよ？」

様子を見ながらそつとリュミエルの頬に手を触れる。ふわっと軽い感触がして、少し動かすと、かなり滑らかな毛質だという事がわかった。

「わぁ…！ふわふわ！するする！」

毛並みに沿って手を動かすと、リュミエルはさも気持ち良さそうに喉を鳴らした。

「気持ちいい？良かった…！」

喉を鳴らすリュミエルの横で、レイリアは一緒に喉を鳴らさんばかりの喜びようだった。こうして改めて間近にみると、やはりリュミエルが人に乱暴するような獣には思えない。レイリアが優しく首筋を撫でると、リュミエルはごろごろと喉を鳴らしながら擦り付けてきた。

「リユミエルって実は甘えん坊？お世話してくれる人にも優しくしてあげてね。」

そう言うと、まるで言葉が分かっているかのようにぱっと顔を上げ、非難するような視線を向けてくる。

「リユミエル…その人が苦手なの？」

思わずそう聞き返す。が、リユミエルはやはり分からないのか、再びレイリアの手に首筋を擦り付けて甘えた。

(…………お世話してくれてる人と、あんまり相性良くないのかな…)ぼんやりと思いを巡らせていると、リユミエルが急にさっと首をもたげた。

「どうしたの？」

きよろきよろと辺りを見回すが、レイリアには何も分からない。リユミエルはレイリアに視線を合わせると、何かを伝えているのか、ひゅつと尾を軽く振った。

「？」

わけも分からずリユミエルを見つめ返していると、聞き覚えのある声がりユミエルを呼んだ。

「リユミ―？」

澄んだ声音が聞こえてくる。レイリアは思わず立ち上がった。イルアだ。間違いない。

「イルア様！こちらです！」

背の高い花に囲まれていて、立つたくらいでは見えづらいであろうから、レイリアは両手を高く上げて小さく飛び跳ねた。がさがと音を立ててやってくると、イルアと共にセティエス、ヴィトの姿もあった。

「お久しぶりね、レイリア。昨日は挨拶出来ずにごめんなさい。」イルアはふわりと笑って詫びた。それに対しレイリアはすっかり恐縮してしまい、慌てて頭を下げる。

「いえそんな！イルア様が私を覚えていて下さって、本当に嬉しか

ったです！」

微笑むイルアの後ろで、セティエスとヴィトが少し戸惑うような視線をレイリアの足下に送っているのに気づく。イルアもそれに気づいて二人と同じように視線が固定された。

（あ…リュミエル…）

レイリアも視線を移す。と、リュミエルはじつとレイリアを見つめていた。以前とは違い、イルア達が来ても逃げる素振りはなかった。「あの…リュミエル、また抜け出したんですか？」

そう聞くと、三人は顔を見合わせた。そして、セティエスが困ったように話す。

「…リュミエルはいつからこちらに？」

「え？」

驚くレイリアに、セティエスはちらりとリュミエルに視線を落とす。「とても寛いでいるようなので…あれ以来、何度が来ているのでしよう？」

そう言われて、レイリアは慌てて言い返した。

「あ、私も今来て…あんまりのんびりしてるので、何度か来てるのかなあとは思いました…。」

言いながらしゃがんでリュミエルの首を撫でると、また気持ち良さそうに目を閉じ、喉を鳴らす。それを見て、三人はまたも目を見合わせた。

「ここが気に入ったみたいで、私が来た時にはもうこんな感じに寛いでたんです。近寄っても触っても怒らなかつたので、こっやつて撫でてみたんですけど…これも気持ち良いみたいですね。」

そう言つて三人を見ると…イルアに向かって二人が頷いているところだった。

「あの……？」

（一体何……？こっつうのって、あんまり良い予感しないよね…）警戒心も露にそう訪ねると、イルアはにこりと微笑んだ。本当に愛らしい、天使のような笑顔だ。

（イルア様に限って、そんなわけないか）

簡単にほだされてしまうが、天使にならほだされたって構わない。

「ねえ、レイリア。ちょっとお願いがあるのだけれど……」

綺麗な人に、少しはにかんだようにこう言われてしまうと、なんだかどきどきしてしまう。

「イルア様が、私に頼み事……ですか？」

「ええ。そうなの。」

ふわり、と笑う。レイリアは完全にイルアに魅了されてしまった。

「お仕事がお休みの日にね、うちにリュミエルのお世話をしに来てくれないかしら。」

「はい、喜んで……」

大きく頷きかけて、レイリアは固まった。

「……………え？」

顔を上げると、イルアは美しく微笑んでいる。その後ろでセティエスが微笑をたたえ、ヴィトは表情を変えずに見守っている。

「ええっ!？」

思わず大声を上げてしまうが、それを気に留める余裕がない。

「お願い出来ないかしら。ほら、リュミエルも貴女にとっても懐いているようだし、たまに心を許せる人が会いに来てくれば、この子も逃げ出す回数が減るんじゃないかと思うの。だから……ね？」

イルアは間違いなく確信犯だ。自分の笑顔が……いや、自分がとても魅力的だと知っている。そしてその使い方も知り尽くしているのだろう。

「いや……でも、その……」

迂闊に返事は出来ない。そう考えるレイリアの思考を遮り、イルアは自由を奪う。

「リュミエルがあんまり自由にしていると、じきに町から苦情がくるわ。それでも今の私たちではこの子を止められないし、という事は、いずれ危険だからと処分するようにお達しがあるかも知れないでしょう？それでは、あまりに可哀想だとは思わない？」

「それは……もちろんそんな事にはなつて欲しくないですが……」
「でしょう？」

「で、でも！私が会いに行つたからといって、リュミエルが逃げ出さないと決まつたわけではありませんよね？それなら、私が行く理由はないと思います。あの……こんな風に誘つて頂いたのは本当に嬉しい事なんですが……」

粘るレイリアに、イルアは急に悲しそうに目を伏せる。

「そう……困つたわね。」

え、と目を見開いてしまふ。急変した態度にとっさについていけない。

「実はね、ガイアスがもうお手上げだつて言っているの。」

「……………え？」

ガイアスつて誰だろう。そう思つたのが顔に出たのか、セティエスがさつと説明を入れてくれる。

「ガイアスはリュミエルの世話をしている男です。」

「あ……」

頷くレイリアをちらりと見て、イルアは話を続けた。

「うちには彼しか騎獣の世話と調教を出来る人がいなくてね。彼がリュミエルの面倒は見切れないつて言い出したのよ。」

「なっ……」

（なんて無責任なの？）

今までの話で抱いてきた思いが、むくむくと大きくなり、レイリアは怒りを感じて拳を握りしめた。ガイアスだけではない。リュミエルの主でありながら、リュミエルを放棄しようとしているこの人達に。

「私では騎獣のお世話なんて出来ないし、セティエスは私の補佐をして貰わないといけないから私から離れては困るし、ヴィトは彼の仕事があるから、とてもリュミエルのお世話までは出来ないのよね……………」

そう言つて悲しげにするイルアを見て、レイリアは博愛精神に火が

ついた。

「皆さん、無責任です！」

叫んだ声に、三人は驚いて固まった。

「動物は生き物なんですよ！誰かに頂いたみたいですけど、そもそも受け取るべきじゃなかったんです！リュミエルがどんな生き物なのか、誰かきちんと調べたんですか？他にも飼われてるみたいですけど、リュミエルが加わってもきちんとお世話出来るのか、考えましたか？そういう事を理解しないで生き物を飼うのは、本当に無責任なんですよ！」

軽く息をつきつつ三人の反応を見ると、一様に啞然としている。

（まさかこんな事が理解出来ないの！？）

それでも、他にどう言っているのか分からず、色々と言葉が浮かんでは消えていく。そうしているうちに、イルアが表情を崩した。

「????ごめんなさい。」

先程のような人を惑わす態度とは全く違っていた。イルアは肩を落とし、俯いて、小さくため息を零した。

「……少し、簡単に考えていたみたいね……。」

イルアがそう言うと、セティエスがくすりと笑った。

「お嬢様、レイリア様。どうかご安心下さい。」

「「え？」」

同時に聞き返すと、セティエスは苦笑しつつ答えた。

「お嬢様がリュミエルを頂く時は、リュミエルが増えても手が回るよう、私とガイアスで準備を行いました。シレイがどんなものなのかは、このヴィトが調べております。」

セティエスの視線を受けてヴィトが口を開く。

「シレイは気位が高く、己の主人は一人と決める。馴れ合いを嫌い、争いを好まず、温厚、寛容な性格だそうです。」

「……………」

あまりにもしっかりとした答えに、レイリアは驚き、熱くなった自分を少し恥じた。

(……それはそうだね。しっかりしてそうなセティエス様が、生き物の扱いを知らないなんて事、あるわけないよね……)

今度はレイリアが小さくなる番だった。すっかりしょげかえって三人に頭を下げる。

「あの……すみませんでした！私、勝手に熱くなってしまって……皆さんを侮るような事を言って……」

三人はまた顔を見合わせ、笑った。頭を下げたままのレイリアに、イルアがそつと言葉をかける。

「気にする事ないわ。私の発言が軽卒だったのよ。不快な思いをさせて、ごめんなさい。本当に……」

それに被せるようにセティエスが口を挟む。

「お嬢様は貴女を取り込もうと、わざとあんな言い方をなさったのです。どうかお許してください。」

それを聞いてイルアがセティエスを睨んだ。

(わっ……お嬢様でも睨んだりするんだ……)

人として当たり前の行動だが、見た目がいかにも大人しそうであるだけに、睨む、という行為が似合わない気がする。

「取り込むだなんて、そんな言い方はないでしょう？」

「しかしお嬢様。少々強引なお話の進め方だと感じましたよ。」

「それは……その……」

レイリアは思わずじつと見入ってしまった。

(あのイルア様がたじたじになってる……！)

「レイリア様にとても好意をお持ちなのは分かりましたが、あれでは伝わらないでしょう。そんなに気負わず、もっと素直に頼んでみてはいかがですか？」

セティエスがふわりと笑む。

(……………！)

頬が熱くなった。それが分かったものの、それよりもいつもこんな笑顔を向けられているだろ？イルアの反応が気になって、慌てて視線を向ける。と、イルアは照れるでも恥ずかしむわけでもなく、た

だ、セティエスに笑顔を返していた。

「……そうね。こんな事って滅多にないことだから、なんだか落着かなくて浮かれてしまったわ。」

（……やっぱり、いつも間近であんな風に接していると、慣れちゃうものなのかな……）

「レイリア」

改めて名前を呼ばれ、レイリアははっと顔を上げた。イルアが少し照れくさそうにしている。

「さっきはごめんなさい。ちゃんとお願いするわ。理由もちゃんと言う。」

「あ……はい」

よく分からないままに、レイリアはしっかりとイルアの目を見つめた。

「うちに来て欲しいの。今の仕事が辞められないのなら、お休みの日にリュミエルのお世話だけでもしに来てくれないかしら？」

「……………」

つまり、さっきと言っている事は変わらないような気がする。

「本当にね、ガイアスはリュミエルの扱いに困っていて、今までの騎獣とは違うみたいなの。ガイアスのやり方では、リュミエルは私たちに心を開いてくれないわ。でも……」

イルアはとても真剣な目をしていた。少し、鋭い、と言えるかも知れない。

「リュミエルは貴女には心を開いているように見えるわ。」

言われてレイリアはリュミエルに視線を移す。リュミエルは伏せて上体を起こしたまま、じっとレイリアを見ていた。

（……リュミエル……まだ逃げてない……。この間はすぐに逃げていったのに……。もう人が近くにいても平気なのかな……）

「だからレイリア、他の誰でもなく、貴女にリュミエルのお世話をしたいの。もちろん、出来ればいいのだけれど……」

（あ……）

今この瞬間、レイリアは悟った。

（イルア様は……ちゃんと考えていらっしやったんだ……。）

リュミエル……シレイをちゃんと知る人物がいない事。リュミエルが逃げ出してしまう危険。リュミエルを、ちゃんと可愛がってくれている事。

（私、本当に失礼な事言っちゃったな……）

改めて罪悪感を感じると共に、リュミエルを本当に心配しているイルアに応えたいと思えた。

「あの……イルア様。私……本当に失礼な事を言つて、すみませんでした。私……全然考えが足りなくて……本当に申し訳ないです。」

そう言つて頭を下げた。イルアが何か言うよりも先に、レイリアは頭を上げて言葉を続ける。

「私もリュミエルの事が心配です。だから、出来る事はやってあげたいと思います。」

ぱつとイルアの顔が明るくなった。

「じゃあ……！」

「でも、待つて下さい。お話が急で……すごく嬉しい事なんです、今すぐには決められません。少しお時間を頂けませんか？」

気持ちだけで言えば、今すぐにでも『はい』と返事をしてリュミエルのお世話をしに行きたい。けれど、レイリアはもう子供ではないから、感情だけで事を決める事は避けなければいけないのだ。イルアは少しレイリアを見つめた後、小さく笑った。

「……そうね。考えてみて頂戴。一週間後に返事を聞きに来てもいいかしら？」

「はい。一週間後ですね。」

レイリアは力強く頷いた。本当に、イルアに応えたいと強く思う。

「場所はここでいいかしら？それとも、貴女の仕事場へ伺っても平気かしら。」

「あ………」

店主であるおばさんに聞いてみた方がいいだろうか。

（でも……こことお店を行き来してる間、結構待たせちゃうし……）
「こちらでもいいですか？」

「ええ、構わないわ。…それじゃあ一週間後に、またここへ来るわね。」

「はい。……すみません、お手数おかけして…」

「レイリアったら」

イルアはくすくすと笑う。その仕草が愛らしいことこの上ない。

「謝ってばかりじゃないの。こちらがお願いしているのだから、貴女が謝る事は何もないわよ。」

（イルア様って…やっぱり気さくで、優しい方…）

「はい……ありがとうございます。」

自然と笑顔になって、イルアも笑顔で頷いた。

翌日、レイリアは店主であるおばさんと、先輩である同僚に、イルア様に騎獣のお世話をして欲しいと言われた。そう、簡潔に話した。

「イルア様って、あの、イルア＝バルクス様!？」

おばさんがかなりびっくりしているが、『あの』と付けられても、そう言えばイルアの本名を知らないレイリアには、どのイルアなのか断言出来る筈もない。困っていると、先輩が助け舟を出してくれた。

「従者の方にも会ったの？」

「あ、はい。セティエス様とヴィト様です。」

ヴィトに様を付けるかさんを付けるか悩んだが、様にしておけば問題はないだろう、とレイリアは考えた。

「それはまさしくバルクス家のイルア様だね…」

おばさんは少し呆れたような口調でそう言って頷いた。

（バルクス家……って……？）

「有名な家柄なんですか？」

興味津々でそう聞くと、おばさんと先輩は顔を見合わせてため息をついた。

「……全く……あんた、少しは社会に興味を持ちな。」

「ほんとに。それにただ有名なだけじゃなくて、街じゃあ人気者なのよ？ イルア様もそうだけど、セティエス様も大人気。お二人とも絵に描いたような美貌と気品の持ち主なんだから。」

「あ……それは分かるかも。この間街へ行った時に、お二人の人気ぶりは見ました！」

途端にはしゃぎだしそうな娘二人に、おばさんは少し強めに言った。

「それでね！」

「「あ、はい……」」

「バルクス家っていうのは、古くからある名家なの。身分が高いいも関わらず、昔から庶民に優しく、思いやって下さるお家なんだよ。代々の当主様も皆気さくな方々でね。孤児院に寄付して下さるし、凶作の年は農作業を手伝って下さったりね。……『あるもの』をばらまくんじゃないく、私たちの力を蓄える手伝いをして下さるんだよ。」

「へえ……」

イルア様なら、そういう事を本気でやってくれそうだ。レイリアは深く納得した。

「で？」

おばさんは少し睨むように私にそう言った。

「申し出を受けるのかい？」

「あ……」

思わず押し黙ってしまうと、先輩がそつと肩に手を置いた。

「……あんた、花とか動物とか好きだもんね。騎獣のお世話だなんて、憧れなんじゃないの？」

「それは……確かに、あの子のお世話が出来るなんて、かなり魅力的です。」

それでも悩んでしまうのは、やっぱり身分の違う世界で、いくらリユミエルのお世話だけ（多分）をしていればいいとしても、うまくやっていける自信はないからだ。そんなレイリアに、おばさんは優しく微笑みかけた。「……自分には何も出来ないと思ってる？」

「え？」

「自信があるのは花の収穫だけ？街への買い出しだけ？」

「……………」

その通りだった。他は全て人に劣ると、自分で言える。先輩のようにてきぱき動けないし、おばさんのように対応がうまく出来るわけでもない。何をしても、人より『少し遅い』『少し鈍い』『少しとろい』。そんな自分が唯一自信……というか人より強いと思うのは、動植物との共存を楽しむ事だ。

（けど、そんなのは……）

考えていたら落ち込んできた私に、おばさんと先輩は言った。

「お受けしたら？思い切つてさ。」

「そうよ。何事もやってみれば良い経験になるわ。もしついていけなかったら、またこのお店に戻ってくればいいじゃない。ね、おばさん」

「その通りだよ。経験するには勇気の要る事だけど、ここはこの子がいれば大丈夫だから、安心して行って、もう無理だと思ったたら戻つておいで。」

そういつて笑う二人の顔を見て、レイリアは胸が熱くなって涙が溢れてきた。

「なんで泣くんさい？」

「まったくもう……」

先輩は可笑しそうに笑う。

「なんだか嫁入りみたいですよね？」

「ほんとだねえ」

二人に笑われ、いつそう涙が溢れて止まらなかった。自分でもよく分からないけれど、こんなに涙が出るのは多分、不安と、心細さと、

それを覆い隠してしまうくらいの、大きな感動のせいだろう。

（私……すごく幸せな場所にいたんだ……）

そう感じられて、すごく幸せな気分に包まれたのだった。

第二話 再会と選択（後書き）

レイリアの自信の無さは、ちょっと昔の作者の心情です。

第三話 招かれた先は

あれから瞬く間に一週間が経った。おばさん達に相談した翌日は、一日がひどく長く感じたが、まだ少し猶予があると思ったその翌日から、のんびり構えていたせいか、あっという間に時間が経ってしまった。

「どうしよう……心の準備が……整いきってない……」

そう言いながら、朝の店の掃除をしていると、同じく掃除をしていた先輩が苦笑した。

「あんたってほんとに小心者だね。そんなに緊張しなくても、イルア様は温情深く気さくな方だって話じゃない。あんたも本人に会ったんでしよう？」

「はい、会いましたけど……」

「どうだったの？」

「……すごく優しくて気さくな方でした。」

「なら、そんなに気負う事ないわよ。お世話になって、やることやって帰ってくればいいじゃない。そう言えばうちから通うの？」

言われてレイリアは苦笑したままで固まった。

「……………え？」

それを聞いた先輩も、固まった。

「……………そういう話は、してないのね？」

「あ……はい。」

「……………」

ため息をつかれるかと思ったが、先輩はぐっと堪えた様子で空を睨み、レイリアに視線を戻して言った。

「まあ、もし住み込みって事でも、おばさんは行っておいでって言うと思うから、そのまま行っちゃいな。」

「でも、それ、いいんですか？」

「いいでしょ。連絡くれれば荷物持ってってあげるしね。」

「そ、それは大丈夫です。もしそうだったら自分で取りに来ますから！」

笑われて、その先輩の笑顔を見てたら、レイリアは少し気分が落ち着いて来た。

「さ、行つておいで。籠は花畑の中に置いておいて。私が後で取りに行くから。」

「あ、はい。……じゃあ、行ってきます。」

一応身なりを整えて、先輩に確認してもらって、レイリアはお店を後にした。おばさんは今日は買い出しに行っているから、今日行く事は昨夜のうちに伝えておいた。

歩き慣れた道をもくもくと歩いて、あの花畑にやってきた。落ち合う時間は言っていなかったなので、今日は一日花の収穫とお世話、という仕事にしてくれたのだ。

（そうだ、リュミエルいるかな？）

ちょっと期待しながら柵へ入る。

「リュミエル？」

呼びかけながら探す、どうやら今日はいないようだ。

（良かった。今日は逃げ出していないんだ、きつと……）

良かったと思う反面、少し残念だったが、これからリュミエルと会える回数が増えると思うと、安堵とは違う嬉しさが込み上げてきて、知らず、笑顔になってしまう。

（これからリュミエルのお世話が出来ると……すごい幸せな事！）
心の中で呟いて、レイリアは張り切って花のお世話を始めた。

朝から作業を始めて、お昼には花のお世話は終わっていた。少し休憩を取ろうと、一旦柵の外へ出た。持って来た軽食と飲み物を取り出し、柵にもたれかかって座る。空を見上げると心地良い青空と雲で、風も穏やかで日差しも優しい。そよぐ風に花の淡い匂いが乗ってきて、レイリアは深呼吸した。

「あー…良い天気。こうやってのんびりするの、好きだなあ」

お昼を取りながら日溜まりの中にと、心地よい香りも手伝って、だんだんと眠くなってくる。

（まあ…少しくらいなら寝てもいいよね。夕方まで寝ちゃう事ってないし…）

そう思っていると、睡魔が優しく頷き返してくれているようで。

（あー…良い心地…）

幸せな気分で目を閉じた。

しばらく眠っていたのだろう。うつすらと意識が戻るが、思考は動かない。

「???」

（あれ…今…）

声が聞こえた気がした。ふわ、と木漏れ日が遮られる。

（やっぱり…誰か来たのかな？）

そつと肩に手を置かれたような気がする。しかし感覚の戻っていない体にはよく分からなかった。

「???」

また何か聞こえたような気がする。ゆつくりと肩を揺らされて、レイリアはようやく五感を働かせようと意識した。

「???」

先程よりも音が聞こえた。どうやら誰かの声だ。柔らかい声音は睡魔を緩やかに追い払う。うつすらと目を開けると、途端に五感が働いた。

「どうか起きて下さい。」

レイリアを揺り起こしていたのはヴィトだった。傍らに膝をついて、レイリアを遠目に覗き込んでいる。

（なんだか・・・リユミーに初めて会った時に助け起こしてもらった時も、こんな感じのこと、あったな・・・）

そう思ってからふと、我に返る。

（・・・・・・・・ヴィト様、なんでここに？）

そう、考えて。

「あつ・・・！」

いきなりレイリアが上体を起こしたので、ヴィトはとっさに少し引いていた。

「すみません、私・・・！」

ヴィトは驚いた顔でレイリアを見ている。

「・・・眠ってしまつて・・・その・・・」

驚いてレイリアの様子を見ているヴィトに、レイリアは恐る恐る聞いてみた。

「・・・・・・・随分お待たせしましたか？」

熟睡していたのが恥ずかしくて、まともに顔を見られない。数秒待ったのち、ヴィトをちらりと見ると、そっぽを向いて口元を押さえていた。不思議に思つて観察していると、どうも笑っているらしい事が分かった。

「あの・・・・・・・？」

声をかけたレイリアに、ヴィトははっと向き直ると笑いを引つ込めた。

「いえ。私が着いてからそう時間は経っていません。とても気持ち良さそうにされていたので、起こすのは止めた方がいいとは思ったのですが・・・イルア様の御命令もありますので、失礼を承知で起こさせて頂きました。」

言いながらヴィトは丁寧にお辞儀をする。レイリアは慌ててそれを止める。

「あの！ヴィト様、私、ただの・・・ただの庶民ですから！」

「は？」

突然そんな事を言われてヴィトは目を丸くした。レイリアはどうい

つたらしいのか懸命に考えながら言葉を紡ぐ。

「ですから、その・・・私にそんな物言いなさらないで下さい！イルア様に声をかけて頂いたのは・・・光荣ですけど、私自身はなんの変哲もないただの庶民なんです！」

最後は一気に言い切つて、レイリアはヴィトの両腕を止めた状態で必死に訴えた。ヴィトはたつぷりレイリアを見つめると、屈託ない、幼くも見える笑顔で笑った。

「あはは・・・貴女は面白い方ですね！」

お腹を押さえながらも明るく笑う様子は、とても少年らしい仕草だった。途端にヴィトに親近感がぐつと沸いて、レイリアもつられて笑った。

「お気持ちは分かりました。でもレイリア様。今はまだイルア様から直に騎獣の世話係に任命されたわけでは

ないので、“お客人”になるのです。“お客人”に礼節をとるのは、私の仕事のうちでもあります。」

年はレイリアとそう変わらないだろうに、この丁寧で毅然とした態度はどうだろう。

「そ・・・そうなんですか？」

そう問うと、ヴィトは笑顔のまま頷く。

「はい。でも騎獣の世話係を拝命されたら、私と近い立場になりますので、その時は態度を改めると思います。そうなったら驚かれるかも知れませんが・・・」

それまで屈託ない笑顔で笑っていたのが、一瞬で含みのある不敵な笑みに変わった。

「覚悟して下さい。」

それはまさに、レイリアにとっては獣のような豹変に思えた。だから、思わず魅了されてしまった。

「それと、レイリア様。」

先程とはまた違った調子で名前を呼ばれ、レイリアははっと我に返って慌てて返事をした。

「は、はい！」

「・・・この陽気で眠くなるのは分かりますが、人気のない場所で無防備に眠るのは危険です。」

「・・・危険、ですか？」

この辺りは本当に誰も通らない。誰か獣に襲われたなどという物騒な話など聞いた事もない。首を傾げるレイリアに、ヴィトは少し困ったように視線を泳がせた。

「???・・・もう少し、女性だという自覚をもたれたほうが良いと思います。」

「・・・自覚、ですか・・・」

そう返事を返すと、ヴィトはまた視線を泳がせた。しかしそれ以上は言わないと決めたようで、表情を改めてレイリアに向き直った。

ヴィトが表情を改めたのを見て、レイリアは微かに身構えた。

（ほ、本題に入る・・・？）

はい、と返事をするだけなのだから、そう身構える事もないと自分でも思うのだが、どうにも緊張してしまう。どきどきしながら言葉を待っていると、予想通りにヴィトは問いかけて来た。

「リュミエルの世話を、引き受けて下さいますか？」

じつと真剣にレイリアを見つめる。

（そんなに真剣に・・・頼むような事なの？私・・・ちょっと軽く考えてたのかな・・・）

それとも、単にイルアに返事を聞いてくるように託されたからかも知れない、とレイリアは考え直した。

（私如きに大事な役目を頼むわけない筈・・・）

小さく頷いて、レイリアはヴィトの目をまっすぐ見て返事をした。

「はい。お受けいたします。」

ほっとしたようなヴィトの表情に、レイリアも緊張を解いて頭を下

げた。

「私は人よりどんくさいってよく言われますけど、精一杯リュミエルのお世話を頑張ります！」

くすつとヴィトは笑う。

「それで、お仕事の方はいかがされますか？」

「ええと・・・お店の主人が、お世話に専念しなさいと言ってくれたので、仕事はお休みさせてもらいました。」

「それは良かった。では屋敷へ向かいましょう。荷物はどうされますか？こちらで新たに揃える事も出来ますが。」

「・・・えっ!？」

（やっぱり住み込みなの!？）

思い切り動揺するレイリアを見て、ヴィトは少し慌てて付け加えた。
「いえ、ご自分の家から通われた方が良いでしょうか・・・？」
「それでも構いません。」

「・・・」

「・・・ですが・・・イルア様が貴女を屋敷にお招きする事をお望みなので、出来れば屋敷に来て頂けないでしょうか・・・？」

（・・・イルア様が・・・）

嬉しさと胸がじんとなる。けれど本当に移り住んでしまっているのだろうか、と躊躇ってしまう。

（だって、身分が違いすぎるし・・・お屋敷で働いた事なんかないから、ものすごく迷惑になっちゃいそうで怖い・・・）

「あの・・・」

レイリアは恐る恐る言った。

「私、礼儀もまるで分らないですし、お屋敷で働いた事なんかないので・・・ものすごく迷惑になってしまうと思います。」

「・・・」

ヴィトはぼかんとしている。そして、笑い出した。

「あははっ、そんな事は分かっています。イルア様もご存知ですよ。」

「

「・・・・・・・・・・」

礼儀知らず、という事を楽しげに笑われて、レイリアはどうしていいかわからずにヴィトを見ていた。多分、情けない顔になっていると思う。

「すみません、俺もそんなに礼儀正しく出来るわけじゃないので・・」

（あ、今・・・俺って言った）

驚いてヴィトを見つめていると、ヴィトはまだ少し笑いながら続けた。

「その身一つで来て頂いて大丈夫です。礼儀作法はイルア様とセテイエス様がしっかり教えて下さいます。あ、俺も分かる所はお教えますすし、ガイアスも。」

驚きとありがたさで潤みそうな瞳に、ヴィトはふわりと優しく笑った。

「俺なんか野生児でしたから、レイリア様の方がまだ礼儀をお分かりですよ。・・・そんな俺でもなんとか使いが出来るくらいになっただんですから、何も心配いりません。」

そんな言葉が余計に胸にきて、レイリアは本当に目が潤んだ。それを見たヴィトの表情が凍り付いたが、レイリアは構わず感謝する。

「あ、ありがとうございます・・・!」

言ったら少し涙が溢れて。瞬きすると、零れ落ちた。

（あれ・・・何も泣く事じゃないのに・・・）

自分でも驚いて頬を拭う。泣かれたヴィトは驚きのあまり固まっているようだ。涙はすぐに収まったが、理由を思い当たったらまた少し零れた。

（私・・・この一週間、ものすごく緊張してたんだ・・・お店出た時はもう落ち着いたと思ってたのに・・・）

「すみません、なんだかほっとして・・・」

そう言って笑うと、ヴィトは困ったように歩み寄った。

「大丈夫ですか？俺・・・何か不安にさせるような事・・・？」

「いいえ」

もう涙が収まった瞳で、レイリアはにこりと笑った。

「イルア様がとても偉い方だってこの間知って、すごく不安になってたんです。私、何事にも疎くて。私にわざわざ声をかけて下さって・・・私、人より出来る事なんて何もないのにつて。でも今日しつかりヴィト様が迎えに来て下さって、本当に誘って下さってるんだなあって思つて。お屋敷に招いて下さるって聞いてまた不安になつて。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「でも、皆さん本当にお優しいです。それがすごく、心強くて。」
ヴィトはようやくほっとしたように息を吐いた。

「・・・ヴィト様も、とっても気安くして下さい、安心します。」
その言葉に、ヴィトは困った様子で視線を泳がせた。

「不安が少しでも軽くなつたのなら、良かったです。」

それだけ言つて、一つ頭を振った。

「・・・・・・・・では、イルア様もお待ちですし・・・・屋敷へ行きましょう。」

そう誘われて、レイリアは嬉しくて微笑んだ。

「はい！」

イルアの待つ屋敷へは、ヴィトが用意していた馬車で向かった。街で見かけたあの馬車だ。イルアが乗っていたその馬車に、はたして自分なんか乗っていいんだろうかと躊躇ったが、御者席に乗ったヴィトに微笑んで「どうぞ」と促されると、戸惑いよりも嬉しさが勝つて心地よく乗れた。馬車の窓から眺めていた景色は、見慣れた景色から街へと変わって、さらに洗練された景色へと変わっていった。

（街より奥つて行つた事がなかったけど・・・こんな風になつて

んだ・・・)

街より奥、というよりは、レイリアが入った事があるのは街の手前で、奥の方に騎獣屋や魔道具など、高級な店が連なっているようだった。

そんな通りを過ぎて更に馬車は進む。並木が続く道は進むにつれて店も家なくなり、土だった地面はやがれ煉瓦で作られ、もはや庶民が安易に入り込めない雰囲気になっていた。

(もしかして・・・いつの間にやらイルア様のお家の敷地内・・・とか?)

「あ・・・!」

屋敷が見えた。華美な印象はどこにもなく、温かで優しい雰囲気も屋敷だった。一般的な庶民の家のような暖かさ。その家が大きくなったらこんな感じになるのだろうか。レイリアはほっとした気持ちで屋敷を見つめた。

(イルア様の人柄みたいなお屋敷・・・。立派だけど近寄りがたい雰囲気は一切ない。)

イルアの屋敷は、まず塀に囲まれている。塀の上には鋭い飾りが付いていて、侵入者を拒む為のものだろう。

(あの飾りもとても素敵。こういうお屋敷はあんなところまで綺麗に作るのね・・・)

塀から距離をあけて屋敷林が取り囲んでいる。その気は細身で、上に長く伸び、細身の明るい緑の葉をたくさんつけていた。幹は白く、煉瓦の塀や芝と相まってとても穏やかな雰囲気を醸し出している。

(あつたかくて素敵なお屋敷!)

そういった雰囲気だけでもなんとなく安堵を感じて、レイリアはほっとため息を漏らした。

馬車は塀の大門を通り抜け、少しして屋敷の玄関で馬を止めた。どうしていいのか分からずに座り込んでいると、御者席から降りたヴィトが扉を開けて声をかけてくれる。

「どうぞ、レイリア様。」

そう言って手を差し出される。立ち上がったものの、その手を、レイリアはまじまじと見つめた。

「・・・？どうかされましたか？」

聞かれて、レイリアは困った。

（・・・これって・・・何か、お約束みたいな事なの？・・・き、聞きづらい・・・）

自分の無知が恥ずかしい。こうして当たり前のように知らない事をされると、余計に。だが、こうして突っ立ってヴィトの手を眺めているのも恥ずかしい。

「あ、あの・・・どう・・・すれば？」

ヴィトの手を前に、行動に困る。それを見て、ヴィトは言葉を失った。きつと当たり前すぎてレイリアの質問の意味が分からないのだろう。しばらく、レイリアはヴィトの手を、ヴィトはレイリアを見つめた。そして。

ガチャン、と音がして玄関の大扉が開く。はっとして、ヴィトはレイリアに差し出した手を引っ込め、さっと頭を垂れた。レイリアはおろおろしてしまって、取りあえず扉から出てくる人物をちらりと見る。それは、セティエスだった。レイリアは未だ馬車の中で立ち尽くしている。それでセティエスと同じくらいの目線なのだから、今更ながらセティエスは背が高いのだと思った。

「・・・どうしました？そんなところで立ち尽くして。」

セティエスは心底不思議そうにレイリアを見て言う。相変わらずの美貌だ。レイリアは動揺して慌てて踏み台に足を進める。

「あ、い、いえ！」

慌てていたから、レイリアは思ったよりも段差があった踏み台を降りる拍子に、駆け下りるといふよりは落ちるようになった。

「わっ」

「「危ない！」」

転ぶと思つて前へ突き出した両手は、すぐに抱きとめてくれたヴィトの腕を包むようにしがみついていた。抱きとめられた時には正面にセティエスも支えようとしてくれていて、レイリアは呆然とする間もなく、恥ずかしさでいっぱいになった。

「す、すみません！慣れなくて！」

さつとヴィトにしがみついていた手を離す。頭を下げようにも二人との距離が近くて下げられず、レイリアは可能な限りうつむいて謝った。

「来たばかりで迷惑かけて・・・すみません！」

「足は痛みませんか？」

セティエスにそう優しく聞かれて、レイリアは即答する。

「大丈夫です！すみません！」

「怪我がなくて何よりです。よく来てくれましたね。歓迎します。」

ふわりと微笑まれてレイリアは顔が熱くなるのを感じた。

「はい、あの、ありがとうございます！」

「まずは部屋に案内します。」

ヴィトがそう言ってくれて、レイリアは改めてお礼を言った。

「ありがとうございます！お世話になります。よろしく願いします！」

慌てふためくレイリアの様子に、セティエスとヴィトは目を合わせるとくすりと笑った。

「そう言えばセティエス様、お出かけですか？」

そうヴィトに問われ、セティエスは頷いた。

「お嬢様を待たせているからな。」

そうしてレイリアに視線を戻す。

「今日来て頂いたのに申し訳ありませんが、イルア様も私も、今日

は夜まで戻れません。ヴィトとガイアスが貴女に屋敷の事や仕事についてお教えしますので、何か分からない事や不自由があれば言って下さい。」

「あ・・・はい、分かりました。」

少し残念な気持ちは拭えないが、ここで働くのだから会える機会は格段に増える。そう考えてレイリアは笑った。

「気にかけて頂いてありがとうございます。」

ぺこりと頭を下げる。セティエスは小さく微笑むと、ヴィトに向かって口を開いた。

「ヴィト、留守を頼む。」

「はい、セティエス様。いつてらっしゃいませ。」

礼をするヴィトに頷いて、セティエスは大門へ向かう。

（あ・・・）馬車から少し離れたところにいつの間にか馬のような四肢は獣のような爪を持つ獣？セツキがいた。セツキの手綱を引いているのは、艶やかな赤銅色の髪と目を持つ男だった。顔はよく見えない。だが何か、戦士のような鋭さがあるように感じた。

（・・・あんな方もいらっしゃるんだ・・・）

思わず目を奪われていたレイリアを、ヴィトの声が引き戻した。

「レイリア様、こちらですよ。」

「あ、はい！」

屋敷内は、広がった。広いけれど、閑散とした雰囲気はない。それに、安堵する。ヴィトが真っ先にレイリアの部屋に連れていくてくれた。

「ここがレイリア様の部屋です。一階は使用人の部屋と客間です。二階にイルア様の部屋と食堂があります。ちなみに俺の部屋はあそこです。」

ヴィトが指差す先は、廊下の突き当たりにある扉だった。

「何かあれば、昼夜問わず言って下さい。」

（昼夜問わず・・・そんな大層な・・・）

思いつつも、ありがたく頷く。

「はい。お世話になります。」

ヴィトはそれに頷くと、レイリアの部屋の扉を開けた。

「わあ・・・！」

歓声を上げるレイリアに、ヴィトはくすりを笑みをこぼした。

「荷物をどうされるか分からなかったのですが、イルア様がどうしても言い張って、家具を揃えられたんです。どうですか？」

部屋はまず、レイリアが以前店であてがわれていた部屋よりも広かった。それに加え、寝台、書棚等、とても良い香りのする木材で統一されていた。部屋にある窓は大きく、出窓になっている。そこには素朴な花が飾られていて、人様のお屋敷とはいえ、とても親しみある雰囲気を感じた。

「これ、イルア様が揃えて下さったんですか？」

「はい、そうです。なんだか張り切ってますが、『もし断られたらどうするおつもりですか？』なんてとても聞けなかったんですよ。」

「

思い出してくすくす笑うヴィトに、レイリアも笑った。

「そんなに楽しみにして下さってたなんて、感激です！」

「お気に召しましたか？」

畏まってそう聞かれると非常に違和感を感じるが、レイリアは大きく頷いて笑った。

「はい！とっても！すごく素敵です！」

「それで・・・今日のところは着替えなどこちらで用意させてもらいます。夜にはイルア様もセティエス様もお帰りになりますから、そうしたら身の回りのものや当面の仕事など、話があると思います。取りあえず今日は、この屋敷を散策したり、リュミエルと遊んで頂いて良いですよ。」

「・・・えっと・・・もし何か出来る事があれば、何かお手伝いがしたいんですが・・・」

そう言うと、ヴィトはちょっと驚いた顔をした。

「来て早々、仕事をしたいんですか？」

「はい。私、その為にこちらに置かせてもらってますし……なるべく早く慣れたいんです。」

「………」

「あ、もちろんご迷惑じゃなければ、です！」

「………そうですか。」

「ヴィトはしばらく考え込んでから言った。

「それじゃあ、取りあえず騎獣舎にいきましょう。ガイアスを紹介します。」

「あ……はい！」

（ガイアス様って……確かリユミーの……騎獣のお世話をして
いる方だね。）

ヴィトの後に続きながら、レイリアは密かにわくわくした足取りで
騎獣舎へ向かった。

騎獣舎は屋敷を出てすぐのところにあったが、柵で囲ってあった。
レイリアの背の何倍もある高さ。柵は黒く長い鉄が、やっと手を通
せるくらいの間隔で地面に打ち付けてある。どこが入り口が分から
ないような柵だ。ヴィトが入り口らしいところを開け、レイリアを
招き入れるとしっかりと閉じた。どこが入り口が分からないが、ど
こが鍵なのかも分かりづらい。柵の中には大きくて立派な騎獣舎が
あった。獣の気配がひしひしと感じられる。庶民の飼う獣達とは訳
が違うのだろう。ヴィトは鉄製の扉の前に立つと、少々乱暴に叩い
た。

「ガイアス！」

少しして、中から獣達の吠え声と一緒に男の怒鳴り声がした。そう
でもしないと獣の声にかき消されてしまう。

「入れ！」

扉は横に開かれた。

（あ……引き戸だったんだ。てっきり前後に開くやつかと思って

た。」

ちよつと驚きつつもヴィトに続いて騎獣舎に足を踏み入れた。途端、横合いから大きな獣の唸り声がして思わず飛び上がる。

「きゃっ！」

慌ててヴィトに駆け寄ると、ヴィトは宥めるように肩を軽く叩いた。

「檻に入ってますし、これだけ距離があるから大丈夫ですよ。」

「あ……」

言われてみるとその通りだった。獣達の檻は、レイリアがいるところからは距離がある。万一檻からでたとしても、すぐには手の届かない距離だ。ほつとして、恥ずかしくなつてヴィトに謝る。

「ごめんなさい。驚いちゃって……」

するとヴィトは面白そうに笑った。

「いえ。なんだか新鮮な反応で、ちよつと楽しいですね。」

「え……？」

（怖かったのを楽しいと言われても……）

ガシャン、と今度は間近で大きな音がして、またも飛び上がってしまった。みると、赤銅色の髪、赤銅色の瞳の男が大きな鋤を支えにしてこちらを見ていた。足下には様々な道具が無造作に置かれている。男の鋭い視線に、僅かに心が強ばった。

「ガイアス、リュミエルはどうだ？」

ヴィトに問いかけられると、男？ガイアスはちらりと奥を振り返った。

「……今日は大人しい。」

そしてまた、視線をレイリアに戻す。挑むようなその視線に、レイリアは浮き足立っていた気持ち之急速に冷えていくのを感じた。

「レイリア様。この男がガイアスです。屋敷内では主に騎獣の世話と調教をしています、屋敷内外の警護も彼の仕事です。」

（いかにも戦うの得意そう……）

こわごわしながらも、レイリアは頭を下げて挨拶をした。

「レイリアです。今日からお屋敷にお世話になります。よろしくお

願います。」

「・・・・・・・・・・」

反応は、ない。顔を上げると、ガイアスは黙ってレイリアを見ていた。

「ガイアス。レイリア様は今日から仕事に馴染みたいとおっしゃってるから、お教えして。」

「・・・・・・・・・・」

「ガイアス・・・」

呆れたようにヴィトが声をかけると、ガイアスは視線をヴィトに移した。

「仕事については明日教える。」

「あのな・・・」

「そんなひよろっちいのに仕事を教えても当分は使い物にならない。」

「

「お嬢様から正式に任命されるまでは“お客人”だろ？その物言いは失礼だぞ！」

「お前、騎獣の世話をした事はあるのか？」

ふいにレイリアに視線が戻った。強ばる口を懸命に動かして言葉を紡ぐ。

「い・・・いえ・・・こんなに大きな獣はお世話した事ありません。」

「つまりは飼い犬程度しか世話が出来ないって事だろう。」

「ガイアス！」

怒気をはらむヴィトの声にも、ガイアスは素知らぬ顔で続けた。

「俺は忙しい。今日は教える予定じゃなかった。だからそいつに割く時間はない。」

それだけ言っただけ大きな鋤を肩に担ぐ。そして、一言。

「リュミエルは奥だ。俺の邪魔をしないと云えるなら、好きに遊んでいろ。」

そうしてさっさとその場を後にしてしまった。ヴィトがため息をも

らす。

「……すみません、レイリア様。ガイアスは……かなり口が悪くて。」

深く頷きかけて慌てて首を横に振った。

「い、いえ！……本当の事ですし……」

言った途端にかなり落ち込む。

（自分でも思ってた事だけど……私って、やっぱり何にも出来ないんだよね。……あの人にお仕事教えて貰うのにも、かなり迷惑かけてイライラさせちゃいそう……）

はあ、と思わず漏れた溜息に、ヴィトが顔を上げた。

「あれでも名門貴族の出なんですけどね……。貴族令嬢もこそつて言いよる程の名家なんですが、あの口ですから、一言でも話しかけたが最後、皆さん泣くか怒るかしてしまっんですよ。」

「えっ……！」

「まあよっぽど勇氣ある令嬢でなければ最初の無視に耐えられず諦めるんですが、稀にいらっしゃるんですよ。あの容貌に心酔して粘る方が。泣いても怒ってもあまりのショックで、あまり大事にはならないんですけどね。」

「……」

（た、確かに惹かれる容貌だけど……あんな目で見られたらとても好意は持てない……）

「あんな口なので滅多に公の場には出ないんですよ。イルア様からもあまり喋らないように言われてますし。」

「え、そうなんですか！？」

（公の場で喋るの厳禁って……）
レイリアは思わずガイアスを探した。

（名門貴族の方なの？）

「ああ、もちろん貴族としての振る舞いは出来ますよ。でも、あれが自然なんです。というか口が悪いという気は全くないんですよ、ガイアスは。」

(それって……)

色々な思いが浮かんでくるが、ふるふると頭を振って思考を止めた。
「……リュミエルに会っていかれますか？」

ヴィトが優しく笑んでくれる。それだけで、落ち込んだ気持ちが少し浮上した。

「はい！是非！」

「ではこちらへ。」

ヴィトの後について行くと、先程ガイアスが示した奥に、他の檻とは少し離してリュミエルの檻があった。檻を覗くと、リュミエルは体を横たえてこちらを見ていた。

「リュミエル！」

呼びかけるとリュミエルは、長い尾をぱた、ぱた、とゆっくり振った。ヴィトはその様子を見て、不思議そうにレイリアを振り返る。

「……レイリア様は一体どんな事をしたんですか？」

「え？」

「イルア様がいらしても、リュミエルは尾さえ振らないんですよ。」

「え、そうなんですか？」

改めてリュミエルを見る。リュミエルは真っ直ぐにレイリアを見て、長い尾をぱたりと振っている。

(イルア様と私の接し方なんて、そう変わらないと思うんだけど……)
・)

「入りますか？」

ヴィトは檻の扉に手をかけてそう聞いてきた。レイリアは喜んで頷く。

「はい！」

素直に大きく頷くと、ヴィトが開けた扉の隙間に体を滑り込ませるようにして入る。間を空けずにヴィトも入り、内側から鍵をかけた。そうしているのを見ると、リュミエルが外に出よう、出ようとしていたのだと実感した。レイリアが檻に入ると、リュミエルはゆっくりと伏せていた上体を起こして瞬いた。

「久しぶりね！」

なんの躊躇いもなく頬に手を触れると、リュミエルは目を細めてすりよせる。

「もう逃げ出したりなんかしないでね。私、ここで働かせて頂く事になったの。一所懸命にお世話するから、ここにいてね。」

答えるようにリュミエルが喉を鳴らす。それが嬉しくて、レイリアはリュミエルの首にそっと抱きついて頬を寄せた。

（うーんふわふわ！気持ち良い・・・良い匂い）

思わずすり寄せていると、リュミエルがごろごろいつているのが触れ合ったところから伝わってきた。

（リュミエルも気持ちよく思ってくれてるんだ・・・）

幸せいっぱいひとときに酔ってしまふ。そのまましばらくそうしている、肩にのつたリュミエルの頭がずっしりと重くなってきた。優しくその首を撫でながら、そっと体を離してその綺麗な緑の瞳を覗き込む。

「寝かせてあげたいけど、私じゃリュミエルの頭を支えられないわ。ごめんね・・・」

謝ると、リュミエルは優しくレイリアの頬を一舐めた。

「ふふっ、ありがとう。膝なら貸してあげられるわよ。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

はっと気付いて顔を上げた。

（いけない、ヴィト様とガイア様がいたんだった！）

慌てて二人を探す。ヴィトは間近でこちらを凝視していた。呆気に取られている。そしてー。

（ガ、ガイア様まで・・・！）

柵越しに、ガイアスまでもが作業の手を止め、レイリアとリュミエルを凝視していた。啞然としているようだ。

「・・・・・・・・・・」

（は、恥ずかしい！すっかりお二人がいるのを忘れてリュミエルの気持ちよさに浸っちゃうなんて・・・！）

「あ、あの・・・」

この場の雰囲気を変えようと何か言おうと思うのだが、何も言葉が浮かばず、えっと、あの、と小さく繰り返すだけだった。

「・・・・・・・・・・」

その間にガイアスの目がずっと細められ、レイリアは極度の緊張で必死にヴィトに助けを訴える。

「・・・・・・・・・・おい」

（な、な、何！？）

自分の事かと焦るレイリアの視線をすっかり捕らえ、ガイアスは続けた。

「ちよつと来い。」

「えっ！？」

ひたすら焦るレイリアに、我に返ったヴィトが優しく背中を押す。

「あ、どうぞ。」

扉を開けられたので出るしかない。扉を出ると同時にガイアスに腕を掴まれ、心臓が縮み上がった。

（なな何！？私、どうなるの！？）

ずんずん連れて行かれて、着いたのは入り口の近くにある檻の前だ。入ってきた時に唸っていた獣は、リュミエルより遥かに大きく、伏せている状態でも明らかにレイリアより大きかった。

（怖い・・・！）

獣は大きく、漆黒の毛に覆われていた。暗い檻の中に潜むその姿はまるで闇のよう。その闇から覗くのは黄金の爛々と輝く目だった。その目は、レイリアを拒絶していた。激しい、拒絶だった。目が合ったまましばらく動けないでいると、小さな呟きが聞こえた。

「……あいつだけか……」

ガイアスはそう呟くとレイリアの腕を離した。レイリアはすぐに後ずさる。小さく震えているのが自分でも分かった。

（寄るなって言ってる……）

さらに後ずさったレイリアの背に、暖かくて優しい手が触れて、レイリアは足を止めた。

「大丈夫ですか？」

ヴィトが苦笑してこちらを見ていた。その顔を見てほっとする。

「……はい、大丈夫です。ちよつと……びっくりしちゃって。」

「ガイアスは乱暴ですからね……」

聞こえるようにガイアスに言うが、ガイアスは無視だ。

「いえ、あの……どちらかというと、あの子です。」

目を合わせないようにちらりと檻を見る。

「……あいつですか。確かに凶暴ですが……」

「……あの子は、私の事が嫌みたいです。」

その台詞にヴィトはちよつと微笑んだ。

「ああ、あれは誰にも懷きませんよ。ガイアスにしか触れないんです。」

「いえ……」

（会ったばかりだというのもあるけど、こうして立っていても、ヴィト様の事は嫌ではないんだわ、あの子は。けど……それを言うても仕方ないわよね……）

「さあ、今日はこれくらいにして……少し休まれては如何ですか？」

言われた途端にどつと疲れを感じて、レイリアは素直に頷いた。

「はい……そうさせて頂きます……」

ヴィトに続いて騎獣舎を後にする。扉が閉まる瞬間、ちらりとガイアスがレイリアを見た。しかし、レイリアは気付く筈もなかった。

部屋へ戻り、疲れは感じていたが横にはなつていらなくて、レイリアはイルアが用意してくれたものをじっくりと見ていた。

「どの家具も素敵なものを選んで下さったのね、イルア様・・・ほんとに気さくで優しい方！」

用意してくれた服はどれも綺麗だったが、レイリアからしてみれば普段着るのにはもったいないくらい上等なものだったので、眺めて楽しむだけにした。

（・・・でもこれしかないと着ないわけにはいかないわよね・・・。やっぱり荷物は取りに行った方がいいかな。）

そわそわしながら部屋を見回し、これからの事を考えて、ふと思いついた。

（お風呂とか、どこなんだろう？それに食事の支度くらいは手伝わないと。）

思い立つたら部屋でじっとしていられず、結局少しも身体を休めずにレイリアは部屋を後にした。

（食堂は二階って言うていたから・・・厨房も二階よね、きっと。

一階は使用人の部屋と客間だと言っていたけど・・・二階には勝手に行かない方がいいのかな・・・。）

色々考えて、取りあえず一階を散策する事にした。ヴィトはどこで何をしているのだろう。ヴィトの姿を探しつつ、うろつくと歩いて取りあえず部屋の場所など覚えていく。どうやら使用人の部屋らしきものは六部屋あり、廊下を挟んで二部屋と四部屋で並んでいた。そのうち一つは他と比べてかなり広く取っており、多分、セティエスのものだと思われた。

（このお屋敷に、使用人は私を含めて四人だけ？・・・イルア様って、聞いた感じでは身分の高い方みたいだったけど、案外使用人は少ないのね・・・こんなものなのかな？）

決して複雑ではない間取りを歩いていると、どうやら中庭のような場所が見えた。その木漏れ日に惹かれて足を進める。？と、ヴィト

の姿が見えた。

（何してるんだろう？）

邪魔をしないようにとそっと近づくと、意外な光景が飛び込んだ。

（え・・・ヴィト様って、こんな事もされるんだ・・・）

慣れた手つきで洗濯物を取り込んでいる。よく見ると男物しかないから、もしかするとイルアは自分の世話は自分でしているのかも知れない。

（・・・こういうもののなの？）

呆気にとられてヴィトの様子を見てみると、畳み終えて籠を持ったヴィトが、ずっとこちらを向いた。しっかり目が合っている。

「どうしました？」

その目がきょとんとしている。レイリアは慌てて答えた。

「あ、あの、お屋敷に慣れようと思って見させて頂いていたんですが・・・その・・・」

後の言葉が出て来ずに、レイリアは困り果てて黙ってしまった。

（まさか洗濯物を取り込む姿が意外すぎた・・・なんて言えない！）
そんなレイリアに首を捻りながら、ヴィトは歩み寄ってきた。

「・・・もしかして、俺が家事をしてるのに驚かれました？」

（あ、また俺って言ってる・・・）

そう思いながらも口にはせず、レイリアは視線を泳がせた。

「あの・・・ちょっとだけ。」

「そうでしょうね。まあご覧の通り、使用人は男三人しかいなかったの、家事は俺の仕事なんですよ。」

「・・・イルア様はご自身で？」

そう問いかけると、ヴィトは苦笑した。

「そうして頂かないと・・・ちよつと、問題が。」

「あ・・・そうですね！すみません！」

慌てて謝ると、ヴィトは笑って首を横に振った。

「ああ、そうそう。これからはレイリア様にイルア様の洗い物をお願いします。」

「はい！分かりました。・・・他の方のは、いいんですか？」

そう聞くと、ヴィトはぴたりと固まった。

「・・・・すみません、変な事を聞きましたか？」

「あ・・・・いえ、その・・・・」

うろつろと目を泳がせ、しばらくしてから言った。

「俺たちの分は俺がやりますから、大丈夫です。」

「あ、はい。分かりました。」

ふー、とヴィトが息を吐く。その様子にレイリアは首を傾げたが、何も言わないでおいた。

（男物のお洗濯ならお父さんと、お兄さんのを洗っていたから、あまり抵抗はないけど・・・当人が気になるのだったら無理に申し出なくていいわね。）

「で、屋敷内の様子は分かりましたか？」

「あ・・・・お部屋は大体分かったんですが、お風呂場はどこでしょう？あと、二階は上がらない方がいいですか？」

ああ、とヴィトは頷いた。

「いえ、上がって頂いて構いませんよ。むしろこれから、イルア様の御用を聞く事も多くなるでしょうから。」

「あ・・・・そうですね。」

「私も丁度きりがつきましたし、屋敷を案内しますよ。」

「あ、ありがとうございます！」

ぺこりと頭を下げるレイリアに笑いかけ、ヴィトは歩くように促した。

「その前にこれを部屋へ届けますね。」

そう言っただけで持っていた籠をゆらゆらと揺らす。

「一緒にしてもいいですか？」

「ええ、もちろん。その方が部屋も覚えるでしょう？」

「はい！」

そのままヴィトの後についていく。

ヴィトはまず、広い使用人部屋へやってきた。

「ここはセティエス様のお部屋です。」

（やっぱり・・・）

扉を開けて入っていく。外で待っていた方がいいだろうかと戸惑っている、ヴィトに手招きされたのでおそろおそろ入室した。ヴィトは籠の中から衣類を取り出すと、さつさと洋服筆筒にしまい込む。そして、すぐに入り口へ戻ってきた。セティエスの部屋はこざっぱりとしていた。

「あの・・・お掃除もヴィト様が？」

「そうですね・・・大抵は本人がやっていますが、忙しい時は私が片付けていますよ。セティエス様はよく出来た方なので、そうそう汚れている事はないですけどね。」

それに比べて、とヴィトは溜息をつく。

「ガイアスは散らかしっぱなしですよ。今から行きましょう。」

「は、はい・・・」

ちよつと緊張しつつもついていく。セティエスの部屋から一つ空き部屋を挟んで、廊下の突き当たりにあたる部屋がヴィトの部屋だ。その隣がガイアスの部屋で、その隣がレイリアの部屋だった。

（ま、まさか隣だなんて・・・）

どうしよう。緊張して物音も立てられないに違いない。

「さ、どうぞ。」

自分の部屋でもないのにそう言って、ヴィトは扉を開けてレイリアを促した。かなり緊張しつつそつと部屋へ足を踏み入れる。

「・・・・・・・・・・！」

あちらこちらに色んな物が散らかっていた。武器だったり本だったり衣類だったり。足の踏み場はあるものの、ゆっくりでないと歩けない。絶句するレイリアを見て、ヴィトが楽しそうに笑った。

「すごいでしょう？まあ肌着はないから大丈夫ですよ。」

「えっ!？」

はっとしてヴィトを見ると、楽しそうにこちらを見て笑っている。

「・・・ヴィト様!」

抗議の声を上げると、さらに面白かったらしい。ヴィトはお腹を抱えて笑った。

「あははっ、そんなに反応すると思わなかった!」

（もう言葉遣いも素になってるわ・・・）

しかし素のままであるうヴィトの態度は、よそよそしさがなくてほっとするものだ。

「ま、まあ冗談はともかく・・・」

くくっ、と笑いを堪え、ヴィトは続けた。

「この部屋も、出来たら片付けてやって下さい。散らかすのも片付けられるのも無頓着だから、どんな片付け方しても、文句の一つも言いませんから。」

「・・・はい。」

まだ笑っているヴィトに少しむくれつつ、レイリアは殊勝に頷いた。それがまた、ヴィトを笑わせたようだった。けれどこれ以上はレイリアの機嫌が悪化すると悟ったらしく、懸命に笑いをおさめる。

「・・・じゃあ最後は俺の部屋ですね。」

そう言っただけでガイアスの部屋を後にした。

（あれ？片付けなくていいのかな・・・？）

気になったが言い出せない。ヴィトはさっさと自分の部屋へ来ると、レイリアを促した。先程までとは違い、部屋の主に招かれる形になったので、レイリアは小さく挨拶をした。

「・・・失礼します・・・」

「どうぞ。」

言っただけでヴィトは自分の衣類を片付けた。ヴィトの部屋も綺麗に片付けられていた。

「・・・ヴィト様は綺麗好きですか？」

「え？・・・まあ、そうかも知れませんが。片付けは綺麗にするように、セティエス様から言われてますから。」

「・・・・・・・・」

（それは綺麗好きとは違うような気がするけど・・・）

「あ」

ヴィトは何か思い当たったらしく、急に真剣な顔つきになった。思わず緊張する。

「どうされたんですか？」

「・・・・・・・・」

ヴィトは少し考えた後、レイリアに視線を合わせた。

「・・・何かあれば昼夜問わず俺に言ってお下さいと言いましたが・・・」

「」

（・・・・・・・・・・が？）

意味深な間に思わず見守る。

「・・・新月の夜だけは、俺に近づいちゃ駄目ですよ。」

「・・・・・・・・・・？」

ヴィトの顔があまりに真剣なので、レイリアはぎこちなく頷いた。

「新月の夜・・・？ですね。・・・分かりました。」

（部屋じゃなくてヴィト様自身に？）

疑問が浮かぶが、聞ける雰囲気ではない。

（新月の夜だけはって・・・狼男みたい。あ、あれは満月か。）

「さあ、じゃあ二階へ行きましょうか。」

そう促されて部屋を後にする。

二階への階段は半月状の螺旋になっていた。

「イルア様の部屋はこっちです。」

そう言っつてヴィトが部屋の扉を開けた。

「ここも掃除してお下さいね。あの方もあれこれやりっぱなしなので。」

「」

「・・・じゃあこの綺麗さは、ヴィト様のおかげなんですね。」

イルアの部屋も綺麗に片付けられていて、さっきの説明を聞くまでは、さすがお嬢様の部屋！と思った程だ。

「まあ、私しか片付けるものがいまね．．．。」

苦笑いするヴィト。レイリアは労いの意味で笑いかけた。

「ご苦労様です。」

「これからはレイリア様に分担出来るので助かります。」

その言葉に、レイリアは満面の笑みで頷いた。

「．．．お役に立てるように頑張ります！」

第三話 招かれた先は（後書き）

お気に入りにして下さいました方々・・・ありがとうございます！

第四話 バルクス家の人々

その日の夜遅く。レイリアは、イルアとセティエスの帰りを待っていた。遅くなるだろうが、帰りを待ってイルアから騎獣の世話係を賜るように、とヴィトに言われていたのだ。

昼間、ヴィトに一通り屋敷を案内してもらい、仕事を教えて貰った。夕方には風呂にも入れてもらい、（男女別であったため、必然的にイルアと同じ風呂場を使う事になり、かなり緊張して疲れもあり取れなかった気がする。）夕食はヴィト、レイリア、ガイアスの三人で摂った。ヴィトはぼつぼつと話しかけてくれたが、ガイアスは終始無言で食を進め、食べ終わると香り良い紅茶を一杯飲み、すぐに食事部屋を出て行ってしまった。そんなガイアスを見やり、ヴィトが苦笑いしていた。

夕食を終えると、ヴィトは居間へ誘ってくれて、一緒に紅茶を飲みながらイルアとセティエスの帰りを待つ。かなり待っていたがまだ帰ってこず、レイリアは必死に睡魔と戦っていた。

「・・・大丈夫ですか？」

心配そうなヴィトの声が聞こえ、レイリアは睡魔と戦いながらも懸命に首を振って口を動かし、声を出す。

「・・・はい。」

そんな必死さが伝わったのか、ヴィトは柔らかく笑って氣遣ってくれる。

「もう真夜中近いですね・・・。寝てしまってもいいですよ。」

「・・・いいえ。私・・・待っています。」

降りてくる瞼と闘う姿に、ヴィトはくすりと微笑んだ。そして、音を拾う。

「レイリア様。お帰りになりましたよ。」

「はい・・・あ、イルア様？」

「そうです。」

馬車の音が聞こえた。近づいたそれは止まり、馬車の扉が開く音、こちらへ向かう音が聞こえて、ヴィトが玄関の扉を開けて主を迎え入れた。

「お帰りなさいませ、イルア様。」

「ご苦労だったな、ヴィト。」

「ただいま！遅くなつて悪かったわね。」

開けられた扉から先に現れたのはセティエスで、当然のようにイルアの手を引いていた。そしてイルアは、ヴィトへ言葉をかけるとすぐにレイリアに気付いた。そして、とても嬉しそうに笑ってくれた。

「レイリア！来てくれたのね！」

「はい、イルア様！あの・・・」

小走りで寄つて行つたレイリアを、イルアは即座に抱きしめた。

「良かった！嬉しいわ！なんて素敵な事なんでしょう！」

「あ、あの・・・」

困惑するレイリアの目に、くすりと微笑んだセティエスが映る。それを見ただけで頬が熱くなった気がした。

「お嬢様。レイリアが困っていますよ。せめて挨拶くらいさせてやるべきでは？」

「あつ、ごめんなさい。それもそうね。」

ぱつと身体を離すと、イルアはにこりと微笑んだ。

「ようこそ、バルクス家へ！」

「はい、あの・・・ありがとうございます！これからどうぞよろしくお願い致します！」

ぺこりと頭を下げる。するとその肩に、イルアの指先が触れた。不思議な感覚に身動きが取れなくなる。

「レイリア。貴方はこれよりバルクス家の者となります。騎獣の世話及び屋敷の管理を行うよう、イルアが命じます。」

そう言われ、レイリアはヴィトに教わった言葉を返した。

「はい、お受け致します。」

触れていた指先が取られ、レイリアは顔を上げた。

「それじゃあこれからはレリイと呼んでもいいかしら？」
「楽しそうに言うイルアに、レイリアもにこりと微笑んだ。」

「はい！イルア様にそう呼んでもらえるなんて、嬉しいです！」
満面の笑みを返すレイリアに、イルアはもう一度抱きついた。

「イ、イルア様・・・」

困惑するレイリアと、それを気にもかけないイルア。二人を見守るセティエスとヴィトもつられて笑っていた。

翌朝、レイリアは目覚めるとさっそく働き出した。きちんと主に迎え入れられた事で、気持ち晴れやかだ。洗濯をして裏庭に干して。朝食の用意をしようと台所へ行くと、すでに人がいてびっくりした。

「おはよう、レイリア。」

そう言葉をかけてきたのは紛れもなくヴィトで、言葉遣いが変わっていることにさらに驚いた。

「あ、あの、おはようございます。」

ヴィト様、と言った方がいいのだろうか。迷いはしたがあえて名前を呼ばないでよかった。するとヴィトはくすりと見透かしたように笑う。

「俺の事はヴィトでいい。様は要らない。レイリアは身分的には俺より下だけど、あまり大差ないから口調は気にしなくていい。」

一気にそこまで言っつて、ヴィトはにこりと笑った。

「レイリアももう、バルクス家の一員だよ。」

「・・・！！」

その言葉に涙が滲んできた。嬉しくて。胸が熱い。

「・・・俺、また何か言った？」

途端に困惑するヴィトに思わず笑う。

「違います。嬉しくて・・・」

ほっとした様子のヴィトに、レイリアは眦を拭って言った。

「ヴィト・・・にもレリイって呼んで欲しいです。」

「え？」

目を丸くするヴィト。なんだか可愛くて、レイリアは微笑んだ。

「駄目ですか？」

親しい人には、近い人にはそう呼んで欲しい。そう思っというと、ヴィトはなにやら視線を彷徨わせた後、ぎこちなく頷いた。

「いや、うん・・・レリイ。」

「ありがとうございます！」

満面の笑みでぺこりと頭を下げると、ヴィトが恐る恐る、といった感じで聞いてきた。

「セティエス様やガイアスにもそう呼んで欲しいって事？」

「はい！」

大きく頷くと、何故かヴィトは苦笑いをした。

「じゃあ伝えておくよ。取りあえず朝食の準備をしようか。」

ちよっと不思議に思ったものの、レイリアは頷いて手伝いを開始した。

鍋からスープの良い匂いがする。美味しそうにぐつぐつする鍋を覗き込んでみると、ヴィトが苦笑して肩を叩いた。

「そんなに覗き込むと火傷するよ。」

「あつ、すみません。」

慌てて顔を離し、何かする事はないかとヴィトを伺い見る。ぱち、と目が合って、ヴィトが視線を彷徨わせた。

「・・・じゃあ食器を並べてくれる？」

「はい！」

嬉々として食器を取りに行く。鼻歌でも歌いそんな気分の良さが溢れていた。その姿に笑みを漏らして、ヴィトは準備に戻る。

機嫌良く食器を並べていると、食堂へ誰かが入ってきた。機嫌良く顔をあげて挨拶しようとして、レイリアは固まった。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

赤銅色の髪は乱れ、同じ色の目はぼんやりとこちらを眺めている。ガイアスだ。だがこの気怠げな雰囲気はなんだろう。声をかけるのも無視するのもはばかられて、レイリアは結果、固まった。相手も動かないから、レイリアは冷や汗ものだ。

ガイアスが、瞬いた。それをどうしようもなく見つめる。するとガイアスが欠伸をした。大きな野良猫のようなそれに、思わず笑いが漏れた。それをガイアスがまた見つめ、レイリアはまた固まる。そして。

「・・・・・・・・おはよう。」

意外な台詞が聞こえて、レイリアは慌てて返事をした。

「お、おはようございます！」

ちよつと声が大きくなってしまった。慌てて口を抑えるが、後の祭りだ。しかしガイアスは、ん。と言っただけで席についた。ぼーっと座るガイアスにヴィトがスープを差し出すと、黙ってそれを飲みだす。呆然と見ていたレイリアに、ヴィトが笑って言った。

「ガイアスは寝起きが悪いんだ。あれを飲み終わる頃にはちゃんと起きるから、放っておけばいいよ。」

「あ・・・そうなんですか・・・」

啞然と頷くレイリアに笑いかけ、セティエス様とイルア様を起こしてきて、とヴィトは背中を押した。

廊下を進んでセティエスの部屋へさしかかると、本人が部屋から出てきた。

「おはよう、レイリア。」

にこりと微笑まれて赤面する。

「おはようございます！セティエス様！」

がばりと頭を下げる。と、くすくすと上から抑えた笑いが降ってきた。

「……………」

「気合いが入ってるね。その調子だとすぐに疲れてしまふよ？」

指摘されて、さらに顔が熱くなる。

「う……はい、そうですね……気をつけます。」

縮こまってそう言つと、すれ違い様にセティエスにぽんと肩を叩かれた。

「もう少し力を抜くといい。」

「！……はい！」

そのままセティエスは居間へ向かつて行つた。ふわーっと体中が軽くなるような気がした。慌てて気を引き締める。けれど、すぐに緩みそうになつてしまつて、浮き沈みを慌ただしく繰り返しながらイルアの元へ向かつた。

こんこん、と軽くノックをして扉の向こうへ声をかける。

「イルア様、おはようございます。レイリアです。もうすぐ朝食のご用意が出来ますよ！」

声をかけて少し待つ。と、入つて、と声がかかった。

「失礼します。」

そつと扉を開けると、イルアが鏡の前で着替えの仕上げをしていた。

「あ、お手伝い出来る事、ありますか？」

慌てて側へ行くと、イルアはふわりと微笑んだ。

「大丈夫よ。私はそこの令嬢とは違うから。」

イルアは貴族だ。一般的には、貴族は身の回りの世話は大抵、侍従もしくは侍女にさせる。しかし、ヴィトから聞いた限りではこの屋敷にはヴィト、ガイアス、セティエスしかいなかったようだから、

イルアは自然と身の回りの事は出来るようになったのだろう。思いを巡らせているとどう感じたのか、イルアはレイリアを手招いた。

「私が選んだ服はあまり趣味が合わなかった？」

「え？」

イルアが選んでくれたものなら拒む必要はない・・・と思つてすぐクローゼットに並んでいた服を思い出した。茶色、肌色、桃色を基調とした色合いの、少しかつちりとした形の、それでいて繊細なレースがやわらかい雰囲気服だった。ところどころ黒いリボンがあしらわれていて、ふんわりとした雰囲気を引き締めていた。そんな服を思い出して、レイリアははっとした。

「趣味が合わないだなんて、そんな事はないです！とても素敵でした！」

あら、と目を丸くするイルアに、レイリアはもじもじと言葉を絞り出す。

「ですが、その・・・どれも素敵で・・・ええと・・・」

はつきりとしなない物言いにも、イルアはじつと耳を傾けてくれた。

「その、あんな素敵な服は、私には勿体ないと思つて・・・」

「・・・・・・・・」

ちらりとイルアを見ると、ぽかんと口を開けていた。そして。

「あははっ、レイリイったら・・・」

お腹に手を当てて笑い出した。

「イルア様・・・？」

「あのね、レイリイ。貴方はもうバルクス家の人間なのよ。あの服はそれに相応しいものを選んだつもりよ。」

イルア笑顔が、柔らかいものから不敵なものへと変わった。それを見て、レイリアはどきりと胸が鳴った。

「だから遠慮しないで。ね？」

そつと髪を撫でられて、レイリアはこくりと頷いた。

「さ、じゃあ服を着替えましょう！」

「え？」

イルアは言うなり、レイリアの手を引いて自室を出て行く。半分引きずられるようにしてレイリアは後について行った。

「・・・お嬢様とレイリアは遅いな。」

食卓では、男三人が座って主と侍女を待っていた。ガイアスもさすがに目が覚めたようだ。

「あ、セティエス様、ガイアス。レリイと呼んで欲しいと言っていましたよ。」

「は？」

怪訝そうにガイアスが眉を顰めるが、セティエスは小さく笑った。

「私たちにも愛称で呼んで欲しいなんて、本当に可愛い人だな。」

「

ぴきつ、とガイアスとヴィトは固まった。セティエスはいわば天然誑しだ。そういう台詞だけはするりと口から出るから、恐ろしい。

「・・・レリイは真正正銘の女の子ですからね。貴重ですね。」

ヴィトが苦笑しながらそう言うと、ガイアスがさらに眉を寄せた。

「あれは本当に役に立つのか？」

「ガイアス・・・レリイだよ。“あれ”じゃない。」

「役に立てば名前くらい覚えてやるよ。」

そんなガイアスの言葉にヴィトは溜息を吐く。それを見てセティエスは笑った。いつもの事だ。

「さて、女性達はどうしたのだろうか？」

セティエスの問いに、主人の明るい声が応えた。

「着替えよ、セティ。さあ見てちょうだい！」

「イ、イルア様・・・！」

男三人が廊下を見やると、女主人に連れられた若い女性がいた。いや、レイリアだというのは分かるのだが、服を着替えただけで纏う雰囲気が変わっていた。

「……」

思わず黙り込む三人を見て、イルアは満足そうに微笑む。

「どう？私の見立て。レリイの可愛さが引き立つでしょう？」

じつくりと三人に眺められ、レイリアはたまらず俯いてつま先を見つめた。どうしようもなく恥ずかしい。すると、さらりと褒め言葉が聞こえてきた。

「これは可愛い。さすがですね、お嬢様。」

ぶわ、と嫌な汗が噴き出す。

「いつの間にご友人を連れて来られかと思いました……。レリイも十分、令嬢になれますね。」

うう、と奥歯を噛み締める。そろりとイルアの後ろへ動く。

「……イルア。」

はた、とレイリアは顔を上げた。ガイアスが感想ではなくてイルアを呼んだのも驚いたし、主人であるイルアを呼び捨てにしたのにも驚いた。思わずぽかんとしていると、ガイアスがイルアを僅かに睨んで言った。

「こいつには騎獣の世話をさせるんじゃないのか？」

「そうよ？その通り。」

誰も主人を呼び捨てにしたガイアスを責めないし、イルアも気にする様子はない。不思議に思い、首を傾げる。と、ガイアスがこちらをちらりと流し見た。目が合ったのは一瞬だったけれど心臓が縮み上がった。

「こんな恰好で寄越してみろ。ガデイスの餌にしてやるからな。」

「！」

ガデイスというのが何かは分からないが、“餌にしてやる”という台詞に思わず後ずさった。しかしイルアは傲然と言い放った。仁王立ちして。

「こら、ガイアス！口が悪いのは知ってるけど、無闇に脅すようなら王城へ送り込むわよ！」

その脅しに、ガイアスは過剰に反応した。ガタツと椅子を蹴立てて

立ち上がり、イルアを思い切り睨む。

「てめえ！王城と言えば俺が下るとでも思ってたやがるのか！」

その台詞に反応したのはセティエスだ。彼は座ったまま、レイリアには見えないがガイアスを睨んでいるようだった。

「口を慎め。ガイアス。」

「・・・っ！」

少し身を引いたガイアスと、静かなままのセティエスの間で無言の戦いが行われている。それをしばし見やり、驚きと困惑で動けないレイリアにヴィトが微笑みかけた。

「・・・取りあえず、ガイアスの言う通り、その侍女服は騎獣の世話には適さないな。」

「あ・・・はい、そうですね・・・」

ぎこちなく頷くレイリアから視線をイルアへ移し、ヴィトは提案した。

「という事でイルア様。レリイを着替えさせてもよろしいですか？」

イルアはしばらくレイリアの姿をじっくり眺め、残念そうに頷いた。

「・・・仕方がないわね・・・。レリイ、クローゼットに騎獣番の服が入っているから、それに着替えてちょうだい。」

「は、はい！」

ぺこりと頭を下げ、レイリアは早足に自室へと去って行った。

「・・・・・・」

「・・・・・・」

無言で睨み合うこと数分。一步も引かない両者に溜息と共にイルアは言った。

「・・・それくらいにしてちょうだい。レリイの可愛さに目が眩んだ私が悪かったわ。」

「その台詞はどうなんでしょう？」

隣でヴィトが突っ込むがイルアは無視した。

「そんなに気に入ったなら、どうしてここへ招いた？」

ガイアスの鋭い問いに、イルアはぎくりと身を強ばらせ、すうつと視線を泳がせた。あからさまだ。

「・・・いやほら、だって。」

ごまかそうとするイルアに対し、ガイアスはしかと視線を合わせて続きを促す。

「・・・可愛くて、安心するんだもの。」

「・・・は？」

本気で怪訝そうにされて、イルアはむつとしながら言い募る。

「何よ、可愛いじゃない。ほわっつしていて、おどおどしていて、リユミーを見ると蕩けそうな笑顔になるの。」

「・・・・・・」

「見ていると・・・側にいると、落ち着くの。」

ふわりとイルアが笑った。その顔を見て三人は悟る。イルアの背負うものは暗く、重い。その心を慰める唯一無二のものが、あの、レイリアなのだと。本当に慰めになるかどうかは別として、今のイルアにはレイリアが必要なだろう。

「・・・それでこんなにはしゃいでいらつしやるのですね。」

くすりとセティエスが笑うと、うー、と呻いてイルアは顔を両手で覆った。ガイアスが溜息を零す。

「・・・それなら侍女でも良かっただろう。何故騎獣など扱わせる。」

「

至極迷惑だと言わんばかりの渋面に、イルアは可笑しそうに笑った。

「だって、レリイとリユミーはかなり相性がいいじゃない？セツトにするべきだと思ったのよ！」

「阿呆か！」

イルアの発言にガイアスがささず突っ込んだ。

「あれにシレイ以外の何を任せるっていうんだ？あんなひよろひよろじゃあ騎獣の食料育てるくらいしか出来な」

「あ、それいいわね！ついでにお花とか育ててもらおうかしら？私じゃあ枯らすだけなんだもの。」

にこにことのたまったイルアを睨み、ガイアスの目つきがさらに悪くなった。それを見てセティエスが可笑しそうに笑う。すると、ヴィトが気付いて声をかけた。

「レリイ。こつちへおいで。」

「！」

驚いたのは何故かレイリア本人だけで、四人はそれぞれの表情でレイリアを迎えた。今のレイリアの服装はズボンだ。緩く身体を纏う服は動きやすく、かつ、上品に作られたものだった。さすがに貴族の使用人ともなると違うな、とレイリアは感心していた。そして同時に、汚すのがいたたまれない。

「あの、これで合っていますか？イルア様・・・」

騎獣番の服、と言われてもよく分からなかったレイリアは、クローゼットにあつたそれらしいものを選んで着てきた。つまり、一番動き易そうなものを。

「・・・レリイ、それもよく似合ってるわ！」

え、と顔を上げたレイリアにイルアは思い切り抱きつく。

「この服装だとまた違った魅力がむぐっ」

「お嬢様・・・」

苦笑しながらセティエスがイルアの口を塞いだ。そのままずりずりとイルアを少し遠ざけた。

「あ、あの・・・？」

戸惑うレイリアの前にヴィトがさりげなく移動した。

「さあ、じゃあ気を取り直して朝食を食べようか。」

「え？あの・・・」

「おらさつさと座れ。」

「わっ」

ガイアスに乱暴に腕を掴まれて、強引に椅子へ座らされた。するとすぐにヴィトがガイアスを注意する。

「ガイアス！そんな風に扱ったら痛いだろ？」

言われてガイアスはぱっと腕を離した。

「・・・・・・・・・・」

そのまま自分の席へ腰を降ろす。はあーっとヴィトは溜息を吐いて、引き離されたイルアとセティエスへ声をかける。

「お二人も、そろそろ朝食にしませんか？」

「ええ、そうしましょう。」

セティエスが応えて、イルアを解放した。

「もー・・・・・・・・なんなの？セティ。」

するとセティエスは何事かを耳打ちした。それを聞いたイルアがぴくりと肩を揺らす。

「・・・・・・・・・・」

黙ってしまったイルアに、セティエスがふわりと笑いかけた。

「お気をつけ下さいね、お嬢様。」

「・・・・・・・・分かったわ。」

何故か殊勝に頷くイルア。首を傾げるレイリアを全員が軽く無視する。

「・・・・・・・・・・？」

なんとなく不自然な空気の中、バルクス家の朝食がようやく始まったのだった。

第五話 静寂

朝食を食べ終わってすぐに、レイリアはガイアスに連れられて騎獣舎へ来ていた。今日は、イルアとセティエスは王城へ出かけ、ヴィトは何やら用事を申し渡されたようであけてしまった。昼には戻ってくるという事なので、それまでは騎獣番の仕事をしっかり教えて貰う事になる。

「騎獣番の仕事は本来、飼料の管理、騎獣の世話、調教だ。」

騎獣舎へ入るなり、ガイアスは出入り口付近に雑に置かれていた道具を拾って言う。

「だがお前に世話と調教は無理だ。」

「うつ・・・」

分かってはいたもののあまりにストレートに言われ、思わず呻く。

「それで、イルアも言ってたが・・・お前は飼料の管理をやれ。」

「あ、はい。」

その言葉は抵抗なく受け止められ、素直にこくりと頷いた。それを何故かじつと見られる。

「・・・・・・・・」

「？」

訳が分からず瞬いていると、何事も無かったかのように話しを進められた。

「それと例外的にあのシレイ、リュミエルの世話は許す。」

「はい！ありがとうございます！」

リュミエルの世話が許されると聞いて、レイリアは満面の笑みで頷いた。周りに花でも飛んでいるんじゃないかというくらいだ。

「・・・・・・・・」

それを見てガイアスは不安そうに溜息を零すが、レイリアにその意味は分からなかった。

騎獣の飼料というのは様々だ。シレイや、初日に拒否された黒い獣―シューグなどは肉食なので肉を用意せねばならない。だがレイリアに任されたのは作物の世話だった。騎獣のなかには草食のものもいる為、作物だけでなく果実や花も育てなければならぬ。実際に畑へ行ってみると、半分程が枯れてしまっていた。

「・・・えっと、これだと皆の分には足りませんよね？」

意を決して聞いてみると、ガイアスは少し遠くを見ながら答えた。

「少し前までイルアが世話をしていたがな・・・あいつは全て枯らすから、俺が代わった。」

「・・・・・・・・」

（えっと・・・代わってこれまで？いや、代わったからここまでになったのかな・・・）

思ったものの口には出さず、つとめて明るく宣言した。

「そうなんです！じゃあ私、頑張ります！」

それからの毎日は、朝は全員で朝食を食べ、イルアとセティエスは仕事へ出かけ、ガイアスは騎獣番と警護を、レイリアは騎獣番と侍女の仕事を、ヴィトは侍従と・・・何やら仕事をしながら過ごすのが当たり前になっていた。イルアとセティエスは夜遅くなる時もあり、そんな時は三人（主に二人になる事が多かったが）で談笑してから眠りにつく、という流れになっていた。

―すごく贅沢よね。

レイリアは眠りにつこうとする中、この幸せに微笑んだ。

―なんて幸せな時間なんだろう・・・。

うつとりとした気分に入れ、レイリアは心地よい眠りに身を委

ねた。

それから数日後！。

「今日は遅くなるかも知れないわ。」

朝から疲れた様子でイルアがそう言い出した。そうですか、とヴィトが答えたが、レイリアはその様子に首を傾げ、問いかけた。

「どうかされたんですか？」

するとセティエスが苦笑した。

「ええ、ちよつと面倒な事になりそうなのです。」

「面倒……ですか？」

今度は反対側へ首を傾げた。隣に座っていたヴィトが小さく笑うも、レイリアは気付かなかった。

「そうですね……。それを今日、じっくり確かめるですよ。」

「……そうなんですか……」

ちよつと気になるものの、あまり聞かない方がいいのだろうと察して疑問を引つ込めた。ちらりとガイアスとヴィトを伺い見るも、二人ともいつものように食事を続けていた。

「レイリィ」

セティエスに名前を呼ばれ、慌てて返事を返した。

「は、はい！」

くすりと笑われてしまう。

「実はガイアスとヴィトも連れて行きたいので、今日は一人で留守を頼めますか？」

「えっ……二人もですか？」

ちよつと驚いてしまった。ガイアスとヴィトは僅かに目配せをして、意図を確かめる。

「ごめんなさいね、レリイ。本当は一人にしたいわけではないのだけれど・
・」

しょんぼりとイルアが言うので、疑問や驚きなどあつという間に頭から吹き飛んでしまった。

「いいえ！ 気になさらないで下さいイルア様。私、一人でも大丈夫ですよ。ヴィトやガイアスに色々教えて貰ってますから。」

につこりとそう言い返すと、イルアはほっとしたような、まだ不安が拭えないような、少し頼りない様子で頷いた。

不安そうに振り返るイルアを含め、王城へ出かける四人を笑顔で送って、レイリアは少し寂しくなった屋敷へ戻った。

「・・・・・一人っていうのは、初めてだな・・・」

ぽつりと呟いた言葉がすぐに消えていつてしまう。いつも静かな屋敷なのだが、今日はいつもに増して静かで、神経が鋭くなってしまうような気がした。

「・・・こんな平気。ちゃんと仕事しなくっちゃね。」

自分を励ます為にゆるく笑って、レイリアはよしっ、と気合いを入れて仕事に取りかかった。

あれこれと掃除をしたり、片付けをしたり、飼料の世話をしたり、リュミエルの世話をしていたら寂しいと思う暇もあまりなく、夕方を迎えた。

「ふう・・・皆夕食も頂いてくるよね・・・」

言ってしまうと少し寂しさが沸き上がってくるが、ちゃんと食べて元気にお迎えしないと！と想着て、一人分の夕食の準備に取りかかる。

??その時だった。

コンコン、と屋敷の来客を告げるノックが鳴った。

「？」

慌てて食事部屋から居間へ走り出て、ふと足を止めた。

（そう言えば・・・来客の時ってどうしたらいいのかな・・・。）
コンコン、と再びノックが聞こえて、お客を待たせてはいけな
いと考えて扉へ近づいた。

「はい、どちら様でしょうか？」

取りあえず警戒して、扉は開けずにそう訊ねた。

「私は王城より参りました、第三軍の将、キーセルと申します。こ
ちらの主人であるイルア様に所用があつて参りました。ご解錠願
います。」

（お、王城から！？でも・・・イルア様は今、王城にいらっしゃる
筈だけど・・・）

「あ、あの・・・主人はただ今、王城へ出向いている筈ですが、お
会いになりませんでしたでしょうか？」

困惑しつつもそう訊ねると、キーセルと名乗った將軍は淡々と答
える。

「お会い致しました。ですが王城を去られた後に陛下より言伝を賜
りましたので、それをお伝えに・・・イルア様はまだお帰りでは
ないようですね。」

そう言われてレイリアは一瞬息が止まった。

（イルア様がいらっしゃらないって・・・分かってしまっても大丈
夫なのかな。）

どくり、と心臓が脈打つ。無理矢理に押し入ったりせず、丁寧な物
言いをしているとところから確かに身分ある人だというのは確かだろ
う。けれど、何故か嫌な感じがしていた。

「ご言伝でしたら、私からお伝え致します。」

あえてイルアの不在には触れず、レイリアはそれだけを返した。言
ってしまってから失礼だっただろうかと不安になったが、口から出
た言葉は回収不可能だ。

「・・・ご本人に直接お伝え出来ないのですか・・・。仕方ありま
せんね。」

「・・・！」

緊張が高鳴る。鼓動がうるさい。

パキンッ。

「えっ・・・」

レイリアが見つめる中、扉が勝手に開かれた。

（なんで・・・鍵が、かかった筈なのに・・・？）

本当は筈、ではない。鍵は確にかかっていた。だがそれが嘘だっ
たのではないかと思う程術らかに、扉は開いた。

「・・・・・・？」

開いた先には一人の男が佇んでいた。強い夕日が彼の容貌を暗く彩
る。驚いて言葉も出ないレイリアへ向けて、男は一步踏み出した。
その後ろにまだ人がいるのが分かった。

「・・・！」

じり、と後ずさる。男は躊躇わず歩を進める。

（鍵、壊されたんだ・・・！）

今頃になってそう気付き、同時に純粋な警戒心と恐怖がレイリアを
包む。そう感じたら勝手に足が動いた。身を翻して屋敷の奥へ逃げ
ようと走る。だが。

「っ・・・！」

ガイアスの時とは比較にならない程乱暴に腕と、髪を掴まれた。

「いっ・・・！」

痛い、という前にかなり強い痛みがお腹に走って、レイリアの意識
は途切れた。

第六話　イルアの告白

馬車に揺られ、イルアは窓から外の景色を眺めていた。特に目を奪われた訳でもなく、ただぼうつと景色が過ぎ行き様を見ていると、斜め向かいからくすりと微笑が漏れた。

「・・・なあに？」

言われる事に察しがついて、イルアも微笑しつつそう問いかけると、思った通りの台詞が返ってきた。

「早々に切り上げて帰るだなんて・・・早くレリイに会いたいですか？」

やっぱりね、と笑ってしまう。

「会いたいわ。」

そう言つて視線を窓の外へ移す。

「寂しいのじゃない？それに、なんだか心配なのよ。」

「寂しいのはお嬢様では？」

くすりと笑われてイルアはむくれる。

「セティってレリイが関わると意地悪よね。私をからかうのがそんなに楽しいのかしら？」

少し睨みつけてやると、セティエスはやく笑いを抑え始めた。

「レリイが関わるとお嬢様が平静でいらなくなるご様子が、面白くはありません。」

「はつきり言うわね・・・。」

負けた、とイルアは肩をすくめた。

そうこうしていると御者席とをつなぐ小さな窓が開かれ、ヴィトが声をかけてきた。

「イルア様、セティエス様。お屋敷の方から馴染みない気配が・・・。」

ぴくり、と肩が跳ねる。

「行つて！」

「御意」

イルアの一声でヴィトは御者席を離れた。それに代わってガイアスが手綱を握る。

「急げ。」

セティエスの一声でガイアスは馬を鞭打つ。途端に馬車の速度が上がり、衝撃で浮いたイルアの身体をセティエスが支えた。

「屋敷を嗅ぎ付けられましたか？」

訝しげに眉を顰めるセティエスに、イルアは“お嬢様”の顔を取り去った。

「・・・油断したわね。」

完全に気を失ってぐったりとしたレイリアを見て、侵入者 キーセルと名乗った男は首を傾げた。

「レーヴェの使用人ならば徒者ではないと思っていたが・・・これは紛れもなくただの女だな。」

呟いて、床に倒れているレイリアに手を伸ばす。これを持って帰り、囿に使う為に。

「！」

その瞬間、急速に何かが迫る気配がして手を止めた。はっと居間にある窓の方を見れば、大きな獣が窓を壊して飛び込んでくるころだった。

「な、なんだ!？」

男が引き連れてきた部下が叫ぶ。一人は窓に近かった為に獣の下敷きになっていた。・・・すでに息は無さそうだ。獣はこちらを見据えると、空気が震えるような咆哮をあげて飛びかかってきた。大きな割に俊敏だった為、レイリアを担いでいる暇なく男はその場を飛び退った。

獣はレイリアを四肢の下へいれて庇い立つ。優美な長い尾が不機嫌そうに揺らめく。これでレイリアには触れられなくなってしまった。獣は白い毛並みに濃い茶の縞模様で、美しい。

「シレイか・・・」

男は舌打ちした。シレイの主人がこの女であるなら、やはり徒者ではない。が、到底戦力にはならないのは良い事だ。女には戦う意思がない。それならばこちらが手を出さない限り襲って来ない。

「・・・しかしこれでは、計画が実行出来ないな。」

シレイは主人を守る為ならかなり凶暴になる。部下四人しか連れていないこの状況では分が悪かった。その部下はすでに一人息絶えている。

「レーヴェがいつ戻るとも限りません。今回は引きましょう。」

部下の進言に頷くと、男はあっさりと撤退を宣言した。

「引き上げるぞ。」

「・・・はっ！」「」

来た時と同じようにあっという間に、男達は屋敷から去って行った。

なるべく人目につかないよう、身を低くして走る。木陰や建物の影を選んで走ると、すぐに屋敷に辿り着いた。

（あの気配が消えてるな・・・）

敷地内へ入ると音を立てず、気配を殺して屋敷へ近づく。

（・・・リュミエル？）

知った気配を感じて居間へ近づくと、窓が大破していた。

「これは・・・」

さっと大破された窓から飛び込む。

「リュミエル！」

グルル、とリュミエルが唸ってこちらを警戒していた。拒否する事はあっても威嚇されることはなかったので驚く。

「・・・どうした？」

戸惑いながら部屋中を伺い見る。するとリュミエルの足下に目が釘付けになった。

「・・・レリイ！？」

一歩踏み出したところでリュミエルに威嚇される。それ以上近寄れず、ヴィトはくそつ、と悪態をついた。

「リュミエル、お前がどかないとレリイの無事が確認出来ない。」
「……」
伝わるようにそう語りかけると、逡巡した後、そつとレイリアの上から脚を移動させた。すぐにヴィトはレイリアの側へ跪く。倒れ伏した身体をそつと仰向けにすると、首筋に触れて脈を測った。

（・・・良かった。）

ほつと一安心して、ざつと外傷がないか確かめた。

「良かった・・・」

心から安堵してそう呟いた時、遅れてイルア、セティエス、そしてガイアスが到着し、居間へ駆け込んできた。

「レリイ！」

取り乱しそうな勢いで駆け込んできたイルアは、すぐにレイリアを見つけて走り寄った。

「ヴィト！レリイは！？」

睨むようにそう聞かれ、ヴィトは苦笑して答えた。

「無事です、イルア様。外傷もないようです。それに・・・」

ヴィトの視線につられてイルアも視線を動かすと、大人しく座り込むリュミエルの姿が目に入った。

「リュミィ・・・？」

「はい。リュミエルがレリイを守ってくれたようです。俺が来た時も威嚇されてしまいました。」

「リュミィが？・・・守ってくれたの・・・？」

そつとイルアはリュミエルに手を伸ばす。今までなら遠ざかってその手を拒んでいたリュミエルは、驚く事に自らその頬を差し出した。その毛並みにそつと触れて、イルアは心から感謝した。

「ありがとう、リュミエル。レリイを守ってくれて・・・！」

喉を鳴らしたリュミエルに驚きつつも笑って、イルアはレイリアをそっと揺り起こした。

「レリイ、レリイ！起きて！」

開け放たれた扉を検分し、ガイアスは眉をひそめた。

「・・・」

それに気付いたセティエスが声をかける。

「どうした？」

「・・・切られてます。」

「切られる？」

セティエスが扉へ寄って、扉の鍵を検分する。

「・・・確かに。そこそ腕の立つ者だろう。」

「しかしシレイには負ける相手だったと。」

「そうなるな。」

そこからしばし黙り込み、ガイアスは再び口を開いた。

「こいつは“誰の”屋敷だと思って侵入したのでしょうか？」

その問いに、セティエスは妖艶に微笑んだ。

「“誰の”だと思ったのだろうか？」

「・・・」

その笑みから次にする事を察し、ガイアスはセティエスの言葉を待つ。しかし。

「レリイ！」

イルアの呼び声にはっとして、二人は襲われたレリイの元へ駆け寄った。

レイリアは揺さぶられている感覚に意識を取り戻した。けれども感覚が鈍い。

？誰・・・？

誰かが自分の名前を呼んでいる。声音からするに女性で、なんだか大きな声で呼ばれているみたいだ。揺さぶっているのもその人だろうか。

？どうしてこうなってるんだろう？

身体がゆっくりと目覚めていく。僅かにお腹に鈍い痛みを感じて、一気に覚醒した。

「う・・・いた・・・」

「レリイ！」

呻いたレイリアに、心配そうなイルアの声がかかる。お腹に手を当てながら上体を起こすのを、ヴィトが手伝ってくれた。

「イルア様・・・ヴィト・・・？」

どうしてこうなってるんだっけ、とレイリアは記憶を弄りながら周りを見回す。するとイルアの後ろに、セティエスとガイアスの姿も見つけた。

「私・・・」

どうしたんですか？と問いかける前に思い出した。

「あ！イルア様、変な人が来たんです！」
慌てて叫んだその台詞に。

「「「「「・・・」」」」」

一瞬の沈黙。

「あははっ！」

ヴィトが声を上げて笑うのをきっかけに皆が笑い始めた。

「え？あの？」

不審者が来たと告げたのに何故笑われるのだろう。思っていると後ろからそっと、ふわふわの毛並みが頬に擦り付けられた。

「リユミー！」

ああ癒される・・・そう思いながら毛並みを撫で、はっと気付く。
「どうしてリユミーが出てるんですか？」

その質問に全員が笑いを堪えようとした。しかしまだ収まらない。

「あのね、レイリイ。貴方は多分襲われたのよ。覚えていない？」

「あ・・・はい、覚えています。扉の鍵、壊されてしまつて・・・」

「そうなのよね・・・」

ぶつ、とヴィトが吹き出した。笑いを収めるのに失敗したようだ。

「あの・・・？」

不安そうに首を傾げるレイリアがさすがに可哀想になつて、ヴィトは必死で笑いを抑えつつ教えた。

「レイリイ・・・変な人つて・・・！子供じゃないんだから・・・くくつ」

かああつ、とレイリアは顔が熱くなるのを感じた。

「ご、ごめんなさい！その、不審者です！不審者が来たんです！」

「くつ、あははっ！駄目だ、笑いが・・・」

ううつと呻いて顔を伏せるレイリアに、イルアはそつと頭を撫でた。そして何かを言いかけたのだが、見事なまでのタイミングでセティエスに阻まれた。

「レイリイ。痛む所はありませんか？」

むつとイルアに睨まれたが、セティエスはさらりと流してレイリアを見つめた。

「はいっ、あの、大丈夫です！」

勢いで答えたレイリアに、ガイアスが鋭い視線を突き刺した。

「・・・さつき“痛い”と言つてなかったか？」

「あつ」

言われてさつとお腹に手を当てた。やはりまだ鈍く痛む。

「お腹？痛いのか？」

イルアが急に不安気にするので、レイリアはにこりと笑った。

「多分殴られて・・・ちよつと痛いだけなので、大丈夫ですよ、イルア様。」

「レリイ・・・」

「お嬢様、レリイを椅子へ動かしましょう。床に座っていては身体を冷やします。ついでにリュミエルを騎獣舎へ返しましょうか。」

「ええ、そうね。さあレリイ、あちらへ。ガイアスはリュミールをお願い。」

「分かった。」

頷いてガイアスがリュミエルに近づくと、一歩引いて唸られた。途端に不機嫌そうに目を細めたガイアスを見て、レイリアは焦る。と、イルアが待つて、と声をかけた。

「・・・レリイ。リュミールに伏せて待つように言ってみて？」

「えっ？あ、はい。・・・リュミール、ちよつとの間、伏せて待つていてくれる？」

言われたリュミエルはレイリアとガイアスを見比べ、しゅしゅと言った様子でその場へ伏せた。

「・・・・・・？」

不思議そうに首を傾げるガイアスを見やり、イルアは小さく笑う。

「心配で離れたくなかったのよね？リュミールはこれでいいわね。さ、レリイ。」

「あ、はい。」

そう言つて動こうとしたレイリアを止め、ヴィトは背中と膝裏へ腕を差し入れる。

「え？あの・・・？」

戸惑うレイリアに小さく笑い、ヴィトは軽々とレイリアを抱き上げた。

（えーっ!?!）

驚きのあまり反応が取れない。その間にヴィトはレイリアを椅子へ移動させ、そつと下ろした。

「・・・・・・」

呆然とするレイリアには気付かず、イルアはレイリアの正面へ膝立ちした。その表情がとても真剣だったので、レイリアは不安になる。一体どうしたのだろうか。

「ごめんなさい、レリイ。貴方をこんな目に遭わせるつもりはなかったの……。」

「……？……イルア様が謝る必要はないですよ！それより……。」

レイリアの表情が曇る。それを見てイルアは、言いたい事を一先ず呑み込んだ。

「ちゃんと留守を守れなくてすみませんでした……。」
そう言つて深く頭を下げた。

「レリイ！」

「せめて相手が誰だったのか、把握出来れば良かったんですが……。」

落ち込むレイリアを見て、四人はしばし押し黙る。その沈黙を切つて最初に声をかけたのは、セティエスだった。

「突然押し入ってきたのですか？」

「あ、いえ。王城からの使いだと言つて、しばらくは扉の前で会話を。」

「会話？」

イルアがかなり驚いた様子でそう言つので、レイリアは急いで頷いた。

「はい。丁寧でしたよ？第三軍の将で、キーセルだと名乗っていましたが……実際にそういう方はいらつしやるんですか？」

「三軍の将は確かにキーセルというお名前だわ。けれど今日に限つては私の見送りにいらして下さつたから、あの時間でこの屋敷へ侵入するのは不可能ね。」

イルアの表情が鋭くなる。こんな表情を見るのは、レイリアは初めてだった。

（イルア様でもこんな表情をされるんだ……）

思わず、眺めてしまった。

「それで？」

話しを促されて慌てて続ける。

「はい、それで・・・イルア様に伝言を賜ったと言っていたんですが、不在だとは言わない方がいいと思って、私が伝言を伝えると言ったんです。そうしたら扉を壊されて、気絶させられました。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

黙り込んでしまったイルア。恐る恐る顔を覗き見てしまう。

「あの・・・イルア様？」

そのイルアの肩に、セティエスがそつと手を置いた。そして、イルアはそつと息を吐いた。

「あのね、レリイ。こうなった以上貴方に話しておかなければならない事があるの。」

そう言ったイルアの表情は、“お嬢様”とは思えない程鋭く研ぎ澄まされていた。雰囲気気圧されてごくりと息を呑む。ちらりと四人を見渡すと、これはレイリアだけが知らない事なのだと確認した。

実はね、とイルアは切り出した。そして、ごめんなさいと頭を下げた。

「イルア様！？」

「今日ここが襲われたのは、私が油断したせいなのよ。それも、レリイは知らないから大丈夫だろうと高を括った。私の落ち度だわ。ごめんなさい。」

「あの・・・？」

よく分からずに混乱するレイリアを真っ直ぐに見て、イルアは困ったように笑った。

「あのね、レリイ。私、“レーヴェ”という名前を持っているの。」
「レーヴェ・・・ですか？」

「ええ。」

貴族の名前に、当人の名前、家名の他に祖先の名前などが入るのはよくある事だ。だから何故イルアがその事をわざわざ言うのかが分からない。そう思って首を傾げると、イルアはくすりと柔らかない笑みを浮かべた。

「“レーヴェ”というのは普段は隠しているの。私がレーヴェだと知っているのは王族だけ。そして、バルクス家の者だけよ。」

「・・・？・・・あの、どうしてですか？私には教えてしまっていないんですか？」

黙って聞いているのがいたたまれなくて、レイリアは邪魔にならないように気をつけながら口を開いた。

「レイリイには知っておいて貰わないといけないわ。今日みたいな事もあるしね・・・。」

真剣な様子に、レイリアは頷くに留まった。

「“レーヴェ”というのはね、“悪魔の蜜”という意味なの。その香りでおびき寄せ、その味で惑わし、人を滅す。それが、私の名前。」

（悪魔の蜜？・・・人を滅す？）

「そんな・・・どうしてイルア様が・・・？」

温和なイルアには似つかわしくないとはい、疑問が口をつく。

「バルクス家はレーヴェの揺り籠なのよ。代々、誰かがレーヴェを担う。それが、今は私なの。」

「どうして、バルクス家なんですか？」

イルアに何故その名前が授けられるのかが不思議でならない。

「・・・よく分からないけれど・・・バルクス家の祖先に悪魔がいた、と言われているわ。」

（そんな、曖昧な理由で・・・悪魔の蜜だなんて名前を付けられているの？）

じわり、と目が熱くなる。

「そんな顔しないで、レイリイ。レーヴェの名前がある以上、私はレ

「ヴェエなの。これはもう、仕方の無い事だし、私はレーヴェエである事が嫌だとは思っていないの。・・・そして、今回みたいに私の息の根を止めたい奴はたくさんいる。それを知っておいて欲しいの。」
「そんな・・・！」

ぼろりと涙が頬を伝う。どうしても拭う気になれなくて、ただただじっとイルアの目を見つめた。そんなレイリアの頬を拭い、イルアは優しい笑みから一転して、不敵に微笑んだ。

「あのね、レリイ。レーヴェエは確かに憎まれるわ。けれど、レーヴェエは隠れていなくちゃいけないの。だから大きな動きさえしなければ平気よ。相手が気付かないうちに駄目にしてやるから！」

その笑顔と言葉に、涙が止まらない。

「それにね」

そう言つてイルアは後ろの三人を振り返った。

「レーヴェエに忠誠を誓う騎士が三人もいるのよ。彼らがしっかりしていれば、私達は何の心配もいらないわ！」

イルアの言葉に頷く三人。一人一人の目を見て、その覚悟が固い事を知る。

「あとね、レリイ。一番危険なのはレリイなのよ。それは、肝に銘じておいて。」

「私、ですか？」

危険なのはレーヴェエたるイルアではないのだろうか。きょとんとしている、イルアは申し訳無さそうに眉を寄せた。

「レーヴェエの尻尾が掴めないから、一番手の出せそうな人を狙うのよ。」

「・・・あ・・・私・・・」

弱い。手が出し易い。それはそうだ。一般の人と比べたってレイリアは間違いなく“弱い”部類に入る。さああつ、と青ざめたレイリアに、イルアはごめんなさいともう一度謝った。

「本当なら貴方みたいな子を巻き込むべきじゃないのは分かっていたの。だけど・・・どうしても、側にいて欲しくて。」

？側にいて欲しい。

ぼろぼろと涙が零れた。途端に不安そうな顔をしたイルアに、慌てて言葉を紡ぐ。

「私、お側にいます！私もイルア様のお側にいたいです。ここに、居たいです・・・！」

止まらない。嬉しくて。胸が苦しくて、暖かい。

「・・・ごめんなさいね、レリィ。怖かったでしょう？」

そつと抱きしめられて、レイリアは小さく首を横に振った。

「平気です。だって、これからも、こういう事が、あるかも、知れないん、ですよ、ね？」

零れる涙を両手で拭って、レイリアは懸命に言葉を繋げる。

「だから、覚悟します、私。・・・お側に、いられるように・・・！」

イルアはほつと溜息を吐いた。嬉しいのが半分と、後は、複雑な気持ち。

「ごめんね。ごめんなさい。・・・それと、ありがとう、レリィ。」

？？求められる嬉しさが、涙と、言葉によって、体中に染み渡っていった。

第七話 レイリア、秘密を知る者

バルクス家の秘密を知った翌日。

イルアは朝食の席で物騒な発言をかました。にっこりと魅惑的な微笑みで。

「昨日の侵入者に報復をしてくるわね。」

「・・・えっ!?!」

思わず、はい、と返事をしそうになった。思い留まれて良かったと思う。

「ど、どうしてですか!?!」

身を乗り出しそうになって、手にカップを持っていた事を思い出して留まる。横からヴィトがそつとカップを取り上げてくれた。

「どうして、って・・・お前昨日襲われたの、忘れたのか?」

ガイアスが不機嫌そうに眉を顰めるものだから、レイリアはやっぱり縮こまる。

「で、でも・・・私、無事ですよ?」

「だから?」

相変わらずガイアスは物言いがつつけんどんで、目つきが怖い。

「だ、だから、その・・・」

口ごもるレイリアを見かねてセティエスがガイアスを窘める。

「怖がっているだろう、ガイアス。」

「・・・」

言われるとそっぽを向いてしまうのも、もう見慣れていた。それを見てイルアが笑う。

「レイリイに手を出したのもそうだけど、バルクス家の秘密を知る敵を、ほいほい野放しには出来ないもの。だから、報復しに行ってくるわね。」

にこり。見た目だけで言えば邪気などまるで感じられない。が。さつきから言っている事が怖い。

「そ、その・・・報復って・・・？」

「・・・」

四人が一葉に黙り込んで、レイリイは青ざめた。

「ど、どうするんですか！？」

焦るレイリイを尻目に、イルアは優雅に食事を続ける。

「それはまあ、活動出来ないようにするのね。今後一切悪事は働けないように、ね。」

「・・・！！？」

ごくりと唾を呑み込んだレイリイを見て、イルアは明るく笑った。

「人の心配してる場合じゃないわよ？レイリイ。」

「え？」

きょとんと瞬きするレイリイに、イルアは心配そうな顔になった。

「この家の秘密を知ったのだもの。今までより格段に危険が高まったのよ？」

「あつ・・・」

そうだった、とレイリイは緊張する。その身体が強ばったのを察して、ヴィトがそつと腕を叩いた。

「ヴィト・・・」

「少しでも自分の身は自分で守れるように、今日から訓練しよう。」

「く、訓練？」

ぎく、とレイリイは身を引いた。嫌な予感がする。そこへガイアスが言う。

「俺とヴィトで教えてやる。」

「え、二人で？」

さらに嫌な予感。ちらりと助けを求めてセティエスを見ると、くす

り、と微笑した。

「これは必要な事だ。・・・頑張つて。」

「・・・」

さつと視線をイルアへ戻す。

「イルア様！」

にこ。その笑顔を見てレイリアは諦めた。駄目だ。やるしかない。

「まあ訓練で倒れたら意味がないから、特にガイアス？程々にね。」

「・・・分かっている。」

「心得ています。イルア様。」

「・・・」

（運動つて苦手だけど・・・イルア様のお側にいる為だもの。頑張るしかないよね。）

そう決意して、レイリアはカップの残りを飲み干した。

朝食後、片付けを済ませ、リュミーに朝食をあげてから、ヴィトに基本的な対応を教わっていた。

「まずは、レイリー一人の時に来客があつた時は、絶対に扉を開けない事。」

「はい。」

「相手を名乗らせて身分、所属、名を掴んでおく。いい？」

「はい。」

しっかりと頷く。

「で、例えば昨日のように王城からの使いだと言われた場合・・・

“イルア様に”後日登城させるように伝える事。」

「はい。」

「万一、屋敷で待つと言われた場合は、主人の許し無しに解錠は出来ないと言つて。なんとわれようと絶対に解錠しない事。」

「はい。絶対開けません。」

真剣に頷くレイリアに、ヴィトは思わずくすりと笑った。

「・・・出来れば留守中は常に外に気をつけていて。来客にいち早く気付けるように。そして、怪しいと感じたら居留守を使えばいい。悟られないよう、隠れているのがいいよ。」

「ん・・・難しそうだけど、頑張ります。」

のんびりしているレイリアに危険を察知しろ、というのは無理があるかな・・・とヴィトは苦笑した。

「いつも気をつけていれば徐々に身に付くよ。頑張つて。」

「はい！」

「じゃあ次。こっちが重要な・・・」

「？」

不思議そうに首を傾げる。その様子にくすりと笑って、ヴィトは話を続けた。

「リュミエルとレリイの事だけど・・・ちょっと、騎獣舎に行こう。」

「あ、はい。」

二人は連れ立って騎獣舎へと向かった。

昨日、リュミエルは檻を壊して脱走していた。外を囲う柵は軽々と飛び越えたようだった。聞けば、毎回こうして脱走しているのだそう。

「えっ、じゃあ毎回檻を直してたの？」

驚いてヴィトに聞くと、苦笑された。

「そうだよ。レリイが来てくれてほんとに助かった。」

でも昨日は見事に脱走したけど。と溜息を吐いていた。

騎獣舎に入ると、相も変わらずシューグがレイリアを睨みつける。すっかり習慣になっているその睨みに、レイリアも習慣になっ

る事があつた。

「？」

条件反射でさつとヴィトの腕に張り付いた。

「レリイ？」

今まではガイアスに連れられて通る事が多かったので、必然的にガイアスに隠れていたのだ。今日はガイアスではないが、これはもう条件反射だ。

「ごめんね・・・怖くて・・・」

「・・・ああ、ガデイスか。逃げなくても大丈夫だよ。こいつはここから離れる気はないみたいだから。」

「・・・えっ!？」

(ガデイスってこの子の事だったの!?)

ガデイスの前を通り抜けて行くと、肉を担いだガイアスが奥から歩いてきた。ヴィトの腕に張り付くレイリアを見て、無言で立ち止まった。

「ガイアス、リュミエルの檻はどうだ？」

「・・・修復には三日はかかるな。」

「そうか・・・」

ガイアスの視線が自分の腕にある事に気付いて、ヴィトはレイリアに笑いかけた。

「レリイ、もう通り過ぎたから大丈夫だよ。」

「・・・あっ!ごめんなさい!」

ぱつと顔が赤くなつて腕から離れた。

「それはガデイスの？」

「ああ。」

それだけ答えて、ガイアスはガデイスの所へ向かつて行つた。

「さ、こつち。」

前に行くヴィトの後ろを遅れずについていきながら、レイリアはふと思つた。

(リュミエーが檻を壊しちゃつて・・・昨日は騎獣舎に連れ帰られて

たけど、どこにいるんだろう?)

「あの、ヴィト・・・」

「ほら、あそこだよ。」

言われてヴィトが指差す方を見れば、そこには分厚い壁に鎖で繋がれたリュミエルがいた。銀色の鎖で繋がれている様は、リュミエルの野生味ある美しさを際立たせていた。

「・・・リュミー・・・」

グルル、と一見唸っているかのような声を出す。が、それは喉を鳴らしているだとレイリアは分かった。

「おはよう。昨日は本当にありがとうね。」

言いながらそつと額を撫でると、嬉しそうに目を細めた。

「レリイ。リュミエルは・・・シレイは主を一人しか認めないって、以前言ったよね。」

「え? あ、はい。」

リュミエルの首もとに頬を寄せていたレイリアは、慌てて毛並みから顔を離れた。

「リュミエルは・・・レリイを主人と決めたみたいなんだ。」

「・・・」

あまりに予想外の事を言われて、レイリアは啞然としてしまった。

「・・・え?」

取りあえず声だけ発して、言われた事を頭の中で反芻する。そして。

「えっ!? 私!?」

その反応が思った通りで、ヴィトはくすくすと笑ってしまった。

「そう。君。」

「えっ・・・だって、主人はイルア様じゃないの?」

立ち上がったレイリアの足下に、リュミエルは警戒心もまるでない様子で寝そべった。それを見て確信する。

「確かに飼い主はイルア様だけど、リュミエルが決めた主人はレリ

イだよ。その証拠にレイリイには心許しているし、昨日だって檻を破って守りにきた。」

「そう・・・なのかな・・・」

ちらりとリュミエルを見下ろすと、ぱっと顔を上げて見つめ返してきた。その綺麗で無垢な瞳に頬が緩んでしまう。

「だからレイリイ。君は主人として、きちんとリュミエルを制御しないといけないよ。」

「リュミールを・・・制御？」

うん、とヴィトは頷いた。

「シレイは主人を守る為ならかなり凶暴になるからね。一度そうなると主人の声も届きにくい。」

「・・・・・・」

レイリアはもう一度リュミエルを見つめた。こんなに柔らかく、優しいのに。凶暴になって声も届かなくなるなんて想像出来ない。

「もしこちら側の人間を殺してしまうような事があれば、リュミエルは処刑されるかも知れない。」

「・・・・・・!!」

（処刑？）

驚きに目を見開くレイリアに、ヴィトは小さく笑いかけた。

「だから、そうならないように。ちゃんとリュミエルを調教して欲しいんだ。」

「・・・・・・」

そつとリュミエルの側にかがみ込むと、リュミエルが手に頬を擦り付けてきた。それに応えて撫でながら、レイリアは思う。

（リュミールが私を選んでくれたなら・・・私を守る為に必死になってくれるって事だね・・・。）

それと同時に、リュミエルが周りの人を傷つけてしまう可能性があるという事だ。

（そんな事にはなって欲しくない・・・。リュミールに怒って欲しくないし、その所為で誰かが傷付くのも嫌だし・・・。そうさせてし

まって処刑だなんて・・・)

そんな事は、絶対に嫌だ。

「・・・うん、分かったわ。」

リユミエルに頷いて、レイリアはしっかりヴィトの目を見据えた。

「ちゃんとリユミーが怒らないようにする。言葉を聞いて貰えるように、頑張る。」

「・・・うん。」

ヴィトは微笑んでくれた。優しい笑みだ。応援してくれてるのが伝わってくる。だからレイリアも、笑んで返した。

イルア様の側にいたい。だから、少しでも心配かけないように護身術を必死に習おうと決めた。そして、レイリアを守ってくれるリユミエルを、酷い目に遭わせないように、必死に調教を習おうと決めた。

?? 絶対にやってみせる!

レイリアはそう強く、固く誓ったのだった。

「まだだ。」

「・・・っ・・・えっ!?!」

はあっ、はあっ、と荒い息を繰り返すレイリアは、汗だくでかろうじて声をあげた。対するガイアスは涼しい顔をしている。そして、

もう一度言った。

「まだだ。もう二週はしてこい。」

「っ……！」

がつくりと首を垂らし、しかしそう言われたら走るしかないのは重々分かってている。

「……い……」

まともに“はい”と返事すら出来なかったが、レイリアは必死に足を動かして走り出した。

??ほとんど歩いている様な遅さだったが。

「はっ……はあっ……」

息も絶え絶えでレイリアは屋敷の敷地を走る。

(ガイアス……厳しいっ！)

あの日から、レイリアにはまず基礎体力をつけろとガイアスから命令が下った。護身術を習得する体力がなければ労力の無駄だ、と。(だ、だからって……毎日動けなくなるまで走らされるなんて、思わなかった……)

しかし思い返してみれば、ヴィトもガイアスも結構な運動量を毎日こなしていた。特に、ガイアスだ。さすが警護も任されているだけある。

(というか……私の運動量が元々少ないだけ……?)

色々と思っていいたら足下がお留守になった。

「うわっ！」

どさあっ！と派手に転んだ。手を付く事さえなく転んだので、軽く頬を擦って、痛い。

「はあっ、はあっ……」

頑張って起き上がると、再び走り出した。今はこれをしなければいけないのだ、レイリアは。

「あっ」

どさっ、とまた転んだ。両手について起き上がろうとするも、身体

が重すぎて持ち上がらない。

「……っ……」

何度やっても駄目で、ああ、足も擦りむいたかも、と思いながらその場に突っ伏してしまった。

（ガイアス……怒るかな……）

じやり、と頭の方で土を踏む音がした。気になっても顔を上げられないでいると、ごろりと仰向けにされた。そこに映るのは赤銅色。

（ガイアス……）

息が苦しくて、呼吸するので精一杯だ。そんなレイリアをしばし眺めてから、ガイアスはおもむろにレイリアを抱き上げた。

（えっ？）

思いもかけずそっと抱き上げられ、レイリアは驚いて目を丸くした。だが、それ以上の反応が取れないし、動けない。

「……っ……」

ガイアスは無言のまま屋敷の方へと歩き始める。その腕の中が揺り籠のようで、溜まっていた疲れのせいもあって、レイリアは誘われるように目を閉じた。そうしてすぐに、意識を手放してしまった。

（ガイアスでも優しく接してくれる事があるんだ……）

そんな事を思いながら。

夕食の仕度をしているとガイアスが騎獣舎から帰ってきた。お疲れ様、と言おうとして別の台詞が飛び出した。

「レイリィ！どうしたんだ？」

気絶しているレイリアは、ところどころ擦り傷が出来てしまっている。ガイアス是不機嫌そうに顔をしかめた。

「こけてた。」

言う事それだけか？

「……レイリィは加減が分からないのか、それとも必死なだけなの

か・・・」

言いながらガイアスを促して居間のソファにレイリアを横たわらせる。

「・・・俺が走らせた。」

「・・・ガイアス・・・」

二人してレイリアを見下ろしながら話す。

「こいつはもう無関係じゃない。一番危うい立場にいる。いつまた襲われて、その時死ぬとも限らない。なら・・・いち早く鍛えるしかない。」

ヴィトはくすりと笑いかけた。

（何よりもレリイの為か・・・）

「けど、レリイって鍛えられるのかな。」

そう言くと、ガイアスのはあーっ、と溜息を吐いた。

「・・・どうだろうな。こいつは、弱い。」

「多少は体力もつくかも知れないけど・・・それでも、自分の身さえ守るのは難しそうだな。」

ヴィトの意見にガイアスは深く頷いた。

「こいつの武器はリュミエルだな。あれを上手く使うしかない。」

「そうだね・・・」

レイリアが自分の身くらい守れるようにするには、リュミエルを上手く従えるしか、道はないように思える。

「・・・まあでも、本人の能力を上げる事も無意味ではないよな。」

「・・・まあ、な。」

例え、僅かしか変わらなかったとしても。それでも無意味ではない筈だ。

「・・・さ、傷の手当をしないと。ガイアス、消毒持ってきてくれ。」

「分かった。」

言い置いてその場を去る背中を眺め、ヴィトは小さく笑った。

（無愛想だけど心の中では結構色々思ってるんだよな、ガイアスは。

それで・・・結構お人好しだな。）

きっと誰よりもレイリアの安全を考えている。だから、厳しくあた
るのだ。

（けど厳しくした後はどう接したらいいのか分からないっていうの
が、問題だな。）

そう思っ、ヴィトはこっそり苦笑した。

ちなみにこの夜イルアは。

きっちり報復してやったわよ！と嬉々として帰ってきたのだった。

第八話 “襲撃”の行方

また別の日。

レイリアはリュミエルの調教を教わっていた。講師はもちろんガイアスだ。

「シレイは気位が高い。だから信頼関係が弱ければ言う事は聞かない。」

「はい。」

最近のレイリアは、動き易いように髪をひとつに纏めている事が多い。そして、顔や手足などに傷があるのもしょっちゅうだ。イルアはそれを悲しんでいるが、レイリアはこれでいいと思っている。無力な自分への励みだ。

「慣れないを好まないから、必然的に甘えは信頼関係を希薄にすると思え。」

「はい。」

ガイアスと目を合わせているのは正直怖いが、リュミエルと自分の為だ。必死に見返す。

「そして、争いを嫌う。・・・だが主の為となればそれが覆される。その分、精神的に不安定になりやすい。覚えておけ。」

「・・・はい！」

目を逸らさないようにしていたせいか、ほんのり涙目になっている気がする。しかしガイアスになんの反応も見られないから、自分で思っているより、目に変化はないのかも知れない。

「イルアの命だ。今日から日中はリュミエルの鎖を外す事を許す。」

「はい！」

途端に頬が緩む。するとガイアスは、やっぱり不機嫌そうに目を細めた。

「う……すみません……」

「……………」

しばらく縮こまるレイリアを見ていたガイアスだが、やがてゆっくりと口を開いた。

「……まずはリュミエルの感情の起伏を読み取れるようになれ。」

「えっ……あ、はい！」

てつきり怒られるかと思ったのだが、思いがけずアドバイスが貰えて、慌てて頷いた。

「それで危険を回避出来る可能性が高くなる。」

「わ、分かりました！」

「それと」

「はい……？」

すつと眼光が鋭くなる。レイリアはごくりと息を呑んだ。

「リュミエルの暴走はお前の責任になる。覚悟しておけ。」

言われた言葉に背筋が一気に冷えた。声が震えないように、気をつける。

「……分かりました。覚悟、します。」

そう答えた時、気のせいかと思う程僅かに、ガイアスの表情が柔らかくなったような気がした。

「リュミー、今日から日の出ている間は一緒に過ごしていいって！」

言いながら繋がれた鎖に手を伸ばす。リュミエルはそんなレイリアの身体へその額を擦り付けた。

「リュミーも嬉しい？」

預けられた鍵で鎖を外し、リュミエルを解き放つ。擦り寄る身体を抱きとめると、ふわふわの毛並みをよく撫でてやった。

「ねえ、リュミーが私を選んでくれたって聞いたんだけど……」

そろりとその瞳と目を合わせる。リュミエルはゆっくりと瞬いた。
「そうなら・・・私、良い主になれるように頑張るね。」
そつとリュミエルの首を抱く。応えるように喉を鳴らすリュミエルは、レイリアの肩にそつと顎を預けた。

そのまた別の日。

相変わらず体力作りとリュミエルの調教を義務づけられていたレイリア。しかしそれと同時にこなさなくてはならないのが、使用人、そして騎獣番の仕事だ。

「レイリィ、それが終わったら居間の掃除を頼むよ。」
「はい！」

「終わりました！」
「じゃあ各部屋の掃除を。」
「はい！」

「終わりました！」
「さつさと走りに行け。」
「は、はいっ！」

「・・・・・・っ」

「お疲れ様。少し休んでいいよ。」

「は・・・い・・・っ」

「レリイ、大丈夫？」

「あつ、大丈夫です、イルア様。少し休ませて頂いたので・・・」

「そう？無茶言われたら私に言ってね。」

「はい、ありがとうございます！」

「リユミー、今日はそろそろ戻ろつか。」

「・・・感情は読めたか？」

「あつ、あの、なんとなく・・・」

「・・・・・・」

「頑張ります！」

「レリイ、お風呂沸いたよ。」

「ありがとうヴィト・・・」

「ただいま、レリイ！」

「お帰りなさいませ、イルア様！」

「ただいま、レリイ。」

「お、お帰りなさいませ、セティエス様！」

「お腹空いたわ・・・」

「先にお召し上がりになりますか？」

「うん！」

「お嬢様、お食事よりもお湯を。」

「えー・・・」

「お嬢様。」

「はい・・・分かったわ。レリイ、用意してくれる？」

「はい！ただ今！」

「今日も美味しかったわー」

「お口に合ったようで良かったです。」

「ヴィトは料理上手いわねえ。」

「ほんとに、うらやましいです。」

「そんな事ないですよ。」

「セティは料理しないの？」

「お嬢様・・・私も使用人のいる家庭で育ちましたから、料理などはした事ありませんよ？」

「あ、そうだっけ。」

「・・・」

「・・・レリイ、ちゃんと休まないと身体を壊すよ。」

「あ・・・はい、セティエス様・・・」

「・・・ヴィト、連れて行ってあげなさい。」

「はい。・・・レリイ、立てる？」

「はい、大丈夫です・・・」

「よろけてるよ。ほら。」

「・・・すみません・・・」

（役得かなあ。）

「おやすみ、レリイ。」

「はい・・・おやすみなさいませ・・・セティエス様」

「ヴィトももう休むといい。」

「はい。失礼致します。」

日が昇り、また忙しい一日が始まり、レイリアがばたと頑張っている頃？。

イルアは王城へ向かっていた。二週間に一度の登城では、必ず城から迎えの馬車が出ていた。それ以外で登城する場合はヴィトが御者を努め、所有している馬車を使う。今回は通例の登城なので迎えだ。その馬車に揺られ、イルアは外の景色を睨んでいた。

「・・・お嬢様、何かお気に召さない事が？」

正確には景色など見ておらず、考えがぐるぐる頭を渦巻いている。

「ええ。うちを嗅ぎ付けた奴らの事よ。」

その表情は、温和なお嬢様ではなかった。対するセティエスの表情も鋭く変わる。

「今までこんな失態はありませんでしたね・・・。」

「そうなのよ。“私”が“レーヴェ”だって事は陛下と殿下しか知らない筈だもの。それに、レーヴェとして顔を晒した敵は排除している筈よ？」

「確かにそうですね・・・。我々も確認していますから、他へ漏れる可能性はないに等しいですね。」

イルアはちらりと御者席へ視線を向けた。

「・・・こうして話しているのを聞き取る事だって、ヴィトみたいな人じゃなきゃ出来ないものね・・・。」

その台詞にセティエスが興味深そうに微笑んだ。

「ヴィトの他にもあいつたものがあると、そうお考えですか？」
その問いに、意地悪に微笑み返す。

「どうかしら？生き残りがヴィトだけとは限らないんじゃない？それこそ、可能性は無いに等しいけれど・・・ね。」

微笑みは愛らしく、それでいて妖艶で、僅かに残酷な気配を纏う。

「取りあえずは尾を潰しましたし、すぐには動けないでしょう。」

「そうね。あの襲撃も苦肉の策って感じだったものね。」

くすくすと笑う様はいつもの“お嬢様”に戻っていた。・・・台詞はともかく。

「さて、お嬢様。王城へ着きましたよ。」

「ああ、行かなくてはね。」

さつと温和な笑顔をたたえ、イルアはセティエスに先導され、優雅に馬車から降り立った。

王城はまさしく王が住まう城で、それとは別に唯一無二の王位継承者（一子しか生まれなかった為）である王子に与えられた子城がある。他にも王の子の為に建てられた城はあるが、一子しかない今は、王族の療養所や砦となっていた。

王城はそう言った城とは違い、奥へ進む程に住み易さを重視されて作られていた。そのおかげで中心部の回廊はとても心地が良かった。

「日当りが良くって気持ち良いわねえ。」

そう言いながら目を閉じていると、セティエスが笑う気配がした。

「なあに？」

「いえ・・・」

その微笑が柔らかくて、イルアはなんだかくすぐったい気持ちになる。

「ヴィトが・・・レリイを迎えに行った時に、日溜まりですやすやす眠っていたのだと、困っていたのを思い出しまして。」

「あら、レリイが？・・・らしいわねえ。」

「らしいですね。」

二人してくすぐす笑っていると、元気良くこちらへ近づいてくる気配がして振り向いた。

「あら・・・」

目線の先には、艶やかなまでのしつとりとした美しさを纏う、美貌の麗人がいた。淡い茶色の長い髪がするりと肩を滑る。

「これはエルフィア様。お久しぶりにございます。」

イルアがその声をかけて一礼すると、麗人？エルフィアはにこりと笑いかけた。

「本当に久しぶりだな、イルア。セティエスも元気そうだな。」

声をかけられ、セティエスは深く叩頭した。

「気にかけて頂けて光栄です。」

「相変わらず真面目な奴だなあ。」

くすぐすと笑う様はイルアとそう変わらない。その微笑みに惹かれる男がいくらいるだろうか・・・。

「イルア、以前贈ったシレイはどうだ？乗れるようになったか？」

「あ、ええ・・・相性の良い娘に世話を任せておりますわ。」

一瞬ぎくりと固まったイルアを面白そうに眺め、エルフィアはにやりと笑った。

「へえ、シレイと相性の良い娘？それじゃあイルアは主になれなかったわけだ！」

「・・・エルフィア様。あまり苛めないで下さいませ。」

ちよつとだけ悲しくなったイルアは困り顔でそう訴えた。しかしエルフィアはにやりと笑んだまま言う。

「シレイは野性味ある美しさがあるだろう？だから、愛らしく野性的なイルアに似合うと思って贈ったんだがな？」

くつくつくと楽しそうに声を抑えて笑うエルフィアに、イルアは心の中でやつぱりか。と呟いた。

「エルフィア様・・・わたくし、野性的でしょうか？」

「ああ、そうだ。愛らしい容姿と言動に惑わなければ、その身の内

に鋭さと強かさが見えるぞ。」

「まあ・・・」

相変わらずこの人は鋭い。イルアはにつこりと微笑んだ。

「惑わすだなんて、悪女みたいですわね、わたくし。」

そう切り返すと、エルフィアは緩く頭を振った。

「いや、イルアは悪女にはなるまいよ。」

そうして真っ直ぐに見つめてくる。

「イルアの芯は純粹だ。濁る事はあるまい。」

この言葉には、思わず胸が暖かくなった。自然と頬が緩む。

「・・・エルフィア様が男性でしたら、妻に迎えて欲しいところでしたわ。」

すると応えて笑う。

「私こそ、自分が男ならばイルアを口説いていたと思うぞ。」

くすりと笑い合う。

「残念ですわね。」

「残念だな。」

ひとしきり笑い合うと、エルフィアはさらりと身を翻した。

「ではな、イルア。今度は遠乗りでも誘おう。」

「ええ、是非。」

わずかに振り返り、エルフィアは颯爽とその場を去って行った。

「あの方も相変わらずですね。」

「ほんとねえ。強く美しいっていうのは彼女の為にあるのね、きっと。」

「あの方が一軍の副将でいらっしゃるうちは心強いですね。」

「そうね。将でも問題はないわね。」

「それでは今の将が可哀想ですよ?」

くすくす笑いながらイルアは言う。

「あの方はお強いから、エルフィア様でもそうそう地位は動かせないわよ。」

「・・・それもそうですね。」

エルフィアが所属する一軍は、有事の際は一番に敵へ斬り込む、特攻隊とも言える部隊だ。程度の知れない相手へ飛び込んでいくのだから、その腕はかなり良く、ついでにとっさの判断力に優れた者達が集めれる。その中で、女であるエルフィアが副将である事は、かなり驚くべく事なのだった。あまつさえ、容姿の美しい女だ。当初は下世話な噂が飛び交ったり、さんざん非難されたという。

それが今では、誰も彼女の地位に異を唱えない。むしろふさわしい地位なのだ。相変わらず美貌をからかわれる事はあるものの、實力は申し分ない。ともすれば男女共に憧れの対象となっていた。

「あ、今度はキーセル様だわ。」

「ああ、本当ですね。・・・先日のでお話があるのでしょうか。」

「ああ、あの偽物ね。」

早足にやってくる三軍の将に、イルアはにこりと笑いかけた。キーセルはイルアに微笑まれてもあまり表情を変えず、小さく頷いた。

「イルア嬢・・・」

「こんにちは、キーセル様。」

キーセルは歳若い將軍だった。エルフィアも若い、こちらはつい三年前に軍へ入ってから、異例の大出世というやつだ。あつという間に実力が買われ、当時の将であった今の副将に押し切られる形で將軍となった。本人は謙虚なものだが、有事の際はその謙虚さが嘘のように敵へ襲いかかる。それが印象的な為に“二重人格疑惑”がかかっていた。

ちなみに三軍は後方支援が主であり、情報収集にも長けている。ついでにいうと二軍は有事にあつて“実行部隊”といえる。一軍が突っ込み、二軍が斬り伏せ、三軍が仕留める。というのが一連の流れになっていた。

「最近は変わった事はないか？」

キーセルはけっこう無表情だ。あまり表情が動かない。が、声音は実に有弁で、今も顔には出ないものの、心配してくれているのがありと伝わってきた。

「ええ、おかげさまで……。何事もなく過ごしております。」

小さく腰を落として礼をすると、キーセルは頭を振った。

「質の悪い強盗だな。……。襲われた使用人というのは、大事な何か？」

あの襲撃がレーヴェに関わっているとは言えない為、王族の計らいで“質の悪い強盗”という事になったのだ。曰く、自国を荒らす行為をする強盗だと。

「ええ、あの子もすっかり元気になって、少しでも役に立てるよう
に鍛えておりますわ。」

「まあ男ならば鍛えねばな。ヴィトというのはよく出来ているが。」

「……。キーセル様、襲われた子は娘ですわよ。」

「……。……。そ、そうか……。すまない。」

ちよつとだけ目を見開いて、キーセルは僅かに目線を落とした。

「レイリアといって、日溜まりで動物と微睡むのが似合う様な子ですわ。」

「……。……。？……。そうか。それならば無理はさせない方が
いだろう。エルフィア殿とは違って、体術には不向きそうだからな。」

首を傾げてそう言うキーセルは、“可愛い”という感覚がよく分
からないのかも知れない。その様子に思わず笑みが零れた。

「ええ、そうですわね。けれど……。なかなか決意が固くて、張り
切っているのですよ。」

その様子を思い浮かべて頬が緩む。苦手だというのに懸命に取り組

んでいる姿を見ていると微笑ましいのだが、だんだん心配になってはくる。

「・・・イルア嬢はその娘が気に入っているのだな。」

キーセルの口元が僅かに笑みの形をとっていた。それに驚きながらも、イルアは大きく頷いた。

「ええ。とても気に入っておりますわ！可愛いんですもの。」

言いながらくすくす笑ってしまう。それを眺め、キーセルはその場を離れた。

「ではな、イルア嬢。また何かあれば力になろう。」

「はい、ありがとうございます。お努めご苦労様です。」
礼をして見送って、イルアはセティエスに向き直った。

「可愛いって公言するくらいなら、“変態”みたいではないでしょう？」

「はい。大丈夫です。」

くすりと笑って頷く。以前、レイリアに騎獣番の服を着せた時、イルアがしようとしていた発言を止めた時？。

『この服だとまた違った魅力があつていいわ！余計に保護欲がそえられるというか、むしろ隙が出来るというか！』

と叫ぼうとしていたイルアの口をとっさに塞いだ。あの場での発言をしていたら、レイリアは引いていただろう。イルアを若干警戒していたかも知れない。そんなイルアに、

『あまりそう言った発言をされますと、“変態”みたいですよ、お嬢様。レイリアに嫌われますよ？』

そう脅しておいて良かったと思う。まあ、“お嬢様”の立場からしても控えた方が良い発言だ。

「でもレイリアは可愛いわよね？そうは思わない？」

小首を傾げるイルアに、セティエスはにこりと微笑んだ。

「ええ、思います。」

「ふふつ、そうよねえ。」

にこにこしながら歩く主人に従いながら、セティエスは思った。

（お嬢様がこれほどに心奪われる存在は、おそらくレリイが最初で最後だろうな。）

前に行く小さな背に、思わず首を傾げた。

（・・・しかしレーヴェを後世に残す為には、お嬢様もいずれは誰かを迎え入れなければならぬ。はたしてお嬢様が惹かれる男など現れるだろうか？）

思った側から頭を振る。

（可能性は無いに等しい、か・・・）

「どうしたの？セティ。」

主人に声をかけられて、セティエスはにこりと微笑み返した。

「いえ、何もございませんよ。」

「そう・・・？なら良いのだけれど。」

不思議そうにする主人に笑ってごまかし、セティエスはわざと先を促し、追い立てた。

「さあ、早く殿下にご報告に伺いませんと。」

「ちよつと、分かつてるわ！まったく・・・」

せつつかれて文句を言うイルアを見て、セティエスは小さく笑った。

第九話 微睡眠

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ガイアスは思わずじつと見てしまった。

（なんだこれは？）

そう思いながらなおも見つめる。その視線の先には、夕日に照らされるリュミエルと・・・レイリアがいた。

「ヴィトが言っていたのはこれが・・・」

小さく息を吐く。

うずくまるリュミエルはレイリアを囲うようにして丸くなって眠っていた。とはいっても耳はしっかりガイアスへ向いているから、レイリアを起こさないように寝た振りをしているのだろう。主人であるレイリアはすやすやと眠ってしまっている。リュミエルの首には鎖がついているから、繋ぎにきたところで眠ったのだと思われた。（まあ・・・嫌だ無理だと言わずに耐えているからな・・・）

そつとしゃがみ込むと、リュミエルが目を開けた。長く優美な尾がぱたりと振られる。

「こいつを連れてくぞ。このままだと風邪でも引きそうだからな。」
そう言くと、リュミエルは囲っていた尾をふわりとどけた。どうやら譲ってくれるようだ。

以前なら誰か近づくと逃げていたリュミエルだが、レイリアが来たらからそいつは事はない。レイリアが逃げないのを見て、仕方なくそれに習っているようだ。

（なんでこんなのが主人なんだか・・・）

苦笑しつつも、レイリアを起こさないようにそつと抱き込む。起き

ないのを確認すると、そつと立ち上がった。なるべくレイリアの姿勢を変えないように抱えたので、レイリアの顔が首もとにあって少しくすぐつたい。リュミエルが少し心配そつにレイリアを見ていたので、ガイアスは思わず笑ってしまった。

（リュミエルに好かれているのは確かだな・・・）

ゆっくりと屋敷へ歩を進める。あまり足音を立てないよう、揺らさぬよう、そつと。屋敷ではヴィトが夕食の仕度をしていて、入ってきたガイアスを見て、その腕を見て、思い切り驚いていた。

「・・・これは？」

先日のように傷はないようだ、とヴィトの視線が彷徨つのを見て、ガイアスは苦笑した。

「リュミエルを戻しにいったところで、寝ていたらしい。」

それを聞いたヴィトが、大きな溜息を吐いた。

「・・・以前も言ったんだけどなあ・・・。」

「以前？」

眉を顰めたガイアスに、ヴィトは小声で話す。

「そう。レリイを町へ迎えにいった時にね。・・・木の下で眠ってたんだ。一人でね。だからその時に、いくら心地良いからって無防備に寝ちゃ駄目だって、言ったんだけどな・・・。」

ああ、とガイアスは頷いた。

「そついや、言ってたな。」

「うん。けどレリイの頭には入ってないみたいだね。」

くくつ、とガイアスが笑った。抑えているは、やはりレイリアを起こさない為だ。

「こいつにそつという警戒心を植え付けるのは無理じゃないか？」

「そつか？」

「・・・今する話じゃないな。こいつを置いてくる。」

「ああ・・・」

不思議そつに首を捻るヴィトも、異性や恋愛に対する感情は、“鈍

い”というよりも“乏しい”のだった。

レイリアの部屋を開け、扉は閉じずにそのまま部屋へ入り、ベッドに寝かせる。

（これだけ運ばれて側で話もしてるのに起きないとは・・・）
あの状況で熟睡するのはさすがにマズいんじゃないかと思い、ちよつと揺すってみた。

「おい」

軽く肩を揺する。

「・・・・・・・・・・うー・・・・・・・・」

嫌そうに顔をしかめられた。

（まあ、生きてるならいいか。）

それ以上は揺すらず、ガイアスは上掛けをかけてから部屋を後にした。

ヴィトの夕食の仕度を手伝っていると、表に馬車が止まった。ヴィトと顔を見合わせ扉へ近づくと、何故か主人の明るい声が聞こえた。

「ただいまーっ！」

「「？」」

ガチャリとヴィトが扉を開けると、イルアが当然のように帰ってきていた。

「ただいま！」

「お帰りなさいませ。・・・お早いお帰りですね……。申し訳ありませんが、夕食はまだ後になります。」

「いいのよ。今日はもういいって言われたから帰ただけだもの。」
イルアはにっこり笑ってそう言った。

「セティエス様は？」

「いるよ。ただいま、ヴィト。」

セティエスも馬車を降りたのを確認すると、すぐにガイアスが馬車を見送りに出た。

「お帰りなさいませ。お二人共、湯の準備は出来ておりますから、お先に湯浴みなさって下さい。」

「はあい。」

「分かった。」

廊下に進みかけたイルアが、くるりと振り向いた。腰まである髪と、スカートの裾がふわりと舞って愛らしい。

「レリイはどうしたの？」

その問いに思わず苦笑する。

「それが・・・」

言いかけたヴィトにガイアスが続ける。

「騎獣舎で熟睡していたから、部屋で寝かせてる。」

「え？」

「騎獣舎で？」

驚くイルアの横でセティエスが首を傾げた。

「リュミエルを戻しにいつて、その場で眠ったようだった。」

「・・・レリイは子供みたいだな。」

「というか無防備過ぎよね？」

「イルア様はレリイの事は言えないと思いますが・・・」

ヴィトの突っ込みはいつも通り無かった事にされた。が、釘を刺せとばかりにセティエスがにこりと笑いかける。

「お嬢様は周りの目を気にしなさ過ぎですからね。」

「うつ」

くすくすと三人に笑われて、イルアはあっさり降参した。

「はいはい。“お嬢様”らしさに気を配るように致します。」

それで、とイルアは廊下を見やった。

「ちよつと話があったのだけど・・・」

「レリイにですか？」

「うーん・・・レリイもそうなんだけど・・・」

ガタツ、と廊下の奥で音がした。

「……？」

一様に首を傾げた後、セティエスが様子を見に行つた。多分、レリアが起きたのだ。外が暗くなっているのに気がついて慌てた・・・そんな所だろう。そう思いながら扉の前まで来ると？。

「大変！」

案の定、すごい勢いでレリアが飛び出してきた。しかし開けたすぐそこにセティエスがいたので、セティエスに突っ込んだ。悲鳴をあげる間もなく突っ込み、抱きとめられる形になって、レリアは余計慌てた。

「すつ、すみませんあの！突っ込む気はなくて！外が暗くて、寝てしまつて・・・仕度が・・・」

勢い込んで離れようとしたレリアを、逆に壁にぶつからないように抑えつつ、セティエスは可笑しくて笑いながら言つた。

「レリイ、そんなに慌てたら余計に危ないだろう。」

レリアはもう真っ赤で、慌てるあまり涙目だ。

「は、はいっ、すみません・・・！」

「落ち着いて。仕度はヴィトがやっているよ。」

「あつ、はい・・・ヴィトが・・・」

ようやく視線が居間へ向いて、イルアを見つけて目が丸くなった。

「・・・・・・・・あれ？」

その台詞に、堪えられずに四人とも吹き出した。そんな四人におろおろしつつも、レイリアは慌ててイルアへ駆け寄った。

「どうされたんですか？」

駆け寄ってきたレイリアをいつもの通りにぎゅっと抱きしめ、イルアはふわりと微笑んだ。

「今日はもう帰っていいって言われたのよ。だから喜んで帰ってきた。」

「は、はあ……」

はてなマークが飛び交っているのが目に見えるようだ。そんなレイリアを椅子へ促して、イルアは堂々と言い放った。

「さあ、皆座ってちょうだい。話があるの。」

ヴィトの計らいによって、居間のテーブルには香り良いお茶が用意された。それを口を含みつつ、イルアが口を開いた。

「今日、殿下にこの間の襲撃についてご報告に上がったのだけれど、その時にね、レイリアの事もお伝えしたの。」

言われてレイリアは瞬いた。

「私の事、ですか？」

ええ、とイルアは頷く。その表情が僅かに鋭くなり、不安とともにどきりとした。

「レイリアにバルクス家の秘密を教えた事と、それを承諾してもらっている事。そして、リュミエルの主だっという事もね。」

最後にはにつこり笑ってそう言われ、なんとなく居心地が悪くなる。

「その……飼い主はイルア様なのに……」

あら、とイルアが小首を傾げた。ひどく愛らしいその仕草に、思わずレイリアの頬が赤くなる。

「リュミーが選んだのはレイリイじゃない？それなら、リュミーが選んだ貴女が、間違いなくリュミーの主人なのよ、レイリイ。」

「・・・・・・イルア様・・・・」

その言葉にじいんとしていると、につこり笑ってとんでもない事を言った。

「それでね、そのリュミーをくれた人が様子を見たいのですって。だから、明日はリュミーと一緒にレイリイも登城してね！」

「はむっ・・・・」

はい、と勢いで返事をしようとしたレイリイの口をヴィトが塞いだ。

「勢いで返事をするのはそろそろ止めようね、レイリイ。」

「イルアに乗せられるな。」

ヴィトに加えてガイアスにまで釘を刺されて、レイリアは殊勝に頷いた。それにイルアがむくれる。

「何よそれ。私がレイリイを騙そうとしてるみたいじゃない？」

「ごまかそうとされる事がありますよね？」

抗議をあつという間に一蹴されて詰まる。こほん、と咳払いをしてごまかす。

「ま、まあともかく。明日はリュミーとレイリイも一緒に登城するわよ！」

決定か、と男三人がひそかに突っ込んでいる中、レイリアは驚きすぎて反応出来ていなかった。

「レイリイ？」

四人に顔を覗き込まれてやっと我に返った。

「あつ、あのっ・・・・わ、私も、ですか・・・・？」

「そうよ。」

すっかり大きく頷かれ、行くしかない事を悟る。がっくりと頂垂れ、

レイリアは小さく返事をした。

「……はい……行きます。」

えらいえらい、とイルアに頭を撫でられ、レイリアはされるがままになっていた。

翌日、ガイアスは屋敷に残る事になった。レーヴェとしての用で登城する場合は全員で行くのだが、今回は、単にイルアの登城にレイリアとリュミエルがついていく、という形なので、ヴィトがガイアスが残る事になったのだ。

ここで問題になったのが、リュミエルが万一、脱走したり暴走した場合に、誰が抑えられるかという事だった。そこで選ばれたのがヴィトだった。

理由は、レイリアには分からないが。

「それじゃあね、レリィ。ここでリュミーとのんびりしていれば良いわよ。エルフィア様も時間が空いたら会いにくるだろうし、他の方がみえても特に畏まらなくてもいいから、ね。」

「はっ、はい！」

緊張のあまりリュミエルの鎖を握りしめるレイリアに、セティエスがそつとその指を解いた。

「そんなに握りしめたらリュミーが辛いよ。」

「あつ、はいっ！」

あわあわと指を離すと、今度は鎖を取り落としそうになる。

「落ち着いて、レリィ。鎖を繋いでおけばいいわよ。そうすればの

んびり出来るわ。」

「は、はい・・・」

戸惑うレイリアに、セティエスが笑いかけた。

「レイリイが落ち着くようにしたらいい。」

微笑まれて余計に緊張した。

「セティ・・・それくらいにしてあげて。」

「はい？」

不思議そうにするセティエスの腕を引っ張り、イルアはにっこり笑ってその場から歩いて行く。

「セティは天然なのよね。レイリイ、のんびりしててね！」

「イルア様、お仕事頑張ってください！」

何やら囁き合いながら去って行く二人を見送って、レイリアはリュミエルを振り返った。そして、険しい表情でその瞳を覗き込む。

「今日は一日頑張ろうね、リュミール！」

そんなレイリアの頬を、リュミエルは優しく舐めてあげた。

「わっ・・・リュミール・・・」

そうされているうちに、みるみる緊張が解けていく。

「・・・ありがとう、リュミール。」

リュミエルのおかげで緊張が緩んだレイリアは、いつも屋敷でしていたようにリュミエルの世話をした。食事を出し、体中の手入れをして、ようやく一息吐いた。

「ふー・・・」

リュミエルを鎖で繋いで、そつと額を撫でた。目を細めて和む姿にレイリアも心が和む。

「そついえば来ないね、イルア様が仰っていた方・・・」

きよろきよろと辺りを見回す。王城の裏庭であるここは、広過ぎず

狭過ぎず、小綺麗に整えられていた。

「ちよつと休もうかな。」

呟きにリュミエルが応えて、レイリアはリュミエルの隣に腰を降ろした。

と、その時。

「あれ？」

ふわり、と空に白い布が舞ったように見えた。振り仰いだ空に漂っていたのは・・・??。

「??ドゥールだ！」

思わず立ち上がると、足下でリュミエルがちよつと驚いたように耳を振った。

「ドゥールだね？ほら、あの翼だとか、肌も鱗みたいだし！尻尾が長いし！」

ドゥールはシレイよりも希少価値のある獣だ。騎獣として手元置く事は難しく、野生で見かけるとというのが一般的だ。

嬉しさでびよんぴよん跳ね始めたレイリアを見つめ、リュミエルは目を細めた。まるで自分の子供に対するような温かな目だ。

「あつ・・・」

興奮するレイリアに興味が湧いたのか、ドゥールがひらりと舞い降りてきた。

（わあ・・・まだ子供？）

大きな翼のせいで、間近で見るとよりも身体が大きく見えていた。舞い降りたドゥールは白い鱗の持ち主だったが、光を弾くと青みがかって見えた。そして、鱗は柔らかく、とても滑らかだ。

このドゥールは小型種らしく、レイリアの肩の上に収まる程だった。鬣は空の様な青色で、瞳は濃い琥珀色だった。ふわりと肩に舞

い降りたドゥールは、一度レイリアと目を合わせると、誘導するように肩から滑って宙を進み出した。

「あ、待って！」

リュミエルを振り返ると、穏やかな目がレイリアを捉える。

「・・・少しか、待っててくれる？」

問いかけると優美な尾を振って、その場に伏せた。

「ありがとう！すぐ戻るからね！」

言いおいてレイリアはドゥールを追いかけた。リュミエルが見えなくなる程行ってしまうのであれば、引き返すつもりだ。

「どこの子？というか、誰の子？まさか、野生じゃないでしょう？」
歩いてついていける程の速度でドゥールは進む。ふわり、ふわりと漂う様子が可愛くて、レイリアの頬は緩みっぱなしだ。ドゥールはふわふわと彷徨っていたが、ふと耳をそばだてた。

「？」

同じようにレイリアもそちらへ首を向けた。

「??？」

誰かが誰かを呼んでいる声が聞こえる。聞き慣れない、穏やかな声音だった。その方向に飛び始めたドゥールを追いかけてレイリアも進む。ちらりと振り返って確認すると、直線上にリュミエルが見えた。

ふわふわ飛んで行くドゥールの先に、いつの間にか逆光に包まれて人影が現れた。ふわり、と雲のような柔らかさを纏った人は、もう一度誰かを呼んだ。

「ララ」

穏やかな声音は少し低めで、影の位置から光の位置へ足を踏み入れたその人の容貌が分かった。緑がかった白い髪に、深い青の瞳。その目がちよつと見開いて、レイリアを捉えた。

「・・・・・・・・」

思わず足を止めたレイリアの前を、ドゥールは迷わずその人の元へ飛び、その肩にとまって小さく鳴いた。するとその人は、ドゥールへ向けて柔らかく微笑んだ。

「ララ。探したよ。飛べるようになったからって、あちこち行つて迷子になつたら困るだろう？」

言われたドゥールことララは、くりつと首を傾げた。

「ところで・・・」

再びレイリアに視線を戻し、その人は笑った。

「君は？見ない顔だね。」

その一言で王城の関係者だと理解したレイリアは、慌てて深く叩頭した。

「あ、あの！レイリアといいます！バルクス家にお世話になっております！」

「バルクス・・・イルアのところに？」

その人はすたとレイリアの前までくると、じつとレイリアを見つめた。その間にララがレイリアの頭へ飛び乗って、そこで落ち着く。

「あ、あの・・・」

困つて目線だけを上へ向けるレイリア。その様子をじつくり眺め、その人は微笑みながら頷いた。

「イルアが言つてた新しい使用人って、君の事だね。確か・・・レイリって呼ばれてる？」

「あ、はい。そう呼んで頂いています。」

「そうなんだ・・・なるほどね。」

くすくすと楽しそうに笑われて、レイリアは首を傾げた。

「イルアがね、君のお気に入り具合をあだこつだと話して行くものだから・・・」

「えっ！？」

イルアがよそで自分の事をどう言っているのか、かなり気になると

ころだ。

「うん、なんか・・・イルアが言ってた通りだね。」

「イ、イルア様、なんておっしゃってるんですか・・・？」

恐る恐るそう聞くと、その人は少しだけ意地悪に微笑んだ。

「秘密。後でイルアがうるさいからね。」

「えっ・・・」

「一つだけ教えてあげるよ。イルアが言うにはね、君は争いを好まない動物に好かれるんじゃないかって。」

言われてレイリアは目を丸くした。

「争いを好まない動物・・・ですか？」

「そう。例えば・・・」

ずっとレイリアの髪に触れた。

「セレイン・ドゥールとかね。」

（び、びつくりした・・・この子の尾に触ったのね・・・）

するりとララの尾を指が滑り、その人はにこりと微笑んだ。

「セレイン・ドゥールは争いも退屈も嫌いだからね。」

「そ・・・そうなんですか・・・」

戸惑っているレイリアをあまり気に留めず、その人は続ける。

「君がいるって事は・・・噂のシレイも来てるの？」

（噂の・・・？）

「あの、リュミエルなら来ています。イルア様にリュミエルを下さった方が、リュミエルの様子を見たいとおっしゃったとかで・・・」

するとその人は、リュミエルを渡した人物に心当たりがあるようだ。

「ああ、エルフィアか。」

そして今度は、レイリアが歩いてきた方へ足を進め出した。

「じゃあそのシレイ？リュミエルだっけ？紹介してくれるかな。」

「え？あ、はい・・・」

そこまで答えて、レイリアはようやく警戒した。そう言えば名乗りもないし、そもそもイルアと仲が良いという確証はないのだ。

「あの、失礼ですが・・・貴方様は・・・？」

そう問われて、ああ、と今更気付いた様子でその人は名乗った。

「ごめん、まだ言ってなかったつけ。僕はユーセウス・・・言いくらいからルセって呼ばれてるよ。君もそう呼んだらいい。」

「えっ、あ、はい。ルセ様。」

反射的にそう頷いて、慌てて次の質問をぶつけた。

「あ、あの！イルア様とはどういうご関係ですか？」

その様子をくすくす笑いながらユーセウスは答えた。

「なんていうか、友人であり悪友であり信頼出来る人物・・・かな。」

その言葉を頭の中で反芻しながら、レイリアは必死に推し量る。

（悪友ってというのが気になるけど・・・）

イルアとは、悪い仲ではなさそうだと感じた。

「イルアはどう？良い主人？」

その質問に、ぱっと頭の中の疑いが薄れた。

「はい！とても良い方です、イルア様は・・・。お屋敷の方々も！」

レイリアはにつこりと笑いかけた。それにユーセウスは楽しそうに笑い返して、進む先を見やった。

「あ、あれがリュミエル？」

「はい、そうです！リュミー！」

レイリアと目が合った途端に身体を起こして尾を振ったリュミエルに、たまらずレイリアは駆け寄って抱きしめた。

（ちゃんと待っていてくれたんだ・・・！）

ぎゅっと抱きつくレイリアの首元に頬を擦り寄せ、リュミエルは嬉しそうに喉を鳴らした。

「なるほどね・・・」

後ろでユーセウスの声がして、一瞬忘れていたのを思い出した。

「あっ、す、すみません・・・！」

慌ててリュミエルを離して立ち上がると、ユーセウスはくすりと笑った。

「いいよ。ほら、嬉しそうにしてるしね。」

その言葉に視線を落とすと、リュミエルは真つ直ぐにレイリアを見上げていた。そんなリュミエルに笑いかけっていると、ユーセウスが言った。

「良い天気だね。ここは日も当たって気持ち良いし、昼寝していてもいい？」

「……………え？」

あまりに驚いてそう聞き返してしまった。

「だから、昼寝。……ああ、シレイが怒る？」

「い、いえ！怒りませんよ、リュミールは……」

ぶんぶんと首を振ってそう答えると、ユーセウスはくすりと笑った。

「じゃあ君が困る？」

「あ、いえ……」

「良かった。じゃあちよつとここ、借りるね。」

言うが早いか、ユーセウスはリュミエルから少し離れたところにある樹の下へ寝転んだ。もちろん何も敷かず、そのままです。

「あ、あの、何か敷いた方が……」

「君はこういうところで寝る時、何か敷くの？」

寝転んだまま、不思議そうにそう訊ねられた。なんだか少年みたいな人だと思う。

「いえ……私もそのまま寝ます。」

なんだか可笑しくて、につこり笑ってそう答えた。ユーセウスは満足そうに、だよね、と言うとすぐに目を閉じてしまった。

「……………」

（変わった人……）

こうやって無造作な振る舞いをするのはレイリア達のように身分が低い者だけだと思っていた。しかし目の前の人物は、そんな事はおかしいのだろうか。

（あ・・・そう言えばどういう方なのか聞いてない・・・）

イルアの事を名前だけで呼ぶという事は、イルアと同等かそれ以上の立場の人間なのだろう。

（私の態度、失礼だったかな・・・）

ユーセウスをしばし眺める。木漏れ日の中で気持ち良さそうに寝ている様は、やはりあどけなく見えて、少年っぽさを強く見せた。

（まあ、取りあえず今はいいか。また後で色々聞いてみよう。）

そう考えて、さてどうしようかと辺りを見回す。

（・・・さしあたってする事もないな・・・）

ユーセウスを見て、木漏れ日につられて空を仰ぐ。

（・・・本当、良い天気・・・）

そう思ったら急に眠たくなってきた。

「私も・・・寝ちゃおうかな、ちょっとだけ。」

そう言ってリユミエルの側で眠ったレイリアが、“ちょっとだけで起きる事はもちろん、ないのだった。”

第十話 黄昏のそよ風

暖かな陽の光。

そよぐ風。

柔らかな自然の香り。

心地よい雰囲気の中、レイリアは微睡む。

（やつぱりリュミーの毛並みは気持ち良い・・・）

リュミエルはいつもその身体をレイリアの枕として提供してくれる。その肌触りや温かさは、レイリアにこれ以上ないくらいの幸福感を与えてくれる。その幸福に包まれていると、小さな笑い声が聞こえた。心地よい笑い声に気を良くして、くすぐったい気分で微笑んだ。

（ん・・・？笑い声？）

一拍遅れて不審に思い、うつすら目を開けた。ぼんやりする視界に誰かが映る。柔らかい雰囲気を纏うその人は、すぐ近くで頬杖をついてこちらを眺めていた。眼差しまでも柔らかく、こうして見られていても微塵も嫌な感じがしない。

（なんだろ・・・？）

そのままぼんやり見つめていると、その人がくすりと笑った。

「起きてるの？」

耳に心地良い声にぼうつとしていたが、言われた事を頭の中で反芻して、はつと我に返った。がばりと身を起こす。

「あつ！え・・・と・・・ルセ様、起きてらしたんですか!？」

「うーん、今僕の名前覚えてなかったよね？」

面白そうに笑いながら、ユーセウスはレイリアの肩についていた草を取った。ララはいつの間にかユーセウスの肩へ戻っていた。

「あ、ありがとうございます・・・」

「ほんとに、イルアが言ってた通りの人だね。」

そう言った顔は、楽しそうに笑っているのに何かかけ弱りがあつて??。レイリアは息を詰めた。

「殿下ー!」

遠くから声が聞こえて、二人ははつとそちらへ顔を向けた。

「・・・・・・やれやれ。」

「?」

ユーセウスは小さく呟いた後、レイリアへ向き直って言った。

「イルアに言っておいてよ。」

「え?あ、はい。」

よく分からずもこくこく頷く。

「僕の飼ってる犬が最近ちよつと凶暴化していてね。どうも優位に立とうとしているみたいなんだ。」

「・・・は、はあ・・・」

「こともあろうに僕の部下に噛み付こうとしている。」

「そう、なんですか・・・」

「そう。それをなんとかしてって言っておいて。」

「え?あ、いえ・・・分かりました・・・」

(イルア様ってそんな事もなさってるのかな・・・)
神妙に頷くレイリアを見て、ユーセウスは微笑んだ。

「よろしくね。」

そして、ゆつくりと立ち上がった。

「さて。それじゃあ僕も殿下を探しに行こうかな。」

「え？」

ユーセウスはさっさと歩き出しながら、レイリアを振り返って笑った。

「いくら気持ち良い天気だからって、熟睡するのは危ないと思うよ？シレイがいるからってね。」

そう、言っ

去って行くユーセウスを啞然と見送り、レイリアは思った。

（そう言えば・・・ヴィトにも似た様な事言われたような・・・）
なんとなくリュミエルと目を合わせる。

「・・・けど、こういう風に寝るのが気持ち良いのにね？」

そう語りかけると、リュミエルは大きな欠伸をしたのだった。

イルアの命で、エルフィアの手が空き次第リュミエルのところへ案内するように言われていたヴィトは、僅かに日が暮れかかった頃にようやくその役目が果たせた。

「随分待たせたな。」

一日の仕事をほとんど終えて、エルフィアは一日待っていたヴィトにそう声をかけた。

「お気になさらないで下さい。・・・ご案内しても宜しいですか？」
少し急かす様な雰囲気にくすりと笑い、エルフィアは頷いた。

「ああ、頼む。」

そうしてリュミエルとレイリアが待つ裏庭へ行こうとすると、後ろ

から慣れ親しんだ声がかけられた。

「エルフィア様！ヴィト！」

振り返ったエルフィアは、見る間に破顔した。

「イルア！本当にあのシレイを連れてきてくれたのだな！」

「もちろんですわ。それに、レイリアも一緒に連れて来たのですよ。」

並んで歩きながらイルアは嬉しそうにそう言った。

「レイリア？・・・ああ、イルアが言っていたシレイの主人か。」

くつくく、とエルフィアが笑うと、イルアは少しだけ苦笑した。

「ええ、リュミエルはレイリアの様子を見て、私たちへの接し方を決めているみたいなのです。」

「ほう・・・シレイが自ら学ぶとは・・・まるで親のように思っているのだな、そのレイリアとやらを。」

その台詞に、イルア、セティエス、ヴィトの三人は顔を見合わせた。

「親というより・・・」

「子供、でしょうか？」

イルアの台詞をセティエスとヴィトが引き継いで言うと、エルフィアはお腹を抱えて笑い出した。

「子供か！それは面白いな！」

「日が暮れて来たね。」

レイリアは空を見上げて呟いた。リュミエルは夕食を貰って満足そうだ。

「イルア様、そろそろお屋敷へ戻られるかなあ・・・」

腕を持ち上げて擦り寄ってくるリュミエルをしっかりと撫でてやり、

レイリアは主の姿を求めて建物を振り返った。すると向こうから、イルア達がやってくるのが見えた。

「イルア様！」

駆け寄るレイリアを見て、イルアがふわりと微笑んだ。

「レリイ、こちらがリユミエルをくださった、第一軍副将のエルフィアハイル様よ。」

紹介されて改めて美貌の麗人を見ると、その艶やかなまでの美しさに、同性にも関わらず見蕩れてしまった。

「？」

首を傾げる様まで美しく感じる。ぼうつとしているレイリアに、セティエスが促した。

「ほら、レリイ。名乗らなければ失礼だぞ。」

「あつ、すみません！私はバルクス家にお世話になっております、レイリアと申します。」

慌てて勢い良く頭を下げるレイリアに、エルフィアは可笑しそうに笑いかけた。

「まあそう畏まらなくていい。」

「は、はい・・・」

「エルフィア様はかなりお綺麗な方だから、仕方ないわ。」

そう言ったイルアの言葉に、エルフィアがくすりと笑って返す。

「何を言う。イルアの愛らしさには負ける。」

「まあ」

楽しそうに笑い合う二人を見てみると、本当に仲が良いのだと分かる。そして、ちょっとだけ悔しいような気もした。

「レリイ、リユミーをこちらへ連れてきてくれる？」

「あ、はい！」

レイリアは頷くと、さっと駆け出して行った。

その姿を見てエルフィアは呟く。

「・・・イルアは彼女をどこで？」

「城下を少し離れたところにある町で。リュミエルを追いかけ行ったら偶然出会ったのです。」

「そうか。」

「はい。」

レイリアがリュミエルの鎖を外し、こちらへ引き返してくる。

「良い子だな。少しのんびりしているが。」

「ええ、とても良い子です。」

イルアが嬉しそうにふわりと笑って、エルフィアはその微笑みに笑った。

「・・・あたたかいな。」

「・・・そうなんです。だから来て貰ったのですわ。」

につこり笑って、イルアは自慢げに胸を張った。

「お待たせしました！こちらがリュミエルです、エルフィア様。」

何故だかとても嬉しそうにリュミエルを連れてきたレイリアは、わくわくしながらエルフィアを見つめた。

「・・・大人しいものだな。」

「はい！リュミエルはすごく大人しいですよ。優しいですし。」

「優しいか。それはレイリアがこの子の主だからだろう。」

「え？」

思わぬ事を言われて目が丸くなった。

「シレイは主以外の者には冷たいものだよ。いようがいまいが関係ない、という態度を取る。そうされた事がないのなら、出会ってすぐはこの子はレイリアを主と決めたのだろう。」

「・・・出会ってすぐに、ですか・・・？」

リュミエルに視線を移すと、優しい瞳が瞬いた。

「そう様子では、リュミエルはレイリアの事が大好きなのだな。」

「そうなんですか！」

嬉しくて、エルフィアが頷くが否やリュミエルに抱きついた。

「リュミー、私も好きよ。」

しっかり抱いて頬ずりすると、嬉しそうにリュミエルが喉を鳴らした。

「これではイルアから逃げ出す筈だ。」

そう言つて笑つたエルフィアに、イルアが驚いて後ずさつた。

「ご、ご存知だったのですか!？」

そんなイルアを面白そうに見やり、エルフィアは少し意地悪に笑つた。

「もちろんだとも。私は一軍副将だぞ?城下だろうとどこだろうと、治安に関わる事は私の耳に入るのだ。」

「うつ・・・」

すっかり縮こまつたイルアに、エルフィアはにやりと口の端を吊り上げた。

「レイリアには感謝する。私の贈つたシレイが処分されずに済んだからな。」

「えっ!」

いきなり声をかけられて驚くレイリアをよそに、イルアは深く頭を下げた。

「ごめんなさい・・・申し訳ありませんでした・・・」

ではな、とエルフィアは颯爽と去つて行き、姿が見えなくなるまで見送つた四人は一息吐いた。

「さあ、では帰りましょうか。」

「・・・はい」

イルアの号令に三人が応えて、四人と一頭は王城を移動し始めた。

「あつ、そう言えばイルア様。ルセ様をご存知ですか?」

そう問いかけた途端、三人の足がぴたりと止まつた。

「?」

「・・・ルセ様が、どうかしたの？」

何故か固い表情のイルアに問われ、レイリアは素直に答える。

「イルア様に伝えるように言われたのですが・・・」

視線で促され、レイリアは続ける。

「ええと・・・“僕の犬が最近凶暴化していて、優位に立ちたいみたいだ。”と、“部下に噛み付こうとしているからなんとかして欲しい。”だそうです。」

「・・・犬がねえ・・・」

そう言って笑ったイルアは、お嬢様ではなく、悪役のように。

（あれ・・・？イルア様、ルセ様の事あまり好きではないのかな・・・）

「ルセ様は・・・なんて名乗られたの？」

「え？・・・あ、あの・・・お名前だけ。ええと・・・すみません。すっかり覚えられなくて・・・呼びにくいからルセと呼ばれている。そう呼べば良いとだけ・・・。」

途端、イルアが吹き出した。

「イルア様？」

「くっ、ル、ルセ様が・・・！そう、確かに言いにくいものね、あの方のお名前は・・・！」

「あの？」

戸惑うレイリアと目が合って、ようやくイルアは笑いを収めた。見ればセティエスとヴィトも僅かに笑っていた。

「？」

首を傾げるレイリアに微笑んで、三人は再び足を進めた。

??そしてその夜。レイリアは初めて悪魔^{レーヴェ}の蜜の仕事を知る事になったのだ。

第十一話 宵の羽ばたき

夕暮れにバルクス家へ戻った四人と一頭は、リュミエルを騎獣舎へ戻し、五人で夕飯と湯浴みを済ませてから居間へ集まった。花のお茶を口に含むと、心がすっと爽やかに洗われるような気がする。

円形の大きなソファにイルアを中心に四人は座り、主が話し出すのを待っていた。

セティエス、ガイアス、ヴィトはなんとなく何を話されるのか分かっていようだが、レイリアには分からない。そわそわとその時を待っていると、静かに息を吐いてから、イルアは話しを切り出した。

「さあ、今日は殿下から直々に命も下った事だし、レーヴェの仕事について話をしようと思います。」

しん、と静まり返った空間で、レイリアだけが何も分かっていなかった。

「以前から殿下と相談していたのだけれど、この間我が家を襲撃してきた奴らの飼い主・・・やっぱり城内の関係者がレーヴェの事を執拗に調べていたみたいね。そいつが何故か私の尻尾を見かけたみたい。」

「しかし・・・レーヴェに関する会話は、誰にも聞かれていない筈では？陛下や殿下の従者も、その時ばかりは近寄れない筈ですし・・・」

話がよく分からないレイリアは、邪魔にならないように懸命に話を聞いた。

「それがね・・・噂でしか聞かないレーヴェを陛下が頼りにしているって、どこかで聞いたみたいなのよね。」

その言葉に、セティエスとガイアスが生暖かい目になった。

「・・・ぼろつとこぼしたのはご本人では？」

セティエスの冷たい言葉に、ガイアスが頷いた。

「それでレーヴェが実在するって確信させたわけだな。」

そこまで聞いて、レイリアは思わず口を挟んだ。

「レーヴェの事は、噂にはなっているんですか？」

そう言えば、“イルアがレーヴェという顔を持っている事”、“

それを王族とバルクス家しか知らない事”以外、レイリアは何一つ

“レーヴェ”について知らないのだ。今更その事を認識して、レイ

リアは愕然^{がくぜん}とした。

「そうだよ。」

答えたのはヴィトだ。

「悪魔^{レーヴェ}の蜜という存在については噂されてる。それこそ、城に勤め

ている者なら誰でも知ってるんだ。けど、レーヴェが実在するのかどうかは誰にも分からない。そもそもレーヴェは、“影”みたいなものだからね。」

「・・・影？」

その問いに答えたのはイルアだった。

「レーヴェは表に出るものではないし、誰かに正体を悟られてもいけないから。だから、レーヴェという存在は、無害な“影”みたいなもの”だとしておくの。だから、皆噂しか知らない。それ以上を知る事が出来る者も、いないの。」

素直にその言葉に頷くレイリアに、少し逡巡^{しゅんじゆん}してから、イルアは付け足した。

「・・・その、ね。レーヴェの大きな仕事は・・・暗

殺、みたいなものの。」

「・・・!？」

驚きのあまり目を見開き、言葉も出ないレイリアと、イルアは目を合わせる事が出来なかった。

それでも、言わなければならないと思う。

「国内で起こる、表には出せない陰謀を阻止するのが役目なの。だから、その始末は・・・命を奪う、という形が、一番多いわ。」
「・・・・・・・・・・・・・・・・」

言葉の出ないレイリア。イルアも、そんなレイリアにつられるように黙り込んでしまった。

あとの三人も、口を挟めなかった。

少しして、レイリアが深呼吸した。それに、イルアがぴくりと肩を揺らした。

セティエスにしてみればこれほど珍しい事はない。今まで、レーヴエという仕事をすんなり受け入れていたからなのか、イルアは誰かを特別気にする、という事がなかった。どこまでも淡泊で、感情移入を自然としないのだと分かった。

それが、レイリアとなると全く違う。初めて会った時はいつも通りだったのに、屋敷に戻ると残念そうに呟いたのだ。

『あの子、もう会えないわよね・・・』

そんな事を言うのは初めての事だった。

そして、今この状況だ。イルアはレイリアに、嫌われる、厭いとわれる事に怯えている。対してレイリアは、静かに深呼吸をした。それだけの動作に、イルアが肩を震わせていた。

（お嬢様・・・レイリイは貴女の事を、本当に慕っていると思いますよ。）

セティエスは声には出せないが、そう心の中でイルアを応援する。

「イルア様。」

レイリアが、この時ばかりは凜とした声を発した。イルアがはつと顔を上げる。セティエス達も思わずレイリアを見つめた。レイリアは、真っ直ぐにイルアを見つめて、小さく笑った。

「イルア様が人を殺さないといけないなんて・・・どう考えても悲しいです。出来るなら、やっぱり止めて頂きたいです。」

「レイリ・・・それは・・・」

苦しげな顔のイルアに一瞬、泣き顔になったが、レイリアは頑張っ
て笑った。

「皆もそうです。でも・・・皆がやると決めているなら、私は・・・」

（笑って言いきって、イルア様を安心させてあげなきゃ・・・）
そう、思ったのに。

（泣いたら不安にさせちゃうから、笑ってあげないと・・・）
そう、決めたのに。

（・・・っ、笑わないと・・・）

ぼろり。一粒零れただけで、レイリアの決意は消えてしまった。
笑おうとしても泣き顔になるだけで、止めようと拭いても拭いきれ
なかった。

「レイリ・・・」

（ああやっぱり、不安にさせてる・・・）
けれど、もう涙が止められない。そつと頬を包んだ手が震えてい
る。それに、少しでも何かしないと。そう思っ
て、レイリアは捲し立てた。

「わ、私は！」

皆が驚いてレイリアを見つめる。

「側に、います！・・・皆がいて、いいって言っなら、私は、皆のする、事を・・・受け入れ、ますしっ・・・！仕事、した、後だつて！・・・一緒に、います！・・・いたいんです・・・っ！皆と！」
尚も見つめる皆に向かって、レイリアは小さな声で泣き叫んだ。
「好きなんです・・・！皆が・・・！」

その場にいた誰もが、動けなかった。小さな声で叫ばれた、強い言葉に、打たれて。

暗殺みたいな事が仕事だと言われた時。レイリアは目の前が真っ暗になるような気がした。

だって、レイリアとは住む世界が全く違つのだと、分厚い壁を見せつけられたような気がしたからだ。

レーヴェという存在だと明かされた時は、ああ、隠さなければいけない仕事があるのだな、とは思った。けれどそれは、ぼんやりとしたものだったのだ。そう。誰かの自伝で読んだような、ちよつとドキドキするお話。けれどイルアから仕事の内容を聞いた時、それが幻想なのだと思い知った。

自分の考える世界はなんて甘いんだろう。

イルアは、生きるか死ぬかの毎日を過ごしていたのだ。

レーヴェという役割さえなければ、穏やかで優しいままのお嬢様なのに。

これはお話じゃなくて、目の前の現実なのに。

そんな世界にレイリアを招いた事を、震えてしまっくらい怯えて

いるのに・・・気付かない自分にどうしようもなく殴りたい気持ちになる。

ぐつと握りしめたレイリアの手に、いち早く気付いたのはヴィトだった。

「レイリィ、そんなに握りしめたら駄目だよ。」

イルアがはつとしてその手を取った。

「レイリィ・・・ありがとう・・・」

はつと上げられた顔は、捨てられるのを予期しているようで。イルアは思わず抱きしめていた。

「イルア様・・・？」

震える声で名前を呼ばれると、イルアは嬉しくて微笑んだ。

「すごく嬉しいわ、レイリィ！」

「・・・っ！」

その瞬間、イルアは縋り付かれて驚いた。こんな事は人生初体験だ。そして、耳元で叫ばれる。

「大好きです！イルア様！」

ぎゅうぎゅう締め付ける腕が苦しいのに、イルアは負けないようにさらに抱きしめて言った。

「私も、大好きよ。」

「・・・離れないで下さい・・・っ」

必死の言葉に、思わず笑ってしまった。

「それって可笑しいわ。・・・私の言葉なのに。」

「えっ・・・？」

きょとんと顔を離れたレイリアに笑いかけると、後ろにいたセテイエスが確かめる為に言葉を紡いだ。

「けどレイリィ・・・血まみれで帰ってくるかも知れないよ。」

ごくり、と唾を呑み込み、レイリアは声が震えないように懸命に

答えた。

「・・・お迎えます。」

「怪我をして帰る事もあるんだ。」

「・・・」

少しだけ青ざめたレイリアに、セティエスは笑うしか出来なかった。

「・・・きつと、すごく怖いよ。」

その言葉に、レイリアはさつと言い返した。

「怖くても、お迎えます！」

少し怒ったようにも見えるレイリアの剣幕に、さしものセティエスもたじろいだ。それを見たイルアがほくそ笑んだ。

「・・・セティったら意地悪ねえ。レリイがそれだけで避けるわけないじゃないの。」

言われてセティエスが言い返す。

「先程まで怯えていたのは、お嬢様ではないですか。」

「あら、なあに？セティがそんな風に言い返すなんて初めてよね？」

くすくすと楽しそうに笑い始めたイルアを囲んで、全員が面白そうにセティエスを見ていた。

「はあ・・・さてはいつもの仕返しですね・・・。」

「なんの事かしら？」

につこり笑うイルアはやはり、温和なお嬢様でしかないのだった。

その後行われた会議では？。レーヴェを狙っているのは、エルフィアの上司である、第一軍の将だという事が明かされた。特攻部隊である一軍の将が、何故レーヴェを狙うのか・・・それは、なんでも噂のレーヴェが実在すると、陛下を弑^{しい}する事が出来ず都合が悪いからだとか・・・。

つまり彼は、篡奪^{さんだつ}を狙っていたのだった。

「犬が部下を狙ってるって言ってたのよね？」

「はい・・・けど、イルア様。それを仰ったのはルセ様ですよ？」

「ああ、それね。」

くすりと楽しそうにイルアは笑った。

「“犬”っていうのは兵士という意味。その後続く“優位に立つ”は上の位を奪い取るという意味。そして、“部下”はレーヴェの事よ。・・・今回はね。」

「今回は・・・？」

首を傾げるレイリアは、まだ目が赤い。

「言葉の持つ意味は毎回異なるわ。状況が変わるから。それで・・・わざわざ“陛下”って言っちゃったら、万一誰かが聞いていたら困るじゃない？」

「なるほど・・・」

「それで、ザクラス様は何故今頃になって、王位を篡奪しよう？」

ザクラスとは件の将の事だ。ヴィトがそう訊ねると、イルアは呆れたように苦笑した。

「・・・ほら、この間陛下に新しい御側室がついたでしょう？」

「ああ、確か美声と評判の歌姫でしたね。」

「歌姫って、王城で歌う事を許された歌人^{うたひと}の事ですよね！」

目を輝かせてレイリアが言うものだから、セティエスは思わず微笑んでいた。

「ああ、その歌姫だな。それで、それとどう関係が？」

訊ねたセティエスの横で、ガイアスが嫌そうに顔をしかめた。

「それがね・・・。もう十年程、惚れ込んでいるそうなの。」

「・・・は？」

「そんな事か・・・」

ガイアスが深いため息を吐いた。

「ようするに、十五の歌姫に十年間惚れ込んで、ここまできた、と。」

イルアが殊更単純に言うと、セティエスの目が冷えた。

「ザクラス様は惚れ込んだ女性を手に入れる為に、陛下を弑すると？」

「そうみたいね・・・」

イルアは若干遠い目をしてそう答えた。

「・・・で。篡奪するにはある程度の武力が必要よね。使おうとしているのはもちろん自軍の兵なのだけれど・・・」

そこでヴィトが首を傾げた。

「陛下を弑するのを、一軍全体が賛成するとは思えませんが・・・？」

「そう。その通り。むしろそんな話したらエルフィア様が、“不敬だ！” って言ってうつかり殺ってしまいそうよね。」

「うつかりなんですか？」

暗に違うだろうというヴィトの突っ込みは、いつもの通りに流される。

「でね。ザクラス様・・・一軍の精鋭部隊の食事に薬を盛ってるみたいなのよね。」

「・・・え？」「」

驚く三人の横でセティエスは頷いた。

「なんでも食後に菓子振る舞われるようになったらしく、いつもザクラス様が“欲しいか？”と問うと、全員が目の色を変えるのだとか。・・・依存性の高い薬なのでしょうね。その菓子はいつもザクラス様が鍛錬場に持ち込むらしく、給仕の者達も触れられないのだそう。以前、あまりに美味しそうだからと盗み食いしようとした給仕が、見つかって殺されるかと思う程激しく怒られたのだとか。」

「……」

黙り込む三人を苦笑しながら見回して、イルアは続きを口にした。
「エルフィア様は甘いものがお嫌いだから、食べる振りして捨てていたらしいの。」

「そんな事していいんですか？」

ヴィトの発言をさらりと無視して話しは続く。

「そうするといつも食べにくる子犬がいてね。その子が日に日に必死にお菓子をねだるようになって、その為ならなんだってするようになってしまったのですって。」

「……何をさせたのか少し気になりますね……。」

呟いたヴィトの横で、レイリアはうんうん、と頷いた。

「それを陛下に相談されたのが、事の始まりという訳ですね。」

「そうなのよ。」

頷いたイルアが、ふー、と息を吐き出した。

「……今回は篡奪の阻止だし、相手は正気を失いかけた一軍精鋭部隊よ。」

「……はい。」

三人が居住まいを正してそう応える。それに、イルアが顔を上げて命じた。

「その命を失う事、レーヴェは許さぬ。」

「……はっ」

三人は命じられると、椅子から立ち上がり、一糸乱れぬ動きで片膝をついて礼をした。さながら騎士のように。

それにつこり笑って、イルアはぱん、と両手を合わせた。

「さて、それじゃあまずはザクラス様をどこかへおびき寄せないとね！」

「イルア様！」

さくさく話が進められそうな気配に、レイリアはここだ！とばかりに叫んだ。

「あら、どうしたの？レリイ。」

きよとんとするイルアに勢い込んで言う。

「私に出来る事はないですか？」

「・・・・・・」

きつと、レイリアが言い出す事は予想していたのだろう。イルアはとても柔らかく笑って、レイリアの両手を取って握った。

「あのね」

「・・・はい。」

しっかりと目を合わせて、イルアは微笑む。

「レリイには、ここで待っていて欲しいの。」

「・・・・・・」

（やっぱり・・・手伝える事なんてないよね・・・）

分かってはいても、言われてしまうと落胆してしまう。

「ここで、私たちを迎えて欲しいの。」

「・・・？」

落とした視線を上げると、イルアがにっこり笑っていた。

「何度経験したって、こういう仕事を終わると心が痛む。・・・そういう時、レリイに迎えて欲しいのよ。」

そう言ったイルアは、僅かに、本当に僅かにだが、泣きそうなのを堪えているように見えた。

「・・・・・・」

レイリアは少し考える。自分に出来る事。望まれている事。そして??。

「・・・はい、イルア様。」

やりたい事。

「皆が帰ってきた時は、めいっぱい抱きしめますね。」

こういう仕事は手伝えないけれど、寄り添って欲しいと言われれば、いつまでだって寄り添える。そう思うと、自然とにっこり笑い返していた。

「・・・じゃあ、今回から出発の時はレリイを抱きしめる事！これは決定事項よ。」

微笑ましく二人を見ていたセティエス、ガイアス、ヴィトは、イルアの宣言にかなり動揺した。

「はあっ！？」

「お嬢様・・・お二人がするのはいいのですが、私たちは・・・」

「決・定・です！」

きつぱりと宣言され、三人は押し黙った。なんとも言えない沈黙が流れる。

「・・・あ、あの、イルア様」

言いかけたレイリアの言葉を遮って、イルアは言い切る。

「計画実行までまだ時間があるわ。それまでに心の準備をするのね。」

「

そしてレイリアに振り返る。

「さあ、今日はこれで解散よ！寝ましようね。」

「え、あの・・・」

「じゃあおやすみ」

すたすた去って行く主人を見送り、

「・・・」

四人はいたたまれない時間を過ごした。

それから二日間。レイリアは変わらない生活を送っていた。

起きたらまずは洗濯だ。

そして、すでに朝食の準備をしているヴィトを手伝う。

「ヴィトはほんとに料理上手だね。誰かに習ったの？」

スープをかき混ぜながらそう訊ねると、ヴィトは隣で卵焼きを作りながら答えた。

「料理はセティエス様のご実家の、料理番の方から教わったよ。」
その頃を思い出して、ヴィトはくすくす笑った。

「その方は女性なんだけど、料理にもの凄く情熱がある人でさ。」

「へえー、料理が大好きだったんだ。」

「そう。だから教わるのが大変だったよ。」

ひよい、と卵焼きをひっくり返す。その技もレイリアには出来ないから、羨ましい。

「味も見た目も良くないと駄目。人に出す料理はなおさらだって毎日言われたな。」

「うー、私はその方に呆れられちゃうかもなあ・・・」

「そんな事ないよ。俺が食べてたもの教えたら、“それはただの食材であって料理ではありません。” って言われたんだから。」

「それって、そのままかぶりついてたって事？」

笑いながらそう聞くと、ヴィトは卵焼きをお皿へ移しながら答えた。レイリアもスープを取り分ける。

「そう。俺はちょっと特殊な出でさ。・・・まあ、言ってみれば獵師したいなものだったから。」

「へえ、そうなんだ。」

ヴィトの出自を聞いてちょっと驚く。今ではこんなに上品に見えるのに、意外だ。

「そう。レイリアはそんな事ないだろ？」

「・・・うん、さすがにかぶりつく事はなかったよ。」

人数分のナフキンを並べて、出来上がったものを並べていく。

「さあ、レリイは起こしに行ってくれる？」

「はい。」

元氣よく返事をして廊下に出ると、すぐそこにガイアスが来ていて、案の定ぶつかった。

「わっ！」

「！」

相変わらずまだ寝ぼけ半分なものの、ガイアスは倒れそうになったレイリアを抱きとめた。

「・・・あ、ありがとう。」

「・・・・・・」

目が覚めるまでの間、ガイアスは目が合うとじーっと眺めてくるそれが、毎回恥ずかしい。いたたまれない。

「あ、あの・・・もう大丈夫だから・・・」

とても目を合わせていられないので、視線は外しておく。言われたガイアスは素直に、しかしゆっくりとその手を離れた。ほっとして、気を取り直して挨拶する。

「あの、おはよう、ガイアス。」

「・・・・・・ああ、おはよう。」

目覚めないガイアスにちよつと笑ってしまつて、レイリアはそのままセティエスの部屋へ向かった。

部屋の前までくると、やはりセティエスが出てくるところだった。いつもながら、朝からきちんとしている。

「おはようございます、セティエス様。」

「ああ、おはよう、レリイ。」

にこりと微笑まれるのにも慣れず、毎回顔が赤くなってしまう。「えっと、イルア様を起こしてきます！」

ぺこりと頭を下げて走り去る。それを見送つてセティエスが笑う

のも、いつもの事だった。

「イルア様、おはようございます!」

部屋の外から声をかけると、いつものように、入って、と言われる。

「失礼します。」

断ってから部屋へ入ると、イルアが不敵に微笑んだ。

「今日はやっと罫を張り終えると思うわ。そうなれば明日はいよいよ決行よ。」

「・・・!」

ぎくり、と身体が強ばる。それを見て、イルアはふわりと微笑んだ。

「・・・レイイが待っていてくれるなら、私達は必ず無事に帰ってこられるわ。」

そう言ってレイリアを抱きしめた。レイリアも、イルアを抱きしめ返す。

「はい。お待ちしていますから、必ず無事に帰ってきてください。」

ぎゅうつ、と抱きしめて、二人はするりと腕を離れた。

「さ、じゃあちゃんと朝食を食べていかないとね!」

「はいっ!」

笑い合って共に部屋を出る。食卓にはすでに準備がされていて、三人が迎える。

「おはようございます、お嬢様。」

「おはようございます、イルア様。」

「おはよう、イルア。」

それぞれに挨拶があつて、皆で席につく。

「それじゃあ、頂きます!」

「・・・頂きます」

バルクス家の朝食は、今日も賑やかだった。

??その日。イルア達はザクラスに、“レーヴェは子城の一つである砦を隠れ家に行っている”という噂を信じさせる事に成功した。そして、明日、そこへ現れるらしいという事も。

明日はいよいよ実行の時だ。城内の不祥事である為騒ぎにしてはならず、事は速やかに、かつ静かに処理しなくてはならない。

第一軍の精鋭、おそらく二百に対し、こちらは四人。いくらレーヴェとはいえ、少しの油断も手加減も、躊躇いも許されない。

まさに命がけの戦い。・・・両者は息を^{ひそ}めて時を待つ。

第十二話 暁のレーヴェ（前書き）

残酷描写があります。でもセティエス、ガイアス、ヴィトの出自が
ちらっと分かります。

第十二話 暁のレーヴェ

レーヴェの隠れ家だと刷り込んだ場所は、王城とは真逆の方角にある、寂れた砦^{さび}だった。

昔は重要な拠点だったものの、領土が拡大した今ではさして意味を持たない砦だ。療養地としては周りが鬱蒼^{うつそう}とした森に囲まれている為、精神的に良くない、という理由で避けられている。

「イルア様、お茶をどうぞ。」

今日は夕方まで休むのだと言って、五人全員が屋敷にいた。そして、すっかりレイリアの側にいるのが当たり前となったりユミエルも。

「ありがとう、レリイ。」

につこり笑うイルアに微笑み返し、隣に座るセティエスにもお茶を配る。

「セティエス様もどうぞ。」

「ありがとう。」

セティエスの笑みにはいつまで経っても慣れそうにない。笑ってごかししながら、レイリアは二人に頭を下げた。

「それでは、私はリユミエルのお世話がありますので、少しの間失礼します。」

「ええ、いつてらっしゃい。」

見送られるのもあまりない事で、なんだか照れながらその場を後にした。

騎獣舎の扉に手をかけて、深呼吸する。ガデイスに睨まれるのも、慣れそうにない。いや、少しは慣れてきたのかも知れない。少なくとも、誰かがいればそそくさと前を通り過ぎるくらいは出来るよう

になったのだから。

（よし！）

気合いを入れて扉を開く。重い扉は、思いつきり体重をかけないと動かない。ズリズリと音を立てて扉を開くと、ガイアスが閉めるのを手伝ってくれた。

無言で腕を差し出されるので、それをしっかりと握ってガデイスの前を通り過ぎる。

「・・・ありがとう。」

「・・・」

何か言いたい事があるのだろうが、ガイアスは口を噤んで頷くだけだ。後ろをついてきたリュミエルを振り返って、その額を優しく撫でた。

「さあ、ご飯にしようね。」

グルル、と甘えるように喉を鳴らされれば、レイリアはくすぐったい気分になって微笑んだ。

どうやらリュミエルはガデイスの事などなんとも思わないらしく、ガデイスの方もリュミエルを空気のように扱っている。

お互いに、見えても、見えなくても関係がない、と。

そんな二頭もレイリアが間に入ると別で、ガデイスはレイリアが僅かでも距離を近づけると怒り、そんなガデイスにリュミエルが牙をむく、という場面がしばしばあった。

「ガデイスとも仲良く出来るといいよね・・・」

食事中的リュミエルにそう呟きかけると、なんとも言えない目で見られた。

（あんまり仲良くなりたくないのかな・・・？）

二頭が穏やかに過ごせる日は、まだ遠そうだ。

リュミエルの全身にブラシをかけると、いつもレイリアは少し眠ってしまう。ガイアスから見えない所を選ぶのは作戦だろう。そして、長いな、と思って覗きにいくと、熟睡してしまっている事が多

い。

（またか・・・）

最近の特訓の成果か、少しかけ体力も根性もついてきたと思うが、やはり追いつかないのだろうと思う。

そつと近づいてしゃがみ込む。リュミエルがちらりと視線だけ向けてきた。いつも僅かに警戒している。それだけレイリアが大切なのだろう。リュミエルの毛に埋もれるようにして眠るレイリアをしばし眺め、顔にかかる髪をそつとよけた。

「なんだってこんなとこに居るんだか・・・」

実を言うとレイリアは、何をしても起きない。あまりに熟睡しているので試しに思い切り揺らしてみた事があつたが、ちよつと唸るだけで起きる気配がなかった。周りで騎獣達が吠えてもなんのその。リュミエルが身体を揺すつても一緒に揺られておしまいだ。

こんな平和なレイリアが、何故バルクス家の秘密を知つてなおこの屋敷に留まるのか、不思議でならなかった。・・・それだけイルアとリュミエルが大事なんだろう。

主人が暗殺者でも。

自分が命を狙われる事になつても。

「・・・よく頑張つてるよ、お前は。」

そつとこめかみを撫でると、眠つたままのレイリアが微笑んだ。

その後ガイアスが辛抱強く起こすと、目覚めたレイリアは慌てて屋敷へ戻った。戻ったら洗濯物を各部屋へ届けるのと同時に掃除だ。相変わらずセティエスとヴィトの部屋は綺麗だし、ガイアスの部屋は何故か毎日ぐちゃぐちゃになっている。

（毎日綺麗に片付けてる筈なのに、なんでだろう・・・？）
不思議だ。

そうこうしている間にあっという間に穏やかな時間は過ぎて、今、イルア達四人は屋敷の玄関へ立っていた。

「それじゃあ、行ってくるわね。」

イルアはいつもと変わらない調子でそう言つと、ぎゅっときつくレイリアを抱きしめた。

「行つてらっしゃいませ・・・」

イルアが離れるとすぐにセティエスに抱きしめられた。こちらは初めてなので、かなり動揺した。

「行ってくるよ。レイリィ。」

「い、行つてらっしゃいませっ！」

セティエスに抱きしめられてときどきしない人がいたら見てみたい！と思つてすぐに思いついた。

（イルア様はないか・・・）

セティエスが離れると、ヴィトがちょっとぎこちなく抱きしめてくれた。

「・・・行つてきます。」

「行つてらっしゃい！」

そつと抱きしめられて、そつと離される。

「・・・」

ガイアスが正面に立つたまま躊躇ちゅうそしていると、イルアが思い切り押した。

「っ！」

「わっ！」

油断していたのか、あっさり押されてガイアスは思い切り抱きつく形になる。

「レイリィに抱きつくのに躊躇ためらうんじゃないわよ！」

「それは無茶です。」

イルアの叫びにセティエスとヴィトが突っ込んで、ガイアスはレイリアを抱きしめたままで深いため息を吐いた。

「・・・行ってくる。」

少しだけ腕を緩ませて、しっかりと目を合わせてそういうものだから、レイリアは抱きしめられた時以上に恥ずかしくなった。

「い・・・行つてらっしゃい・・・」

言つた途端にイルアがガイアスを引き剥がして、にっこりと言つた。

「さあ、行きましょうか！」

「・・・はい。」「」

頷いて、玄関の扉が開く。レイリアは思わず胸の前で両手を組む。宵の景色に混ざり込もうとする四人に祈る。

「ご無事で・・・！」

四者四様で頷いて、四人は屋敷を去つて行つた。

姿が見えなくなるまで四人を見送り、レイリアが玄関を閉めた頃？。

「ヴィト」

「は」

イルアの号令でヴィトが走り出した。伏兵を見つけ出して始末するのはヴィトの仕事だ。

ヴィトは、古い一族の末裔だ。その身体能力はどんなに鍛えた人間でも敵わない。古くに魔獣と契ちぎつたと言われるその血は、人と獣の狭間にいる。その驚異的な身体能力を欲しいが故に飼いならそうとした者は、彼らの獣に近い性さがの前に命を落とした。結果彼らは忌み嫌われ、狩られ、今ではヴィトしか生き残りはいないだろう。

そんな血が流れているから、今夜はヴィトにとって、“狩り”に最も適した夜だった。空には星しかない。新月の夜。

くす、と自然と笑みがこぼれた。

「いるな・・・」

まだ人では見えぬ、ずっと先にある件の砦。それを囲む鬱蒼とし

た森に、息を顰^{ひそ}める生き物の気配が分かる。

新月の夜、それは・・・ヴィトの身体に流れる血が、獣の性を強くする夜。

「ザクラス様は一体どこで怪しい薬を手に入れたのかしらね？」

訊ねるイルアの服装は、いつもとそう変わらないドレス姿。

「城下に怪しい店がある、という話しは聞かないですしね。」

答えるセティエスは、普段より動き易そうな服だ。

「じゃあもつと離れたところから調達したんだろう。」

ガイアスは、少しばかり武具をつけていた。

「・・・そう言えば最近、シュル・ヴェレルが来ていましたよね。」

「ああ・・・」

シュル・ヴェレルとは全世界を巡っている商人一団で、無害かと思いきや、その一団が通ると必ずその国で小さな事件が起こっていた。

例えば、一団が通ったところとはかなり離れた場所で、子供が集団で行方不明になったり。

例えば、一団が寄った宿とは違う宿で食事に毒性の弱い薬が盛られていたり。

怪しいと言えば怪しいのだが、一団がその国を通った事しか関連性がないから、誰も手出し出来ないでいた。

「・・・また、ね。」

「ええ。他に事件がなければ、やはり彼らは怪しいですね・・・。」
尻尾すら捕まえない不気味な事件。

イルアは苦笑するしかない。

「・・・まあ、取りあえずこの件を処理しましょうか。」

「はい。」

空を見上げれば新月。三人はさして急ぐでもなく、皆へ足を進め

た。

（来ないな・・・）

草むらに潜む兵は、今か今かとレーヴェを待っていた。その目は正気を失いかけていて、見た目にも恐ろしい。

と、小鳥が羽ばたく様な音がした。

（・・・？）

「ぐあっ！」

音の正体を知る間もなく、その兵は生を終えた。

音もなく地を蹴り、近くの茂みへ降り立つ。着地ついでに伏兵を倒し、ヴィトはすぐに身を潜ませる。倒された兵の小さな断末魔を聞き取り、仲間が僅かに動揺したのを見逃さない。

生命の鼓動がヴィトを手招く。

（あそこか。）

空気の如く身を隠すヴィトに気付ける者はいない。だが、それは近づかなければの話。

「そこかっ！」

背後に迫ると流石に気付かれ、しゃがんだ頭上を鋭い剣筋が走った。間髪入れずに振り下ろされ、かいくぐって背後に回り、次の行動を取られる前にその喉笛を掻き斬る。その爪は今や肉食獣のように丈夫で鋭くなっていた。

血を振り払う事もせず、ヴィトは次の獲物に狙いを定めて動く。

伏兵達は異様な襲撃者におののき、潜むのを止めて飛びかかった。つた。

ようやく砦が見えてきた。宵は過ぎ、月さえ無い今夜は暗闇が広がっている。

「ガイアス」

「ああ」

呼びかけに応じてガイアスが走り出した。その背を見送ってイルアは小さく笑った。

「どうされました？」

こちらにも笑いながら問いかける。

「・・・早く帰りたいなあって。」

レイリアが待っているから。

「そうですね。早く休みたいと思う事はあっても、早く帰りたいだなんて思った事は、ありませんでしたね。」

頷いて、イルアは砦を見据えた。

「さあ、ヴィトにはすっかり働かせられないわね。」

「はい。」

「ヴィト」

森へ踏み込み、ヴィトの姿を探す。あちらこちらで血の匂いが漂い、木の幹には獣が暴れた痕が残る。

（相手は精鋭部隊だからな・・・いくらあいつでも怪我くらいはしてるだろう。）

そう思っただ森を進む。殺気を辿っていくと五人程の人間が激しい斬り合いをしているのが分かった。

一人が倒れた。その胴から手を引き抜き、背後に迫っていた人間に容赦なく蹴りを食らわせたのはヴィトだろう。その威力は凄まじい。蹴られた兵は苦しんでいるだろう。

「ヴィト！」

走り寄ってその兵にとどめを刺した。

「仲間か！」

降り掛かる剣を受け止める。一瞬、その兵と目があった。

「なっ・・・ガイアス!! ヴァルクレア!？」

隙について容赦なく剣を突き立てる。その兵が倒れると、ヴィトが最後の一人を倒したところだった。

「・・・まだ少しいる。」

全身に返り血を浴びてはいるが、やはり少しばかり怪我を負ったようだった。

「ああ。イルア達を援護するぞ。」
「分かった。」

歩きながらヴィトが笑う。なんだと訊ねると、久しぶりに聞いた、と笑われた。

「ガイアスの家名。」

「ああ・・・」

ガイアスが家名を失ってから久しい。もう縁を切ったのだから、名乗る事は許されないし、名乗る気もない。今はもう、イルアの・・・レーヴェの腕として生きると決めたから。

「今頃奥さんがいたかも知れないのに。」

そういう事を笑っていわれると良い気分はしない。ごつ、と頭を殴るとむつとされた。

「痛いな・・・」

血の付いた手で髪を触るものだから、明るいところで見たらかなりひどい事になっているに違いない。

「お前こそわざわざイルアの側にいる理由もないだろう。人並みに過ごせるんだからな。」

ガイアスは兵を止めたかった。けれど剣が捨てられなかった。そこを、イルアが救った。だから側にいる。この剣をイルアの、レーヴェの命で振るう。

「冗談言わないでよ。イルア様を放って置けるわけないのに。」

ヴィトに人間らしさを教えたのはイルアだ。処分する筈だった、忌まわしい一族の子を。ヴィトにとってイルアは、新しい世界をもたらしてくれた恩人だ。

「・・・それもそうか。」

揺るぎなくレーヴェという立場に立つ、あのお嬢様は・・・バルクス家の誰もが側を去っても立っていられるだろう。・・・だが。

「一人でも平気だなんて、思っただけじゃないからね。」

「・・・そうだな。」

人の心は救ってくれるのに、自分の心は凍り付かせるイルアを。

「「やっぱり放って置けない。」」

くしゅん、とイルアがくしゃみをした。

「おや、お風邪でも引かれましたか？」

「いーえ、これは噂してるのよ、誰かが。」

森へ一歩入るなり襲ってきた兵を一通り倒し、イルアは軽く剣を振って血を払った。

「二人が来ましたよ、お嬢様。」

「あ、本当だわ。」

ひらひらと手を振る様は、命のやり取りをする場面にはやはり似合わない。

「「ご無事ですか？」」

ヴィトの問いかけに、イルアはにこりと笑った。

「平気よ。ヴィトはさすがに少しやられたみたいね。」

「ええ。針の筵むしろみたいにくまれた時は、ちょっとまずいと思いましたけど。」

道理で、ヴィトの服はところどころ破れて、傷がたくさんあるようだった。

「無事で良かったわ。」

「イルア様を残して死ねませんから。」

にこりと笑ったヴィトに頷いて、イルアは足を進めた。

「外の兵はどれくらいだった？」

「ざっと百人はいたと思います。」

「まあ、あんまり大勢で砦の中で待機していると、逆に邪魔だものね。」

そう言っただけで苦笑する。

「さて。それじゃあ砦に入るわよ。」

「……はい」

ガイアスが先頭。セティエス、イルア、ヴィトの順で、四人は皆へと足を踏み入れた。

「来たぞ！」

兵が叫べば、その声はすぐに失われた。次々に現れる兵を倒しながら、四人は上へと歩を進める。その中にはやはり、王城でイルア達を見かけた者達もいた。

「ガイアス!! ヴアルクレア!？」

「うるせーないちいち。」

「なっ、何故フィセイラ殿が……!」

「お嬢様がいるからな。」

無駄口を叩きながらも淀みなく剣を振るう。

「さすがに元一軍の獅子と元陛下の侍従よね。」

「イルア様もすごいですが……」

指二本分の太さしかない長剣を軽々と振り回し、的確に仕留める様は到底“お嬢様”ではない。それをドレスでやってのける事が、未だに信じられない思いだ。

「え? なあに?」

言っではいけない事を言ってしまったようで、ヴィトはさっと視線を外した。

「いえ、何も。」

「そう?」

「はい。」

そんなヴィトに微笑みながら、イルアは皆の階段を駆け上がった。

「失礼致します、ザクラス様」

皆の最上階にある、開け放たれていた部屋へ優雅な足取りで踏み入れる。待ち構えていたザクラスは、イルアの姿に目を見開いた。側には四人の兵がいた。

「・・・バルクス嬢・・・？」

「はい。お久しぶりにございます。イルアでございます。」

血塗れの剣を一度セティエスへ渡し、イルアは優雅に礼をした。

「・・・何故貴女が剣を・・・？・・・それに、その使用人達は・・・」

レーヴェを待っていた筈のところへやって来た、顔見知りの大人しいお嬢様。ザクラスの想像にあるレーヴェとはあまりに違うため、状況についてこれないようだ。

「ああ良かった。貴方は正気そのものなのですな。」

にこりと微笑んだイルアの台詞に、ザクラスの表情が変わった。

「まさか・・・貴女が・・・？」

イルアはそれには答えず、セティエスから剣を受け取って足を進めた。

「さあ、貴方が王位篡奪を目論^{もくろ}んでいたというのは真ですか？」

見た限りただのお嬢様が足を進めたところで、誰も警戒しない。

その手にあるのは見た事もない細身の剣で、およそ兵士の剣には敵うまいと高を括った。

「・・・バルクス嬢。貴女の事は見なかった事にして差し上げよう。私はあの男が許せぬだけで、貴女すら憎いわけではない。」

「まあ・・・ここまで来た私を、無条件で帰してくださいるのですか？」

「・・・もちろん、無条件というわけにはいかぬ。貴女がレーヴェだというのなら、“悪魔の蜜”をお持ちだろう。それを私に渡して頂こう。」

ザクラスが剣を持ち上げる。それに怯まずイルアが近づくと、さすがに不気味に感じた兵が二人、イルアの脇へ立った。

「渡しても貴方では扱えませんか。」

可笑しそうに笑うイルアに、ザクラスはその白い喉に切っ先を突きつけた。残り二人の兵は三人の前に立ちはだかる。

「それでは貴女が私に従うのだな。貴女への脅し方など色々ある。」

「例えば、女に生まれた事を後悔させる、などですか？」

普段と変わらない調子で話すイルアに、ザクラスは僅かに怯えの色を見せた。

「貴女その細腕で、私に敵うとお思いか？」

「そうでなければ、このような形で来ませんわ。」

「・・・！」

イルアの挑発にザクラスが動いた、その時だった。

「・・・・・・っ」

一瞬のうちに様々な音がして、ザクラスは気付けばヴィトに喉を掴まれていた。

？？背後から。

「・・・・・・」

イルアはまったく動いておらず、四人いた兵は一言もうめき声をあげる事なく倒れた。一目で絶命したと分かる程の傷を負って、やった本人達は平然としている。

「さて・・・」

後ろから喉を掴む青年は、王城で見かけた時とはまるで別人だ。肌を刺す殺気はさながら肉食獣。それも、かなり凶暴な。そこまで考えて、ザクラスはヴィトの爪がおかしな事に気付いて驚愕した。

「・・・ま、まさか・・・この青年は・・・」

「ああ、彼は古代獣族の末裔なんです。」

事も無げに言ったイルアにザクラスは状況を忘れて怒鳴りつけた。
「どういう事だ！バルクス嬢！根絶やしにする筈だろう！」

叫んだ拍子にヴィトの爪が食い込んだが、あまり気にしていられなかった。

「どういう事、と言われましても・・・彼が気に入ったので、うちに招いたのです。」

ふわりと微笑んで、イルアはザクラスに近づいた。

「とても強いでしょう？頼りになるのです。」

そうしてザクラスが再び叫び出す前に、イルアは懷から小瓶を取り出した。手の平にすっぽり収まる程の、琥珀の液体が入った小瓶だった。

「これが“悪魔の蜜”ですわ。」

見せた途端に、顔色が変わった。

「そ．．．それを私に渡して頂こうか。」

態度を崩さないザクラスに笑って、イルアは言葉を紡ぐ。

「こんな状況で手に入れて、どうなさるおつもりですか？」

くすくすと笑いながら、イルアは小瓶の蓋を開けた。その口をザクラスへ近づけると、立ち上る香りにザクラスは意識を持っていた。れた。

「これは．．．」

「良い香りでしょう？」

イルアはまさしく悪魔のように、妖艶に微笑んだ。

「大昔に使われていたこの蜜を、危険だからと管理を任されたのがバルクス家です。その中で使う事を許されている者を、レーヴェと呼ぶのですよ．．．わたくしの言葉、聞こえていらっしやいますか？」

ザクラスは蜜の香りに囚われていた。もはや目は虚ろで、ヴィトが爪を元に戻さなければ危ない程に、身体にも力が入っていないかた。 「．．．ザクラス様はお強いから、頼もしいと思っておりましたのに．．．」

国の戦力を削ぐ様なような事態になってしまうとは。

「さようなら、ザクラス様。」

そつと手渡した小瓶を大事そうに眺め、ザクラスはその蜜を、ゆつくり、味わうように飲み干した。

「．．．これは、極上の味、だな．．．」

どさり、とザクラスは倒れ込んだ。
その顔は、穏やかだった。

森を一步出たところで、イルア達四人は振り返り、しばし、祈りを捧げた。

一軍精鋭部隊、約二百人と将に冥福を??。

「・・・一応終わりましたね。」

セティエスが呟いて、イルアが息を吐いた。

「ほんとね。・・・これをエルフィア様が見つけると思うと、さすがに心が痛むわね・・・。」

「さあ、早く立ち去りましょう。」

「ええ。」

ヴィトの言葉に従って、四人は人目につかないように林を進む。

空には明けの明星が輝き、東には僅かに暁が線を引いていた。

第十三話 新月の注意事項

いつの間にか居間のソファで眠っていたレイリアは、ゆるゆると眠りから目覚めた。

「ん・・・」

頭を振って眠気を追い払うと、リュミエルが側にいるのを見つけてほっとした。手を伸ばすと、そのふわふわの頬を擦り寄せてくれた。温かいリュミエルに触れると、急に心細さが膨れあがって、その首に縋り付いた。

（まだ帰って来ない・・・）

じわりと目尻に涙が滲んだ。

（皆大丈夫かな・・・）

リュミエルの首筋に顔を擦り寄せると、小さく鳴きながら甘えてさせてくれた。

「イルア様・・・セティエス様・・・」

誰もいない空間に声が空しく消えて、余計に怖くなった。

「ガイアス・・・ヴィト・・・」

怖い。

早く帰って来て。

皆帰って来て。

無事で。

お願い、無事で。

縋り付くレイリアに、心配そうにリュミエルが尾を振った、その時??。

??くしゅん!

屋敷の外から、緊張とは無縁の音が聞こえた。

「・・・?」

びつくりして縋り付いた姿勢のまま、レイリアは耳を澄ませた。

「・・・・・・・・」

??コンコン。

びくつ、と震え、レイリアはそろりと顔を玄関へ向けた。

「ただいまーっ!」

「!」

飛び上がったレイリアを慌てて避け、リュミエルは道を開けてあげた。

レイリアは夢中で玄関に走り寄ると、一気に扉を開け放った。

開け放ったそこには、何故かびしょ濡れの三人がいた。

「ただいま!」

笑うイルアを、レイリアはしばらく見つめる事しか出来なかった。

「・・・イルア様?」

「うん、そうよ!ただいま!」

「・・・何度言えば気が済む?」

につこり笑うイルアの横で、ガイアスが呆れて溜息を吐いた。

「レリイ!ただいま!」

めげずにただいまを連呼するイルアに、呆れるガイアス。そして、それを笑うセティエス。

「……………っ」

たまらず、レイリアはイルアに飛びついた。

「お帰りなさい！」

「きゃっ！」

レイリアが飛びついた勢いで倒れそうになったイルアを、咄嗟にセティエスとガイアスが支えた。

「お帰りなさい！イルア様！」

「レイリ……………」

「お帰りなさい！」

びしょ濡れの服などおかまいなし……………もしくは目に入っていない様子で、レイリアはイルアを抱きしめた。

「良かった……………ご無事で！」

「……………言ったでしょう？貴女がここで待っていてくれるなら、必ず無事に帰ってくるって。」

「……………はい！」

イルアはちよつと恥ずかしそうに、レイリアに抱きしめられたままでいた。しばらくして、イルアが名残惜しそうにレイリアを離して囁いた。

「セティとガイアスも歓迎してあげて？」

「はいっ！」

笑顔で頷いて、レイリアは勢い良くセティエスに抱きついた。

「お帰りなさい！」

「……………ただいま、レイリ。」

驚いて、そつと抱きしめ返すと、小さな身体が温かくて、ちよつと力が入りそうになってしまった。しかしその腕を離すと、今度は元気よくガイアスに抱きついた。

「お帰り、ガイアス！」

「！」

呆れたようにイルアとセティエスを見ていたガイアスは、まさか本当にレイリアに抱きつかれるとは思っていなかったのだからかなり動揺した。しかし、素直に帰還を喜ぶ姿を見ると、抱きしめられるままになっているのが、なんだかいたたまれなくなってくる。

「・・・ただいま。お前も無事だったな。」

気付けばそんな台詞が出ていて、自然とその頭を撫でていた。

「リュミーがずっと側にいたもの。」

誇らしげに笑う顔を見ていると、どっと疲れを感じた。ようやく緊張が解けたのだ。

「あつ、お湯を沸かしてありますよ!」

ガイアスから離れてレイリアがそういうと、イルアは両手を挙げて喜んだ。

「本当?嬉しいわ!水浴びしたから寒かったのよね!」

「本当ですね。風邪をひいてしまいます。」

「だから戻ってからでいいと言っただろう。」

おしゃべりし合う三人を見て、レイリアは首を傾げた。

「あの、ところでヴィトは?」

「「「「・・・」」」」

三人は気まずそうに視線を泳がせた。こほん、とセティエスが咳払いする。

「・・・今夜・・・もう夜が明けるが、日が昇るまではヴィトの部屋には近寄らない事。いいね?」

「・・・・・・・・はい。あの・・・無事なんですよね?」

「多少の怪我はあるが、無事だよ。手当ても必要ないくらいだからね。」

そう言うのにこりと微笑まれてしまうと、それ以上何もいいようがない。

「あの・・・はい。」

取りあえず、日が昇るまでヴィトの部屋には近づかない事を約束して、レイリアは待ちに待った屋敷の住人を迎え入れたのだった。

イルア達が水浴びをしてから帰ってきた理由はすぐに分かった。

“怖くても迎える”と言ったレイリアに、それでもなるべく怖い思いをさせないようにと、気を配ってくれたのだ。

（イルア様、皆・・・ありがとうございます・・・）

湯浴みして、早々に部屋へ戻って眠ってしまった三人に、レイリアは思いが届くようにと祈った。

（無事に帰ってきてくれて、ありがとうございます・・・）

自室のベッドに腰掛けて、しばらく考えてから閉じていた瞼を開けた。

（・・・やっぱり気になる！）

そろりとベッドを抜け出して、薄手の上着を羽織って、なるべく音を立てないように窓から外へ滑り出た。

???寒い。

もつすぐ冬を迎えるこの季節は、陽の光が消えるとすぐに空気が冷たくなる。その冷たい空気に身を震わせ、レイリアは冷たい芝生を素足で歩いてヴィトの部屋へ向かう。

月の無い夜は、ただただ暗い。壁に手を当てて感覚で進む。

（近づいちゃ駄目って言われたけど・・・顔を見るくらいだから・・・）

水浴びをしたからと言って、イルア達が洗い流したものの匂いが綺麗に消えているわけではなかった。それに、まだちゃんと姿を見えないのが不安だ。手当ては必要ないと言っていたけれど、本当

は怖がらせない為なのかも知れない。

（セティエス様の言う事を、疑っているわけじゃないけど・・・）
けれど・・・理由もなく不安だった。

（ちよつと覗いて、すぐに帰るだけだから・・・）

そう、強く言い聞かせて、レイリアはついに、ヴィトの部屋の窓まで辿り着いた。窓にはカーテンが引かれていたが、僅かな隙間がある。

（・・・やっぱり、駄目だね・・・？）

そこまで来て、レイリアの足がすくんだ。上着を掴んでいた手に、力が籠る。

（・・・どうしよう。やっぱり、戻った方がいいよね・・・？）

でも、ちよつとだけ。と背中を押そうとする自分がいる。

（けど、前にヴィト本人にも言われたし・・・）

でも、自分の目で無事を確かめないと心配だから。と強い言い訳をする自分もいる。

どうしよう、どうしよう、と迷っていると、ヴィトの部屋のカーテンが僅かに揺れた。

（ヴィト？）

はつとして目を凝らすと、一瞬、ヴィトがこちらを見ていたような気がした。

「・・・・・・・・」

（やっぱり、確かめたい！）

そう決意して窓へ歩み寄った。

カーテンの隙間には、もうヴィトの姿は見えなかった。

そつと窓に手をかけ、部屋の中を覗き込む。すると、ベッドに腰掛けている後ろ姿が目に入った。じつと座っているだけで、特に辛そうな様子も見受けられない。

ほつと、小さく息を吐いた。

（良かった・・・。やっぱりセティエス様の仰った通り、無事みた

い・・・)

安心して、そつと窓を離れようとした。しかし、ヴィトがこちらを振り返った。

(あっ・・・)

目が合つて、息が詰まる。ヴィトはしばらくこちらを見た後、何か悩む様子でこちらへ歩いてくる。

(どうしよう・・・でも、今逃げるのも変だよね・・・)

かたん、と小さな音がして、窓が開かれてしまった。ヴィトは困ったような顔でこちらを見ていた。

「あ、あの・・・」

すぐには言葉が出て来ない。ヴィトは静かにレイリアが何か言うのを待っていた。

「・・・お帰りなさい。」

まだ言つてなかったから、とレイリアは微笑んだ。これが言いたかったのだ。

ヴィトは驚いた後、俯いて溜息を吐いた。

「あの、ごめんなさい・・・身体、大丈夫？」

そう言つて窓枠に置かれた手に、自分の手を重ねると、ヴィトが苦笑してレイリアを見下ろした。

「・・・新月の夜は近づいちゃ駄目だって・・・俺、前に言ったよね？」

「・・・うん、ごめんなさい。・・・セティエス様にも言われたの。」

俯いて、言葉を絞り出す。

「だけど・・・皆が帰ってくるまで、すごく怖かったから・・・ヴィトの無事な姿、自分の目で見ないと不安で・・・」

言っていて、やっぱり朝まで待てば良かった、と後悔した。

「ごめん。・・・あの、おやすみなさい。部屋に戻るね。」

言いおいて離れようとした手を掴まれて、レイリアは驚いた。

「・・・ヴィト？」

「駄目だ。今逃げたら追いかけてなくなるから。」

ヴィトは先程からずっと困った様な顔をしている。

「え……？」

しかし、その目は静かで、動揺はしていないようだった。だから、どうしたのだろう、と不思議に思う気持ちが強くなる。

「あの……どうかしたの？」

「……うん、ちょっと。」

ヴィトは苦笑した。そして、そっと手を引かれた。

「今離れられると困るんだけど……そこじゃ寒いよね。」

離れると困る、という言葉に首を傾げる。

「え？う、うん……寒い……」

「おいで、レリイ。」

窓を開け放たれて、レイリアは戸惑った。いくら仲が良いと言っても、こんな時間に異性の部屋に入るのは非常識だ。

「あの、今……？」

「寒いからどうぞ、って言ってるのに？」

くすくす笑われて、レイリアはちよつとほつとした。その笑顔はいつものヴィトだ。

「そうだね……じゃあ、ええと、窓からだけど、失礼します。」

「どうぞ……」

ちよつと話して、すぐに帰ろう。もしくは扉から出て行こう。と密かに決めて、レイリアはヴィトに引き上げてもらった。

ヴィトの部屋の窓は少し高い位置あるので、昇り降りにはちよつと骨が折れる。窓枠から降りようとしたら、ヴィトに引っ張られて抱きつく形になってしまった。

「あ、ごめん」

慌てたレイリアとは対照的に、ヴィトはそのまま抱きしめる。寄りかかれて、かたん、と窓が鳴った。

「ヴィト……？あの、もう大丈夫だよ？」

話しかけると、腰と背中^{よじ}に回された腕に力が入った。ヴィトの呼吸が首筋をくすぐって、身を振りそうになるのを我慢する。

「ヴィト……？」

問いかけながら、レイリアはぼんやりと考えていた。

（そう言えば、どうして新月の夜は近づいちゃ駄目なんだろう？ 今だって、ヴィトは普通だよね……？ ちよつと、いつもより大胆だけれど……）

「辛いのか？ 身体……」

そう問いかければ、

「うん……ちよつとだけ。」

と返ってくる。励ますようにヴィトの肩を軽く叩いた。

「怪我、は……？」

くすりと笑う気配がした。僅かに吐き出された息と、ヴィトの髪がくすぐったくて、レイリアは目を閉じて堪えた。

「平気だよ。それは大した事じゃないんだ。」

「それは」？

思わず聞き返す。と同時に首を傾げると、空いた隙間を埋めるように、ヴィトが頬を合わせて来た。腰に回っていた手が、レイリアの頭を支える。指が髪へ梳き込まれて、なんだか変な気分だ。

「あの、ヴィト？」

さすがに慌てて声をかけると、ヴィトが咳く。

「レイリ……良い匂い。」

「え？」

ヴィトはなんとも思っていないのか、と安心して、レイリアは応えた。

「イルア様と同じ洗髪剤だけど……」

「……イルア様とは違う。」

（それってた、体臭！？）

若干恥ずかしくなって、レイリアはごまかすように笑った。

「そ、そうかな……」

「うん。違う。」

（・・・首が辛いかも。）

何せ曲がったままで固定されているのだから。恥ずかしさはそう
そうに放棄して、レイリアはそつとヴィトの腕を解こうとした。

「ヴィト、私、そろそろ戻らないと・・・」

そう言った途端、ヴィトが僅かに顔をこちらに向けて、少しだけ
唇が頬に触れる。

「!？」

「レイリ・・・今そういう事を言われると、すごく困る。」

（何！？何が！？私も困る・・・！）

急に心臓が跳ね上がる。体中の神経が、鋭くなったのか鈍くなっ
たのか分からない感覚が襲う。慌てるレイリアに、ヴィトは追い打
ちをかけた。

「襲いたくなるから。」

「・・・！」

（新月の夜は近づいちゃ駄目って・・・）
レイリアは固まった。

（こ、こういう事！？）

暁が辺りを照らし始める頃？。

イルアは不安になって一階へ降りて来た。すると、廊下へ出て来
たガイアスと出くわした。

「どうした？イルア。」

「・・・なんだか、レイリが心配で。」

ちらりとレイリアの部屋を見る。するとガイアスも同じように部
屋を見た。

「・・・実はさっき、起きた様な気がしてな。」

「レイリが？」

こくり、とガイアスが頷く。

「・・・そこはかとなく不安よね。」

イルアはよし、と決断した。

「セティを起こして、様子を見にいきましょう。」

「よし。」

二人はすぐにセティエスの部屋の扉を叩き、三人でヴィトの部屋の前に立った。

「・・・・・・」

三人で聞き耳を立てる。と、すぐに中で会話しているのが聞こえた。

「セティ！ガイアス！」

イルアの叫びに応じて、二人は即座に鍵を壊す目的で、扉を蹴り破った。

「襲いたくなるから。」

そう言われてレイリアはかなり焦った。

（に、逃げなきゃ・・・！あ、でもヴィトが自分で逃げたら追いかけてなくなるって言うてた！・・・じゃあ逃げない方が・・・安全・・・？）

ちらり、とレイリアがヴィトの様子を伺うのと同時に、今度は確実にヴィトの唇がレイリアの頬に当てられていた。

（・・・無理！安全じゃない！）

咄嗟に身を振って逃げようとしてしまっ、追いつがったヴィトによつて部屋の隅へ追いつめられた。

「・・・！」

壁に横と背中を挟まれ、正面にはヴィト。

（ま、まずい・・・！）

吐息がかかる程の距離にヴィトの顔がある。

（だ、誰か・・・！）

??ドカツ!

「「!?!」」

扉が木っ端微塵くはみじんになったんじゃないかという勢いで開いた。・・・
というか半分は壊れている。

「「レイリイ!」」

叫んだのはイルアとセティエスで、ヴィトが身構える前にガイア
スが押さえ込み、セティエスが手刀をくらわせて気絶させた。

「・・・・・・・・」

あつという間の出来事に、レイリアは呆然と倒れたヴィトを見て
いた。ぼかんとしていると、イルアが駆け込んできて抱きしめられ
た。

「レイリイ、無事なの!?!」

「・・・・イルア様・・・・」

何がどうなったんだろう。レイリアが啞然おろろしていると、イルア
は心配そうに覗き込む。

「何もされてない?」

さつと全身を眺められた。

「・・・・どこも乱れてないわね。大丈夫みたい・・・・?」

「!」

そう言われてはつと我に返った。

「イ、イルア様!ヴィトが・・・・!」

「おい」

言いかけたレイリアを制して、ガイアスが全員を部屋を出るよう
に促した。

「取りあえず居間に。」

「ああ、そうだな。」

ガイアスの提案にセティエスが頷いて、四人は居間へ場所を移っ
た。

「あの、イルア様。ヴィトは一体どうしたんですか？」

「その前に。」

問いかけたイルアからではなく、声がかかったのはセティエスからだ。はつと身を強ばらせるレイリアを、鋭い目で射抜く。

「日が昇るまではヴィトの部屋へ近寄らない、という約束だったね？」

「……はい……」

「……」

しゅうん、としよげかえるレイリアを見下ろして、セティエスは息を抜いた。そして、そつとその頬を両手で包んで顔を上げさせた。

「……こういう事になるから、駄目だと言ったんだ。」

「……はい」
殊勝に領いたレイリアに怒りを収めて、セティエスは手を離して

イルアを振り返った。

「お嬢様」

「え？あ、はいはい。」

呼びかけられて何故か慌てるイルア。三人から不思議そうに見られるが、そんなものはお構いなしにレイリアへ歩み寄った。

「じゃあちよつとこつちへ来て？」

「はい」

イルアに手を引かれ、レイリアは居間のソファへ腰を下ろした。

「ヴィトなんだけど……実はね」

ガイアスは廊下に通じる扉の側で、壁にもたれており、セティエスはその反対側に立って二人の様子を見ていた。

「彼は、古代獣族の末裔なの。」

「古代……獣族……」

言われた言葉を反芻してから、レイリアは息を呑んだ。

「それって……三年前に滅んだって云われている……？」

イルアは静かに頷いた。

「三年前ね、古代獣族の殲滅命令が下ったの。殲滅には第二軍が行ったのだけど、殿下の護衛も兼ねて私たちも一緒に行ったのよ。」

「・・・第二軍に、殿下がいらしたんですか？」

そう聞くと、イルアは小さく笑った。

「ええ。第二軍の将は殿下なのよ。」

（知らなかった・・・殿下も戦場に出るっていう噂は聞いてたけど・・・）

「そこで、最後に一人だけ、なかなか手が出せない獣族がいたの。」
イルアは目を伏せた。その時の光景が目に映っているのだろうか。

「近くに現れるまで、どこに潜んでいるのか誰にも分からない。接近されて近づこうと思っても、一太刀浴びせる前に姿が消えてしまう。何時間かしら・・・いつまで経っても決着がつかなくて・・・一瞬、目が合ったの。」

「・・・その目を見て、殿下にお願いしたのよ。私にくださいって。」
「・・・」

その光景は、想像だけでも怖いものだといレイリアは思った。けれどイルアは、話し終えてふわりと笑った。それは、とても穏やかな、柔らかな、笑み。

「ヴィトったら最初は怖かったのよー？」

くすくすと笑いながらイルアは言った。レイリアも思わず微笑む。「私も新月の話を知らなくて、初めてここで新月を迎えた時はね、どこかに狩りに行くこうとして、セティエスとガイアス二人掛かりで止めて。大人しくなったと思って様子見に行ったら襲われるし。」

「イ、イルア様、大丈夫だったんですか！？」

慌ててそう訊ねると、イルアは不敵に微笑んだ。

「大丈夫よ。私って、結構強いのだ。」

にっこりと微笑むイルアを見て、レイリアは僅かに首を傾げた。

第十三話 新月の注意事項（後書き）

『獣族』

・・・この世界に古くからいた種族。その聴力・嗅覚・気配を察知する能力は獣並み。身体能力は人間を軽く上回る。

性格は野生の獣に近いものがあり、警戒心が強く、凶暴。

攻撃態勢の時は感覚が獣よりになり、爪は大型の獣のそれに類似する。牙も形を変える。

第十四話 移りゆく季節

ヴィトはかなり抑えてたと思うわ、とイルアが言った。
起きたらきつと落ち込んでるから、あんまり怒らないであげてねとも。

（びつくりしたけど・・・種族の特徴なら、怒る事じゃないよね）
気まづさはあるかも知れないが。

（よし！）

レイリアは気合いを入れて部屋を出た。
目指すは台所だ。

「ヴィト、おはよう」

行ってみれば、一見いつもと変わらない様子でヴィトが朝食の用意をしていた。しかし声をかけると、びくりと肩を震わせた。振り返った顔は、強ばっている。

「・・・おはよう」

（ヴィト・・・かなり気にしてるんだ・・・）

レイリアはいつも通り横に立って用意を手伝う。と、ヴィトが手を止めてこちらを伺い見た。気付きつつも、レイリアは気付かない振りをする。

「・・・レイリ・・・」

呼び声が弱々しくて、思わずヴィトを見た。いつも穏やかな目が、揺れている。

「・・・ごめん。」

短い一言。それだけ言うのが精一杯のようだった。

（ヴィト・・・）

レイリアは出来るだけ明るく笑った。

「ヴィトがすごく反省してるなら、許してあげる。」

「・・・・・・・・」

意外だったのか、ヴィトは目を丸くして瞬きした。なかなか言葉が出て来ないらしい。

それが面白くて自然と笑ってしまった。

「どう？」

笑いながらそう訊ねると、少し間を置いてからヴィトが笑った。

いつもの、優しい笑み。自分で笑いかけておきながら、レイリアはちよつとどきりとしてしまった。

「うん、反省してる。・・・ごめん。」

頭を下げられて慌てた。

「あの、ヴィト・・・」

その肩に手を置こうとした瞬間、ぱつと顔を上げてヴィトが笑った。びっくりして手を引っ込める。

「これで、許してくれる？」

「・・・・・・・・」

今度はレイリアが瞬く番だった。ぷつ、と二人で吹き出す。

「ヴィト・・・うん、許してあげる。」

「良かった。」

くすくすと笑い合って、二人はいつものように朝食の準備を再開した。

朝食を食べてすぐ、レイリア達は初めて五人揃って登城する事になった。昨夜の事を報告する為だ。

「私も行く必要があるんですか？」

と聞いてみると、

「んー、一応ね。」

とイルアに言われたのでついて行く。

「報告だけなら俺もヴィトも必要ないだろ。」

と“行きたくない” オーラいっぱいのがイアスが言うと、

「ガイアスはガディスをつれて行くのよ。エルフィア様が見たいっておっしゃってるから。」

「あの女……！」

と言い渡されていた。

そんなわけで、五人で馬車へ乗り込む。大きな馬車が屋敷の門前へやってきた時は、レイリアは何故か逃げたい気分に襲われた。

「大きな馬車ですね……」

言いながら、大きな窓から外を眺める。冬を呼び込む風が、木の葉を揺らしていた。

「自前で行きますって言ったのだけどね。“表向きは擁護院ようごいんの報告だから、王城から迎えに行くのが良いだろう”ですって。」

「自前って……」

イルアの台詞にヴィトが苦笑した。

「お嬢様。もう少し言葉には気を配って頂きませんか……」

セティエスも諷めるが、イルアは軽く肩をすくめただけだった。

「そう言えば……」

きちんと椅子へ座り直し、レイリアはイルアへ向き直った。イルアの隣にはセティエスが。イルアの正面にはガイアスが座り、ヴィト、レイリアと並んでいる。

「イルア様。レーヴェの事を知っているのは、王族とバルクス家の人だけなんですよね？」

改めてそう訊ねるレイリアに、イルアはしっかりと頷いた。

「そうよ。」

「それなら……ルセ様は、王族の方なんですか？」

「……」

につこりと微笑んだまま、イルアは固まった。

（あれ……？）

何かおかしい事を聞いてしまったかと、レイリアは首を傾げた。

「あの……？」

「……そうね。」

(?)

返事の意味がよく分からず、反対側へ首を傾げた。それに密かに
ヴィトとセティエスが笑う。

「ルセ様ね……」

イルアは細い顎に指をあて、しばし考えた後に首を振った。

「本人に聞いてみるといいわよ。」

「……ご本人に、ですか？」

「ええ。答えてくれると思うわ。」

「……分かりました。聞いてみます。」

ちよつとだけ不思議に思いながらも、レイリアは素直に頷いた。

王城について、レイリアはセティエスとヴィトを伴って国王陛下
へ報告に向かった。ガイアスは裏庭でガデイスの面倒を見なければ
ならないので、さつさと裏庭へ向かう。ガデイスは本当にガイアス
にだけは懐いているようで、暴れる事もなく、大人しくついて行っ
た。

「あの、イルア様。私はどうしたらいいでしょうか？」

「んー、そうねえ……。特にどうするように、とは言われていない
から、好きな事をしていいのだけれど……」

(う、そう言われても困るなあ……)

そう思ったのが顔に出たのか、イルアはくすりと笑った。

「そうね。中庭へ行ってみたらどう？とても美しく整えられている
わよ。」

「中庭……。私が行ってもいいんですか？」

「ええ、大丈夫よ。もし誰かに声をかけられたら、家名を出せばい
いわ。」

「はい！」

（中庭かぁ・・・！）

ちよつと胸躍らせながら、レイリアは主人達を見送ってから、その中庭へと向かう。

そう言えば、以前リユミエルと一緒に来たときは、あまりに緊張して周りを見回す余裕がなかった。しかし今日は、皆と一緒に来たせいか、緊張は少ししかしていなかった。

うきうきしながらイルアに教えてもらった道を進んで行くと、大きな廊下で足を止めてしまった。

「・・・こつちで良かったつけ・・・？」

きよろきよろと辺りを見回す。ちゃんと教えられた通りに進んできたつもりだが、似た様な廊下を通るうちに、どこかで間違ってしまったような気もする。

「あれ・・・どうしよう・・・」

見回しても正確な道が分かる筈もなく、困るばかりだ。じいっと辺りを見渡していると、奥の方に色とりどりの色彩が見えた。

「あ！あれが中庭かな？」

そう思ったら、走り出していた。

一方？。

イルアとセティエス、そしてヴィトの三人は、国王の元にいた。

とは言っても謁見の間ではなく、国王の執務室だ。部屋は人払いがされており、その扉の外にも人はおらず、部屋へ通じる通路の外に、ようやく兵が立っている状態だった。

「して、今回の件はどうであった？」

執務の手を休めて国王はイルアに訊ねた。イルアは僅かに笑って答える。

「・・・精鋭二十三名は、もはや正気に戻す事敵わずと判断しましたので、斬り伏せました。」

「・・・そうか。」

小さく息を吐いて、国王は肩を落とした。

「第一軍、ザクラス將軍ですが・・・貴方への殺意をはっきりと語りました。」

「・・・そうか。」

今度は額に手を当てた。

「わたくしの密事みことも包み隠さず知られてしまいましたので、“蜜”にて処分致しました。」

「・・・」

しばらくの沈黙の後、国王は深く長い溜息を吐いた。そして、少し笑う。

「“包み隠さず”というのは言い過ぎではないか？」

くすり、とイルアも笑う。けれどそれは、嬉しそうでも、楽しそうでもない、寂しい笑みだった。

「ええ、少し。ちょっとだけ、レーヴェの仕組みを教えてさしあげました。」

「・・・イルア・・・」

咎める様な口調に、イルアは困った様な笑みを浮かべた。

「どうしてかは分かりませんが・・・ザクラス様は歌姫に異常に執着しておりました。そして、その為に貴方にまでも強い殺意を抱いておりました。ですから・・・例え説得出来たとしても、いつまた殺意が強くなってもおかしくはない。そう思ったのです。」

「・・・そうか・・・」

苦笑して、国王は改めて訊ねた。

「して、ザクラスはどのような最後であったか。」

「・・・蜜に酔っておりましてから・・・幸福な気持ちで、逝かれたと思います。」

「・・・そうか。すまなかつたな、イルア・・・」

事のきっかけは、レーヴェの存在を漏らした、国王の失態だ。

「・・・頼りにして頂けるのは、嬉しい事ですね。」

寂しげに頷いて、国王はしばし沈黙した。

そして、大きなため息を吐いてから話題を変えた。

「して、イルア。婿探しはしておるのか？」

問われた話題に、イルアは笑ってごまかした。

「あら陛下。わたくし、まだまだそういう事に興味は持てないのですが……」

「何を言っておるか。その歳で浮ついた話の一つもないというのが、真に不自然だぞ。」

「まあ……“恋をしないなんて人間ではない”とでも仰るおつもりですか？」

ひらりふわりと避けようとするイルアの様子に、国王も苦笑せざるをえない。

「イルア……。お前の立場は分かっておるだろう。お前が死ぬまで決められぬというのなら、私が決める他なくなるのだぞ。」

「陛下……」

本当に困って、イルアは縋^{すが}るように国王を見つめた。

「……そなたは人だ。イルア。何があるうと、それは変わらぬ。」
「……」

「人ならば恋もしよう。お前が惹かれる男が、必ず現れよう。」

切々と連ねられる言葉に、イルアも思わず俯いてしまった。王は優しい。まだ幼い頃から面識があったせいだろうか。イルアの事を娘のように案じてくれている。

「出来るなら、お前がこれと決めた男を婿に迎えるが良い。それが最良だと、私は考えている。」

「……ありがたきお言葉、痛み入ります。陛下。」

心の震えを抑えて頭を下げるイルアを見て、国王は目元を緩めた。
「……残念な事だ。そなたがレーヴェでさえなければ、あれの嫁に迎えたものを。」

「まあ、陛下！」

これにはイルアも、思わず笑ってしまった。

「それなら、お早く花嫁を探すよう、殿下にお言い付けなされませ。このイルアも気立ての良さそうな娘を捜しましょう。」

調子よく言い終えたイルアに、国王は大きな声で笑った。

「全く！そなたの心配をしておるのだぞ、イルア！」

イルアが国王とそんなやり取りをしている頃。

レイリアは無事、中庭に辿り着いていた。

「わあ、きれい・・・！」

中庭は、素晴らしく整えられていた。樹木の位置。芝の具合。花の色。量。景色。香り。全てが整えられていれ、それなのに人工的な無機質さが一切感じられなかった。

「人の手でこんな風に造れるものなのね・・・」

きよるきよると見渡しながら歩いていると、茂みの影から声がかけられた。

「・・・ひよつとして、イルアの使用人？」

「きゃっ」

びつくりして飛び退くと、茂みの一つから印象的な顔が覗いていた。

「やっぱり。シレイの主人だね。」

「あっ・・・ルわっ」

名前を言おうとした途端、レイリアは茂みに引つ張り込まれた。転ぶように地面に手を着くと、ユーセウスが笑っているのが目に入った。低い樹木の、赤と黄色に染まった葉が、ふわりと舞ってユーセウスを彩る。

ユーセウスは、もう片方の手で自分の口元に人差し指を当て、声を出さないようにと訴えてきた。理由は分からないが、穏やかな笑顔から、きつとこの時間を邪魔されたくないのだろうと思って頷いた。

ユーセウスは掴んでいた腕を放し、小さな声で囁いた。

「名前、なんだっけ？」

答えてレイリアも小声で囁く。ついでに一緒になって茂みに身を潜めた。促されてユーセウスの隣に座る。

「レイリアです。」

「ああ、そうか。レイリア・・・ね。」

レイリア、ともう一度呟いて、ユーセウスは笑った。

「今日は全員で来たんだっけ？」

「・・・はい・・・そうです。」

ちよつと警戒したのを悟ったのか、苦笑する。

「そう警戒しなくてもいいよ。バルクス家の事は知ってるから。」

（・・・やっぱりルセ様は関係者なのね・・・）

そう思つてレイリアは、思い切つて聞いてみた。

「あの、ルセ様はどういった方なんですか？」

「・・・ん？」

絶対に質問の意図を分かっているのに、ユーセウスは穏やかに微笑んだ。

「その・・・やっぱり、王族の方なんですか？」

（でもこんな若い方が・・・？）

そう考えて、はつとした。

「まさか・・・」

「親戚だよ。」

「・・・え？」

思ったものとは違う答えに、レイリアは驚いて言葉を失つてしまった。

「イルアの祖母の姉が、僕の祖母なんだ。」

「・・・え・・・あ・・・そう、なんですか・・・」

なんだか拍子抜けしてしまった。だって。ひよつとして王子殿下

なのかと思ってしまったから。

そんなレイリアの表情を見て、ユーセウスは楽しそうに笑った。

「期待外れだったみたいだね？」

「い、いえ！そんな・・・」

「しっ」

口元に指を当て、顔を寄せられる。

「声、大きくならないようにね。」

「あっ・・・は、はい・・・」

その様を、くすり、と笑われる。

「レイリアは隠し事が出来そうにないね。」

「うっ・・・はい。苦手です・・・」

ズバリ言い当てられて恥ずかしくなる。ユーセウスはそんなレイリアを面白そうに笑った後、ふと思い出したように訊ねた。

「イルアはどうだった？」

「え？」

「昨日の夜。」

「あ・・・」

“仕事”の事を言っているのだと、僅かに緊張した。

「・・・」

何をどう伝えたらいいのか分からず、レイリアは口を噤んだ。ユーセウスはそんなレイリアから言葉が出るのを、じっと待った。

「・・・」笑顔で、帰って来られて・・・すぐに眠ってしまったわれました。」

それだけ言って、笑った。ユーセウスはそれを、眩しそうに眺めて目を細めた。

「・・・そうか。」

「・・・はい。」

小さく笑って、ユーセウスは空を仰ぐ。つられてレイリアも空を仰いだ。

「イルアは君がいたから、笑って帰れたんだろうな。」

「え？」

思わぬ言葉に、空からユーセウスへ視線を移すと、ユーセウスはこちらをしっかりと見ていた。

「違うの？」

「えっ……と……」

違うの？と聞かれても、笑顔で帰れた理由が自分にあるのかどうか、レイリアはさっぱり分からない。無事に帰った理由なら、大きく頷く事が出来ただろう。だって、約束、したのだから。

「……その……無事に帰る、というお約束はして頂きました。」
真剣に考えてそう答えると、ユーセウスは楽しそうに笑った。

「そっか。そんな約束したんだね。」

「はい。」

約束した嬉しさを思い出して、レイリアは大きく頷いた。嬉しそうに笑うレイリアにつられて笑って、しばらくしてから、ユーセウスはとんでもない事をさらりと言ったのけた。

「ねえレイリア。僕のお嫁さんにならない？」

「は……え？」

はい、と勢いで言わなくて良かったと、レイリアは初めて自分を褒めた。

「あの、今……」

動揺するレイリアをよそに、ユーセウスはもう一度さらりと言った。

「うん。お嫁さんにならない？」

「……ええむっ!？」

叫びそうなレイリアの口をさっと塞いで、ユーセウスは周りを見回した。

「駄目だよ。静かにね。」

「むっ」

変わらない穏やかな口調をすごいと思いつつ、レイリアは突然の申し出に頭が混乱した。

「あ、あの、えっと・・・えっとですね・・・」

混乱しつつも落ち着いて考えようとするレイリアを見ながら、ユーセウスは楽しそうに笑う。

「うん。」

「あの・・・その・・・」

「うん。」

「ええと・・・」

「うん。」

くすくす笑いながら見守られる。それがいたたまれなくて、レイリアは大きな声にならないように頑張つて、でも、はっきりと言った。

「イルア様の方が相応しいと思います！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

レイリアが大きな声になるかも知れないと警戒したのか、ユーセウスの手がすぐそこにあつた。その姿勢のまま、ユーセウスは数秒固まった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

そして。

「くっ・・・・・・・・」

静かに、声を抑えて笑い始めた。

「くくくっ・・・・・・・・！」

可笑しそうに笑うユーセウスを見て、レイリアはわけが分からず首を傾げた。

「面白いね・・・！そこでイルアを僕に勧めるんだ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

困ってしまったて言葉が浮かばない。するとユーセウスは笑いを収

めながら言った。

「・・・イルアと僕は駄目だよ。」

「え？」

「だってさ、イルアがお嫁に来てごらんよ。一日中イルアのペースに掻き回されるに違いないよ。ついでによく口も回るしね。僕が仕事を出来なくなるから、絶対に良くない。」

「・・・」

（イルア様・・・確かにセティエス様も困ってる事が多いかもなあ・・・）

「それに・・・イルアはイルアの仕事があるからね。そういう意味でも、ちよつと無理かなあ・・・。」

苦笑してそう言うユーセウスに、思わずレイリアも苦笑していた。「まあ、僕もそろそろそういう話を勧められるからね・・・上手くごまかさないとな。」

どこか遠くを見つめて言う。その表情を見て、レイリアは首を傾げた。

「・・・ルセ様は、結婚はお嫌なんですか？」

ユーセウスはレイリアに視線を戻し、苦笑した。

「うーん・・・嫌ではないよ。ただ、相手は慎重に選ばないといけないから・・・それが少し、大変だなと思って。」

「・・・そう、なんですか・・・」

真剣に話を聞いて、よく分からないながらも頷くレイリアの横顔を、ユーセウスは、静かに見つめていた。

イルアと国王、レイリアとユーセウスがそんな会話をしている頃。ガイアスはエルフィアを迎えていた。

「久しいな、ガイアス！」

「ああ、久しぶりだな。」

軽く挨拶を交わして、二人はガディスの側へ立った。飛びかかれ

る距離にエルフィアが寄つても、ガデイスはエルフィアを一瞥しただけでそつぽを向いた。

「うむ。やはり良い騎獣だな。」

「そうか？まあ、攻撃に関しては良いがな。」

「お前が育てると戦闘に特化した騎獣になるのは、相変わらずと見える。」

「・・・そうかもな。」

ガイアスは昔、第一軍にいた。エルフィアはその頃を知っているから、ガイアスが変わらない事が、なんだか可笑しく思えた。

「イルアの元はどうだ。満足しているか？」

「・・・まあ、な。」

ガイアスは苦笑した。

「ガキみたいで困る事はあるが。」

「イルアが？それとも、お前が？」

途端にきつく睨まれた。

「お前な。そもそも俺をここへ呼びつけるとは良い度胸だな。」

「なんだ。さっきまで怒っていなかったじゃないか。」

わざとそう言つてのけると、ガイアスは深いため息を零した。

「・・・てめえが一番ガキかもな。」

「それは、褒めているのだろうな？」

「けなしてんだよ。」

こんな軽口を叩き合うのも、本当に久しぶりだとガイアスは思った。そんな時間が懐かしく思えるが、焦がれる程の思いではなく。やはり、過去は過去でしかないのだと、やけに強くそう思うのだ。

「後悔していないか？」

「何？」

「軍を抜けた事だ。」

エルフィアにそう訊かれても、気持ちは穏やかだった。

「するわけがない。」

ガイアスは大人しく伏せているガデイスの鼻先を撫でた。ちよっ

とだけ目を開けてガイアスを見上げたが、すぐに目を細めてじっとしていた。

「兵ではなくなった。剣を捨てずに済んだ。・・・良かったと思っている。家名を捨てて。」

そんなガイアスを、エルフィアは少しだけ寂しく思いながら眺めた。

「・・・なら、良かったよ。」

（お前を送り出して・・・）

エルフィアは別れを告げて、ガイアスの元を後にした。

国王の執務室を後にしたイルア、セティエス、ヴィトの三人は、ガイアス、レイリアと合流しようと、イルアとセティエスは裏庭へ。ヴィトは中庭へと別れた。

「さあ、じゃあガイアスのところへ行きましょう。」

「はい、お嬢様。」

快く返事をしてイルアの少し後ろを歩いていると、前方から見知った人物が歩いてきて、二人とも思わず足を止めた。

「フィセイラ閣下、ご無沙汰しております。」

イルアは通路の端へ下がってから、やってきた人物に礼をした。相手は、その息子とよく似た、柔らかな笑みを浮かべて応えた。

「これはイルア嬢。息災なようでごより。」

そうして移した視線の先では、セティエスが軽く頭を下げた。

「ご無沙汰しております、父上。」

「お前も健康そうでごよりだ。セティエス。」

セティエスの父？この国の宰相閣下は、息子に目に留めて優しく微笑んだ。

「なかなかセティエスに時間をやれなくて・・・申し訳ございません、閣下。」

「なに、頼りになっているようで良い。これも嬉しい事だ。」

「お時間を頂けるようでしたら、少しお話でもされてはいいかがです

か？」

そう提案すると、セティエスが少し慌てて声を上げた。

「お嬢様。お一人で行動されるおつもりですか？」

「あら、セティ。私も子供じゃないのよ？ガイアスの所へ行くだけじゃないの。」

「それはそうですが・・・」

渋るセティエスに、宰相はくすりと笑った。本当にこの父子はよく似ている。

「イルア嬢がこう言って下さっているのだ。ありがたく、語らうとしよう。」

「父上・・・分かりました。なるべくすぐにお迎えに上がりますので。」

「分かってるわ。・・・それでは閣下。わたくしはこれにて失礼致します。」

「ああ。心遣い、感謝する。」

「いいえ。それでは。」

イルアは優美に礼をして、その場を後にして行ってしまった。

その背を見送りながら、宰相は息子へ笑いかけた。

「良いお嬢さんだな、イルア嬢は。」

「ええ。良い主人です。・・・少しお転婆ですが。」

くすりと笑いながらそう答えると、宰相は少し声量を落として訊いてきた。

「お前、イルア嬢の婿になる気はないのか？」

「！・・・またそのお話ですか。私とお嬢様はそういった関係にはならないでしょうと、申し上げていますのに・・・。」

^{へきえき}辟易して溜息を吐くセティエスに、宰相はくすくす笑った。

「なに、あんなに素敵なお嬢さんなのだ。お前が心変わりしないと
は言い切れまい？」

「父上・・・。仮にそうなったとしても、従者と主人では醜聞^{しゅうぶん}でし

よう？」

そう言つと、宰相はにやりと笑つた。そんな表情も魅惑的に見えるのが、この父子の羨ましいところだ。

「私は構わぬぞ。例えどうなるうとも、お前の価値が揺るぐわけではないからな。」

「・・・そういうお言葉は、親ばかりなのですが・・・ご存知でしたか？」

くすぐつたい気分でそう言つと、宰相は楽しそうに笑つた。

「良い事ではないか。そう言えば新しく使用人を迎えたようだが、それも若い娘さんだそうだな。その子はどんなのだ？」

「父上・・・季節が季節ですので、そういう話題をされるのは分かるのですが・・・」

「分かっているなら、お前も考えると良い。子を望むなら若いうちが良いぞ。」

「父上！」

「冬が明ければ祝福の季節だ。伴侶を見つけるまで毎年こういう話があるだろうよ。」

「・・・勘弁して下さいませんか・・・」

セティエスは力無く肩を落としたのだった。

イルアはセティエスと別れて、早足に裏庭へと進む。きっとエルフィアがガイアスの所を訊ねているだろう。一目でいいから、様子を見ておきたかった。

（ザクラス様を慕っていらしたから・・・気を落としていらつしやるんじゃないかしら・・・）

それだけが、気がかりだった。

仕事とは言え、やっているのは暗殺だ。理由を明かす訳にはいかないし、嘘も言わなければならぬ。それが何年やっても苦しいのは、もう、仕方のない事だけれど。

「エルフィア様！」

向かう先に探していた人を見つけて、イルアは笑顔で走り寄った。エルフィアは、僅かに動揺したようだった。

「・・・イルア。ガイアスには無理を言ってすまなかったな。」

「いいえ。ガデイスを外へ出す機会はありませんので、気分転換になったのではないのでしょうか。」

「そうか・・・なら、いいのだが・・・」

じくり、と胸が痛む。この人が落ち込んでいる原因など、分かっているのに。

「どうかなさいましたか？」

「え？」

「・・・少し気を落としていらっしやるように見えたので・・・」

何も知らない様子で分かりきった事を訊くのは、いつだって心が痛い。

「・・・そのうち貴女にも分かる事だから、今言ってしまうが・・・他言無用に頼む。」

「・・・はい。」

イルアはじつとエルフィアを見つめた。声を潜め、エルフィアはそつと囁いた。

「実は昨夜・・・いや、早朝か。将軍が自害された。」

「・・・え？」

殺したのは、私。

「それも、精鋭部隊を皆殺しにしてからだ。」

目を伏せるエルフィアは、深い悲しみに囚われている。

「何故こんな事になったのか分からない。最近将軍の様子がおかしいとは思っていた。だが・・・何故自害するに至ったのだろうか・・・」

「エルフィア様・・・」

精鋭部隊を皆殺しにしたのも、將軍ではない。

「・・・この事は城内で処理し、隊員の身内には別の話を用意する、という事だ。」

「・・・そうですか・・・。」

堪らず目を伏せたイルアを見て、エルフィアはそつと言い足した。
「ガイアスに、言えなくてな。」

見上げたエルフィアは、苦しげに微笑んでいた。

「あいつも元一軍で、將軍に剣を教わった一人だったから・・・苦しいだろうと思うと、な。」

「・・・・・・・・」

「ごめんなさい。もつと苦しい思いをしている筈。」

「すまないが・・・訊かれる事があれば、イルアから伝えてくれな
いか・・・？」

縋る様な視線は、普段は絶対に見せないものだ。それだけ、エル
フィアが受けた心の傷が大きいのだろう。

「・・・ええ。わたくしから伝えます。」

「・・・ありがとう、すまない。」

「ごめんなさい。嘘ばかりで。」

けれど絶対に言えない言葉。

（ごめんなさい・・・）

「お気になさらず。・・・エルフィア様、ご無理はなさらないで下
さいね。」

「ああ・・・私が倒れるわけにはいかぬからな。」

そう言ったエルフィアの表情はもう、兵を束ねる者の顔で。

（ああ・・・お強い方で良かった・・・）

イルアは泣きそうなくらい、安堵あんどしたのだった。

レイリアとユーセウスは、他愛ない話をして時間を過ごした。とても穏やかな時間だった。

「ガイアスの話は聞いているよ。軍にいた頃はかなり有望視されていて、確か副将に推薦されていたんだ。」

「へえ・・・そうなんですか。なんだか強そうだなあ、とは思ってたんですけど・・・」

「けど、戦場で親友が命を落として、それからすぐに軍を辞めたと聞いている。」

「・・・そうだったんだ・・・」

レイリアはガイアスを思い浮かべて、なんだか切なくなった。

（あのガイアスが・・・そんな経緯でイルア様のところにいるんだ・・・）

「レイリアから見て、ガイアスはどう？」

訊かれて、レイリアは思わず素直に答えてしまった。

「うーん、怖いです。すぐ睨むし・・・ガデイスにちょっと似てるかも・・・」

ぷっ、とユーセウスは吹き出した。堪えてはいるものの、辛そうだ。

「怖いんだ？ガデイスって・・・シューグだよね？くくくっ・・・」

肩を震わすユーセウスを見て、レイリアも笑ってしまった。

「だって、不機嫌そうにしてる事が多いんですよ？それに、ヴィトと一緒に特訓してくれるんですけど、すっごく厳しくて。倒れるまで走らされる事、結構あるんです。」

「・・・愛だね！」

声を抑えつつも、そう言ってユーセウスは笑う。

「あ、愛！？」

「しーっ」

「むぐ」

慌てて口を塞いだのだが、慌てすぎて、押し倒しかけた。

レイリアは両手を後ろへ着いて倒れるのを免れた。が、それに覆い被さるようにユーセウスが重なる。

「！」

思わぬタイミングでお互いが間近に迫り、双方、動きが取れない。

「……………」

するり、と口元をユーセウスの手が滑って、指先が触れていった。そんな状況が現実的には思えなくて、レイリアはただただ、目の前のユーセウスを見ていた。

そのうち、ユーセウスが微笑んだ。その笑顔を、なんだか温かい気持ちでレイリアは見ていた。

「……レイリア。お嫁さんが無理なら、せめて婚約はどう？」

（無理です！）

と叫ぶには距離が近過ぎて。こくりと息を吞み込んでから、吐息と一緒に言葉を零した。

「あ、の……私……そういうの、は……」

蚊の鳴くような声を絞り出すレイリアを見て、ユーセウスは楽しそうに笑った。

「ル、ルセ様……」

困り果てて名前を呼ぶと、ユーセウスは僅かに顔を寄せてきた。

（なっ、なに？）

途端に昨夜のヴィトを思い出して、再び逃げなければと思った。が、ヴィトの時より逃げ易い筈なのに、ユーセウスの深く青い瞳に魅入られて、頭が働かない。

「……………」

再び動けなくなった。??が。

「レリイ？」

近くで聞き慣れた声がして、二人してびっくりと飛び上がった。ユーセウスが身を起こしてレイリアの手を取ったところで、茂みが揺れてヴィトが現れた。ヴィトは、二人を見て瞬いた。

「・・・レリイ」

すぐにレイリアに手を差し伸べて立たせる。ユーセウスも一緒に立ち上がる。ヴィトは、ユーセウスに鋭い視線を向けて言った。

「失礼ですが、この子に何か御用でしょうか？」

（ヴィト・・・何か、怒ってる・・・？）

ヴィトに睨まれて、ユーセウスは苦笑した。

「少し話してただけだよ。ね？」

「はい。」

躊躇いなく頷くレイリアに少しだけ警戒を解いたものの、ヴィトは尚もユーセウスを威嚇していた。そこへ、明るい声がかけられた。

「ユーセウス様！お探ししましたよ！」

「ユーセウス様・・・？」

呟いたヴィトは、驚いてユーセウスを見た。

がさりと茂みを揺らして現れたのは、いかにも天真爛漫といった風の青年だった。薄茶の髪と濃い茶の瞳が、青年の雰囲気さらに明るくしていた。

「執務がまだ残ってるじゃないですか！休むのは片付けてからにして下さい！」

「見つかったか・・・」

見るからに怒っている青年を見て、ユーセウスは可笑しそうに笑った。そんなユーセウスに対し、ヴィトが態度を一変させてひざまず跪いた。

「失礼致しました。ユーセウス殿下。」

「なんですか。何があったんですか？殿下！」

二人に言われて、ユーセウスは残念そうに溜息を零した。
「・・・言っちゃったね。二人とも。」

（・・・殿下・・・？）

ユーセウスがレイリアの反応を見ている。

（・・・殿下・・・って・・・あの、殿下、だよな・・・？）

「さあさあ、用事がお済みでしたら執務を再開して下さい！」

「まあ待て、ウィル。」

苦笑して青年を制し、ユーセウスはレイリアに微笑んだ。

「イルアの用も済んだみたいだし、レイリアも戻らないとね。」

「えっ・・・あ・・・はい。」

言われて反射的に返事をして、レイリアは慌てて言葉を出した。

「あ、あの！」

しかしユーセウスは笑顔で言葉を遮って、レイリアに釘を刺した。

「まさか態度変えたりしないよね？」

「あっ・・・いえ・・・その・・・」

おろおろと視線を彷徨わせるレイリアに、ユーセウスは楽しそうに笑った。

「レイリアと話すのは楽しいよ。」

「え・・・？」

「レイリアは？」

言われて、自然と顔が綻んだ。

「・・・はい！楽しいです！」

「・・・良かった。」

笑って、思い出したようにユーセウスは青年を紹介した。

「あ、そうだ。この男は僕の侍従で、ウィル。顔を覚えてやって。」

「・・・」

「はい！・・・あの、バルクス家にお世話になっております、レイリアです。よろしく願います。」

ぺこりと頭を下げたレイリアを、ウィルはぽかんと見つめていた。
「ウィル。」

「・・・あ！こちらこそ、よろしくお願いします！」

ユーセウスに名前を呼ばれて、ウィルは慌てて頭を下げた。

「君はワイトだったよね。」

ユーセウスに声をかけられて、ワイトは驚いて返事が遅れた。

「・・・はい。お見知り置き下さり、光栄です。」

「・・・レイリアを借りて悪かったね。」

「いえ・・・」

それ以上なんと言っていないのか分からず、ワイトは深く頭を下げた。

「またね。」

そんなワイトを少し寂しそうに見て、ユーセウスはウィルを伴って、その場を去って行った。

第十五話 秋風の囁き

帰りの馬車に揺られて、五人はそれぞれに思いを馳せていた。語る言葉はなく、静かな時間が流れている。

帰路を半分程行ったところで、セティエスがふと訊ねた。

「そう言えばお嬢様」

「なあに？セティ。」

「側室にあげられた歌姫は、保護の為に召し上げられたと聞いたのですが・・・」

「えっ、そうなんですか？」

思わずレイリアも訊ねると、イルアは苦笑した。

「ええ。エルフィア様が相談した後で、歌姫自身からも相談を受けたいの。それで、保護をする目的で、二年の間、側室として過ごす事を了承したみたい。」

「・・・そうでしたか・・・」

「二年経ったら、歌姫はどうなるんですか？」

少し気になったので聞いてみた。

「問題があつて側室から外されるわけではないから、以前と同じように生活出来る筈よ。・・・もしくは箔がついて求婚が殺到するかも知れないわね。」

「へえ・・・そうなんですか・・・」

またしばらく、馬車の中は静かになった。

「・・・一軍はどうなる？」

ガイアスが、窓の外を眺めながらそう訊ねた。

「・・・まだ、決めかねているみたい。エルフィア様を将にするかしないかで、かなり揉めているみたいね。」

「・・・そうか。」

そう言った切りのガイアスに、イルアは少しおどけたように言っ

た。

「精鋭部隊も足りないから、ガイアスにも声がかかったりしてね。」
途端、ガイアスは真っ直ぐにイルアを見据えた。

「ふざけてんのか？」

「……………」

イルアが、驚いて目を丸くした。そして、泣きそうな顔で笑った。
「……………うん。ごめんなさい……………」

ガイアスは静かに言う。

「俺に新たな剣を与えたのは、お前だろう、イルア。」

「……………うん……………そうね。」

俯いたイルアは、きつと、泣いていたのだろう。

四人は、静かに外を眺めていた。

?? 数日後。

精鋭部隊の家族に遺品が届けられた。死因は、ザクラスの独断による、魔獣討伐だった。全員が命に代えてその魔獣討伐を成し遂げた、という事になっていた。ヴィトがつけた爪痕が、その証拠にされていた。

その説明に、納得などしていないに違いない。けれど、遺品を届けたエルフィア達を見て、あまりの憔悴しょうすいぶりに追求を諦めたようだった。

第一軍の編成と新たな将の選出は、今だ揉めに揉めているようだ。エルフィアを将に、と押す者がいれば、女など将に相応しくないと声高に言う者がいた。エルフィア自身は沈黙を保っていた。

あの砦は、取り壊されたようだ。まるで暗闇を抱くようだったあ

の場所が、嘘のように明るくなったと、付近の民は喜んでいたという。

それから一ヶ月。

バルクス家では、以前と同じような、穏やかな日々が送られていた。

「おはよう、ヴィト」

「ああ、おはよう。」

二人で朝食の準備をしていると、ガイアスがぼーっとしながら席へ着く。

「はい、スープ。おはよう、ガイアス」

「・・・ああ、おはよう」

寝ぼけ半分のガイアスにもなかなか慣れて、じーっと見られても以前のように固まる事はなくなったし、恥ずかしくて身動きも取れない・・・という事もなくなった。

「じゃあ私、二人を起こしてくるね。」

「うん、頼むよ。」

いつも通りセティエスはもう起きていて、こちらへ来るだろうと思いつながら足を進めるが、本人の部屋の前まで来ても出てくる気配がない。

（あれ・・・？珍しいな。セティエス様・・・寝坊？）

そう思いながら扉を軽く叩く。

「セティエス様、おはようございます。レイリアです。」

入って、と声がして、レイリアは恐る恐る扉を開けた。

「失礼します・・・」

顔だけ覗かせてみると、セティエスはもうすっかり着替えていて、おいで、とレイリアを手招きした。

（・・・？ちゃんと起きていらっしやるし・・・どこも不都合はな

さそうだけど・・・」

「どうかされたんですか？」

扉を閉めるように言われて、しっかり閉めてから近寄ると、セティエスは身を屈めてレイリアに耳打ちした。

「実は、三ヶ月後はお嬢様の誕生日なんだ。」

言いながら、レイリアが驚いて大きな声をあげないように、ささず口の前に指を立てて、しー、とやってみせる。

「・・・そ、そうなんですか!？」

食い付いたレイリアに、につこりと笑ってみせる。

「その日までに、お嬢様へ贈るものを、一緒に選んでもらえないか?」

「わ、私で宜しければ喜んで!」

拳を握って喜ぶレイリアに、セティエスは柔らかに微笑んだ。

「私もお嬢様についていなくてはならないから・・・そうだな。次の休みに、買い出しついでに出かけようか。」

「はっ、はい!」

満面の笑みで頷くレイリアを見つめて、セティエスは軽く頷いた。

（イルア様の誕生日・・・!何を差し上げたら喜んでいただけるかなあ・・・）

朝食を食べている間、レイリアはにこしながらそんな事を考えていたら、当のイルアに不思議がられてしまった。

「なあに、レイリィ。何か嬉しい事でもあったの?」

「あっ、い、いえ!その、あったというか、あるというか・・・」

「なーに?気になるわねえ。」

「ええと、内緒です。」

「・・・気になるわねえ」

につこり笑って首を傾げるイルアに、えへへ、と笑ってレイリアはごまかす。そんな二人を見て、男三人は密かに笑ったのだった。

「で、何を隠してるの?」

朝食の片付けをしていると、思った通り、ヴィトがそう訊いてきた。レイリアは嬉しそうに笑って答える。

「うん、あのね・・・」

「駄目だよ、レイリィ。」

言おうとしたところでセティエスに声をかけられた。

「あ・・・」

「セティエス様・・・セティエス様と隠し事ですか?」

ちよつと意外そうに目を丸くしたヴィトに、セティエスはくすりと笑った。

「ヴィトならすぐに分かるだろう。来月の事だ。」

「来月・・・?・・・ああ、あの事ですな。」

ヴィトはすぐに納得して頷いた。

「そういう事だ。今年も色々な方から贈りものが届くだろうから、対応を頼む。」

「ええ、心得ております。」

ヴィトは苦笑しつつも頷いた。どうやら毎年何かあるようだ。

「・・・あんな事があったからな・・・今回は少しでも安^{やす}らいでもらいたいものだ。」

セティエスの言葉に、レイリアとヴィトは顔を見合わせた。きっと、ガイアスも同じだろう。

「よし!私、頑張ります!」

「俺も、頑張ります。」

三人で笑い合つて、セティエスがほら、と二人を促した。

「さあ、まずは今日の仕事を頑張ってくれ。」

「はい!」

元氣よく返事をしてそれぞれの仕事に取りかかった。

季節は秋。国のあちろこちろで、春を迎える祝福の準備がされようとしていた。

第十五話 秋風の囁き（後書き）

評価して下さい方、ありがとうございます！本当に感謝です！

第十六話 木漏れ日に揺られて

あの夜から三ヶ月後??。

イルアは国王からの呼び出しで王城へ来ていた。

今日は少し話があるだけだということで、お供はヴィトだけだ。すぐに終わる用件だとも言われたので、自前の馬車で来ていた。

御者はもちろんヴィトだ。

「それじゃあ、すぐにすむと思うから、ヴィトは控え室で待っていてくれる?」

控え室というのは、こうして主人を送迎する従者が、主人の用が済むまで待機している為の部屋だった。

「はい、イルア様。お待ちしております。」

しっかりと姿勢正しく礼をして、ヴィトはイルアを送り出した。

(今頃セティエス様とレイリアは買い出しか・・・)

ちよつとだけ羨ましく思うヴィトだった。

「あの、セティエス様はどんなものを考えていらっしやるんですか?」

二人で城下町を歩きながら、レイリアはお店を見つけては覗いていた。

「毎年の事だからね・・・実は案が尽き果てていて、困っているんだ。」

そういえばイルアとセティエスは長い付き合いのようだ。そうこう考えていて、レイリアは周りの視線に気付いて慌てた。

「・・・セティエス様・・・」

「どうした?」

不思議そうに覗き込まれて、レイリアは曖昧に笑う。

「・・・あの、なんだか注目されていますよね・・・」

「ああ・・・」

セティエスは軽く周りを見渡して、くすりと笑った。

「お嬢様と歩く時もそうだよ。あまりこうして町には来ないから、珍しいのだろうな。」

「・・・そうかも知れないですね・・・」

（絶対に美男美女だから注目されてたんだと思う・・・）

セティエスは全く気にしていないようだ。多分、イルアも気にしないだろうと思われる。

「それで？」

「えっ？」

考えを巡らせていたところで声をかけられて、レイリアは慌ててセティエスを見上げた。くすり、と笑われる。

「レイリィはどんなものかいいと思う？」

「えっ、ああ、えっと・・・」

じっと見られて妙にどきどきしてしまう。

「色々考えたんですけど・・・イルア様、いつもお綺麗にしているしやるので、私の選ぶ装飾品では釣り合わないなと思って・・・」

セティエスは静かに微笑んで言葉を聞いている。

「それで、ええと・・・セティエス様も、今年は安らげるようにって仰ってたので・・・」

レイリアはちらり、とセティエスを見てから言ってみた。

「その、香水とか・・・香りが身につけられたり、出来るといいかなあって・・・」

言ってから、そろりとセティエスを見上げると、にっこり笑い返された。

（うつ・・・周りの視線がさらに痛い・・・）

「それはいいかも知れないな。あれこれと贈られてくる香水は、あまりお気に召さないみたいだからね。」

「そ、そうですね・・・」

こうして話すのは嬉しい事なのに、周りの視線が気になって居心地が悪い。

（けど・・・そう言えば初めて町で三人を見かけた時も、町の人たちが遠巻きに囲んでたっけ・・・）

「ああ、あそこに一軒あるな。レイリ、覗いてみようか。」

「へ？あつ、はい！行きましょう！」

言いながらその時の様子を思い出して、レイリアは思わずにやけてしまった。するとセティエスが目敏く見つけて訊いてきた。

「どうかした？」

「え？あつ、いえ・・・」

にやけ顔が収まらなかったので、レイリアは顔を逸らしながらそう答えた。

「失礼するよ。」

チリリン、と店のベルが鳴った。小さく可愛らしい音だ。中に入っただけで、ほんのりと甘い匂いがした。

（わあ・・・なんだか可愛い香り！）

お店に並べられている香水の瓶は、どれも細かな細工のしてある硝子瓶だ。こぶりで、つい手に取ってみたくなる。

入った途端に魅入られたように店内を見渡すレイリアに、セティエスはわざと訊いた。

「それで、さつきは何をにやけてたんだい？」

ぎくり、とレイリアが面白いように慌てた。

「いつ、いや、あの、大した事じゃないんです・・・」

（思い出し笑いなんて、恥ずかしい・・・忘れて下さい、セティエ

ス様！)

そのままそーつと移動しようとしたレイリアの横にさりげなく回り込み、ちらりと見上げたレイリアの顎を指で掬い上げて、セティエスはふわりと微笑んだ。

(！)

「言ってごらん？ 気になるじゃないか。」

(セ、セティエス様・・・！ からかわないで下さい！)

とは言えず、レイリアはがちがちに固まった。そんな二人の様子を、店の外からかなりの人数に覗かれている事など、知る由もない。さ、最初に町でイルア様をお見かけした時も、皆遠巻きに見て噂してたなあって、思い出してただけなんです！」

羞恥のあまりなんだか責められているような気もして、レイリアは一気に言い切った。勘弁して下さい、と目が訴えている。

すると、セティエスはぽかんとした後、くすりと笑って、顎を撫でるようにして指を離れた。顎を撫でられるという慣れない動作にくすぐったく感じて、ぶるりと小さく頭を震わせた。

「あの時が・・・あの時、お嬢様が何を仰ったのか、知りたい？」

「え？ あ、はい！ 是非！」

「・・・今そこにレイリイがいた。きっと相性が良いんだろうって。」

「・・・え？」

くすくすと笑いながらセティエスは続けた。

「まったく、どうかしてしまったのかと思ったよ。今まではそんな事を仰る方ではなかったのに。レイリイに出会ってから、お嬢様は幼い頃に戻られたみたいだ。」

(私に、出会ってから・・・?)

「あの、それは・・・良かったんでしょか・・・？」

不安気にそう訊いたレイリアに、セティエスは安心させるように小さく微笑んだ。

「お嬢様が女性らしくなって、良かったと思っっているよ。」

「・・・良かった・・・！」

心の底からほっとして、思わず大きな息を吐いた。

「レイリ、来てくれてありがとう。」

そう言われて、レイリアは目が潤みそうになった。

「セティエス様・・・」

（セティエス様が一番近くでイルア様を見ていらしたんだものね・・・心配、なさってたんだろうな・・・。）

そう思っ、レイリアはにっこり笑った。

「迎えて下さって、本当にありがとうございます！これかも頑張りますね、私！」

その後、二人は香水に限らず“香り”のある雑貨をゆっくり見て回った。

「うーん・・・」

「どう？いいものはあった？」

「・・・ええと・・・やっぱり、香水が良いかなと思うんですが・・・」

言いながらセティエスの表情を伺い見る。と、くすりと笑われた。それはとても優しい笑みで、思わず見つめてしまった程だ。

「レイリが良いと思うものをあげてごらん。きっと喜んでくださるだろうから。」

「・・・はいっ！」

元氣よく返事をしたレイリアに頷いて、セティエスはさっそく動こうとした。

「それじゃあ??」

「あつ、あの、セティエス様！」

歩き出そうとしたセティエスの腕を、レイリアは咄嗟に掴んだ。
・掴んだのは服だが。

「・・・どうした？レイリィ。」

「あのですね！・・・その、ちょっとだけ、寄り道しても良いですか？」

「・・・」

黙ってしまったセティエスを見て、レイリアは焦った。

（やっぱり図々しかったかな・・・）

「どこに行きたい？」

「えっ？」

顔を上げれば、相変わらず微笑むセティエスがいた。

「・・・あの、いいんですか？」

そう訊ねるレイリアに、セティエスはくすくす笑う。

「行きたいところがあるんだろう？」

「は、はい・・・」

尚も戸惑うレイリアに、少し意地悪に言う。

「行かないのか？」

「い、行きたいです！」

「じゃあ行こう。どこに行くんだ？」

「あの、こっちです！」

レイリアは途端に満面の笑みになって、足取りも軽くセティエスの前を歩き出した。

「セティエス様、ほら、あそこですよ！」

レイリアが指差す先には、小さなお店があった。どうやら焼き菓子店らしい。香ばしい香りとはのかに甘い香りが、レイリアを誘惑しているようだ。

（こういう可愛らしさが、お嬢様にもう少しあればいいのだが・・・）

そう思つて苦笑する。レイリアはうきうきしながら店先へ行つて、店員と何やら話している。

「レイリィ」

少しだけ遅れてセティエスも店先へ顔を出すと、店員が驚いて固まつた。

「セティエス様、甘いもの、大丈夫ですよね？」

確かお菓子も食べていた筈だ、とレイリアが訊ねると、セティエスが笑つて頷いた。

「それじゃあ二つください。」

「え？あ、ああ、ちよつと待つてね！」

声をかけられてはつと我に返つたお店の女の子は、慌てて焼き菓子を二つ、用意した。

「はい、いつも通りね。」

笑つて言われて、レイリアも笑い返す。

「うん。これ、大好きなの！」

代金を渡そうとすると、セティエスがずっと代金を渡した。

「これで足りみますか？」

「えっ・・・あ・・・た、足ります。大丈夫です！」

慌てる女の子を見て、レイリアは苦笑してしまった。

（これが普通の反応だね。イルア様を見てると私が過剰に反応してるみたいで、恥ずかしくなっちゃうもの・・・）

「それじゃあ行こうか、レイリィ。」

「え？あ、はい！」

先に行くセティエスを追おうとして、お礼を言おうと振り返ると、女の子は勢い込んで訊ねてきた。

「ねえねえ！あの方、セティエス様なの！？」

「う、うん。そうだけど・・・」

「レイリアはどういう関係なの！？」

「えっ・・・」

（どういって・・・）

訊かれた意味に気付いて、レイリアは真つ赤になって言った。

「そ、そういう事じゃないからね！私、今ね、バルクス家にお世話になってるの！それだけだから！」

「だってもの凄く仲良さそうじゃない！？」

「親切にしてもらってるだけなの！」

尚も言い募ろうとする女の子を遮って、レイリアは慌ててその場から逃げた。

「それじゃあ、またね！」

「あ、ちよつと！」

（と、とんでもない事言われちゃった・・・！）

そのまま走ってセティエスに追いつく。と、顔を覗き込まれた。

「レイリィ？」

「っ！」

（今の今で顔合わせるのは、ちよつと恥ずかしい・・・！）

「え、えつと、あそこでしたよね、お店！」

「・・・ああ、そうだね。」

慌てるレイリアを追求しない事にしたのか、セティエスは笑って足早に先を進み出したレイリアを追った。

「それでは、失礼致しました。」

イルアは丁寧な礼をして国王の執務室を出た。

話は、一軍の編成と、やはり早く婿を捜せという事だった。

（早くお祝いを言いに行かなくちゃね）

はやる気持ちを抑えて、早足で廊下を進む。

（それにしても、流石にちよつと肌寒いわね・・・）

そう思いながら廊下の角を曲がろうとして??

「わっ」

「きゃっ」

誰かにぶつかって倒れそうになった。

「すみません！」

倒れる前に抱きとめられて、イルアはほっとした。

「いえ、わたくしも不注意でしたので・・・」

イルアがしっかりと立つと、抱きとめていた腕はすぐに離れた。

（あら、珍しくうつとおしくない動作だわ・・・）

そんな事を思いつつ、顔を上げて相手を見た。

?? 明るい新緑の瞳が、とても印象的だった。

「少し考え事をしていたもので・・・本当に申し訳ありません。お怪我は？」

「いえ・・・」

（見ない顔ね・・・先程陛下が仰っていた、新たに召集された一軍の方かしら・・・）

そんな事を考えていたイルアだが、相手にはもちろん、気付かせない。

「どこかお急ぎでしたか？」

「ええ、少し・・・くしゅん！」

風が吹いて、急に寒さを感じてくしゃみが出た。しかしそれは“お嬢さま”にあるまじき失敗だ。イルアは笑ってごまかそうとした。

「あら・・・失礼を。」

ふわり、と温かいものがイルアを覆った。何かかと思って見ると、暖かな外套だった。驚いて相手を見ると、とても自然に微笑まれた。明るい、笑みだった。

「よろしければお使いください。」

「ですが・・・貴方がお困りになるのでは？」

「いえ、消耗品ですので、一つや二つ差し上げても文句は言われな
いでしょう。」

笑ってそんな事を言いのけた。

「あらでも、まだ真新しいものですわね。支給されてすぐに無くしたのでは、怒られるではありません？」

「うーん・・・怒ると怖そうな上官ですが、ご令嬢に差し上げたとなれば、少しは大目に見て下さるのではないかと。あ、お急ぎでしたね。お引き止めて申し訳ありません。」

「・・・もしかして、新たに召集された一軍の方ですか？」

表情や、仕草が、とても自然で、イルアは珍しく興味を持った。

「ああ、もうご存知なのですね。・・・こういった事に興味がおありなのですか？」

女性にしては珍しい、と暗に言われているのが分かって、イルアは出来るだけ困った風に見えるように微笑んだ。

「いえ、エルフィア様と親しくさせて頂いておりますので、それで軍の事は少し、知る機会があるのです。」

そう言くと、相手はちょっと驚いたようにして、すぐに楽しそうに笑った。

「ああ、では、貴女がイルア嬢でいらっしゃいますか？」

「あら、わたくし・・・何か噂になつているのですか？」

不思議に思つて首を傾げると、相手も何故かつられたように、僅かに首を傾げた。

「いえ、そうではなく・・・そのエルフィア様から、仲が良いから会う事もあるだろうと、釘を刺されまして。」

（釘を刺された？）

そう思いつつも、言葉に出たのは違う事だった。

「・・・では、貴方が一軍の・・・」

驚いたイルアに、相手はにこりと笑って答えた。

「はい。この度、第一軍副将に任じられました、シールス＝ファンセルと申します。」

そう言つてシールスは、木漏れ日のように、明るく、穏やかに笑った。

それがイルアには、とても眩しく見えた。

「エルフィア様！」

「イルア！」

鍛錬場たねんじょうに姿が見当たらなかった為、今日のところは諦めて帰ろうとしたイルアだが、控え室でヴィトと話すエルフィアの姿を見つけて走り寄った。

「エルフィア様、將軍へのご就任、おめでとうございます！」

心から伝えたかった言葉を言う。エルフィアは、とても満ち足りた表情で笑った。

「・・・ありがとう、イルア。」

エルフィアはそつとイルアを抱きしめた。それに、イルアも応える。

「・・・また色々な輩がうるさくなりそうですわね。」

呟いた言葉に、エルフィアが笑った。

「まあな。だが、幾度もあった事だ。すぐに黙らせてやるさ。」

黙らせてやる、という言葉にイルアは先程の出来事を思い出して言った。

「そうですわ、エルフィア様。」

「なんだ？」

お互いに抱きしめていた腕を離す。

「先程、シールス副将にお会いしたのですけれど・・・」

「ああ、なんだ。もう会ったのか。」

驚くエルフィアに微笑みかけ、イルアは一つ、お願いをしてみた。「こちらをわたくしに貸して下さったのです。」

そう言って例の外套を見せると、エルフィアは複雑そうな顔をした。

「まさか、イルアに手を出したのではあるまいな。」

「まあ・・・違いますわ。寒いからと、貸して下さったのです。無

くした訳ではありませんから、シールス様をお怒りにならないで下さいね？」

そう聞いたエルフィアは、一瞬、ぼかんとした。

「・・・あははっ、イルアからそんなお願いをきく事になるとはない！」

次には笑われ、イルアは微笑んで言った。

「あら。わたくしに外套を貸したばかりにエルフィア様に怒られたのでは、なんだか悪いではないですか。」

そう言うイルアに笑って、エルフィアは頷いた。

「分かった。大目に見てやるとしよう。イルアの願いならきくしかないしな。」

「ありがとうございます。」

ふわりと優雅に礼をする。そして、別れの挨拶をした。

「それではエルフィア様。また後日。」

「ああ、またな。」

そう言って、ヴィトを伴って門へ向かう。と??

「イルア！」

大きな声で呼ばれて振り返る。

「誕生日、おめでとう！明日、贈り物をさせてもらおうよ！」

大きく手を振ってエルフィアは叫んだ。それに、胸が温かくなる。

「・・・ありがとうございます！」

応えて、イルアも出来るだけ大きな声で叫んだ。

セティエスがいたなら、絶対に小言の一つでも言われただろうと思う。

そう考えて、妙に笑えた。

第十七話 イルア＝バルクスへの贈り物

――翌日。

イルアはセティエスを伴って擁護院^{ようごいん}へ出かけて行った。表向きの仕事だとしても、イルアが大切に思っているのだと分かる。それに、とても楽しみにしているようだった。

レイリア達が一仕事終えて一息ついていると、屋敷を訊ねる者があつた。

「失礼致します。イルア＝バルクス様へ、エルフィア＝ハイル様より贈り物が届いております。」

届けに来たのは城の兵士で、信頼出来る者だ。ガイアスが受け取り、一言労^{ねぎら}って見送った。今日はリュミエルは、騎獣舎で過ごしている。

「エルフィア様から・・・なんだろうね？」

「さあ・・・あの人の事だから動物でも送ってくるかと思つたよ。」
レイリアが首を傾げると、ヴィトそう言つて苦笑した。

「エルフィア様は動物がお好きなのね。」

笑つて言つと、ガイアスが面白がつて笑つた。

「あいつがそんな可愛い趣味なわけないだろ。あいつは騎獣が好きなんだよ。それも、戦闘力が高いやつがな。」

そんなガイアスを、レイリアとヴィトはまじまじと見つめてしまった。

「・・・なんだ。」

ちよつと驚いた様子で、ガイアスは瞬いた。

「だって・・・」

「珍しいもの見たなと思って。」

ねえ、と二人が笑い合うのを見て、ガイアスは途端に不機嫌そうな顔になった。

「ああ、それぞれ！ガイアスはそういう顔が多いから。」

ヴィトが笑うと、ガイアスはさらに怖い顔になる。

「ほら、それだよ！」

お腹を抱えて笑い出したヴィトを睨み、ガイアスは一気に掴み掛かった。

「てめえ！」

「うわっ、なんだよ！」

「ちよ、ちよつと二人とも！」

ガイアスが掴み掛かると、ヴィトは軽い身のこなしで避ける。が、二人とも本気ではないので、一向に勝負がつかない。

「笑ってんじゃねえよ！」

「ガイアスが仏頂面なのが悪いんだろ！」

初めは慌てたレイリアも、二人がじゃれ合っているのを眺めて笑った。

（仲良いなあ・・・）

「いたたっ！髪掴むなよ！」

「じゃあ逃げるな！」

取っ組み合いを始めた二人をよそに、レイリアはエルフィアの贈り物の前に座り込んで、両手に収まるくらいの大きさの箱を見つめた。

「一体何が入ってるんだろう・・・？」

と、見つめていると、再び誰かが訊ねてきた。

??コンコン。

ノックの音に取っ組み合いをやめ、今度はヴィトが迎え出た。

「お手紙が届いております。」

こちらはいつも手紙を届けている青年で、ヴィトは挨拶を交わして見送った。

「レリイ、手紙だよ。」

「・・・えっ、私に？」

差し出された手紙は二通あり、レイリアは不思議そうにそれを眺めた。

「部屋で読んでくればいいだろう。」

呆れたようにガイアスにそう言われて、レイリアはちよつときどきしながら、一先ず自室へと向かった。

手紙は、以前働いていたお店からと、家族からだった。

「そう言えばお屋敷に来てから、全然連絡取ってなかったなあ・・・」

今更ながらその事実気付いて、レイリアはちよつと反省した。

「心配してくれてたのに・・・申し訳ないな・・・」

まずは家族からの手紙を開けた。

「ええと・・・」

“レイリアへ。

あのバルクス家にお世話になっているそうですね。
シエルキスから聞きました。”

（兄さん・・・どこで聞いたんだろ？）

“ お屋敷で住み込みだと聞きました。不便はないですか？
お屋敷には男性もいるのだろうと、お父さんが楽しみにしていますよ。
“

「・・・な、何を・・・？」

なんだかその先が恐ろしくて、レイリアは丁寧にたたんで封筒へ戻した。

「次行こう・・・」

次の封筒を開いて少し読み、レイリアは思わずガタツ、と椅子を蹴倒す勢いで立ち上がった。

「なっ・・・なっ・・・なんで!？」

手紙の内容はこうだ。

『 町じゃああなたの噂で持ち切りだよ！

あのセティエス様と、一体どういう関係になったんだい!？

セティエス様とお付き合いしてる女の子がいるって言って、町の女の子達が怖いよ!？

まあ、あなたの事だから、セティエス様から声をかけて下さるんだろうけど・・・あなたが幸せなら、あたし達はお祝いするよ。

それとあの子から。

セティエス様とイルア様ってどうなってるの？
だってさ。

何かあったら相談するんだよ!』

「・・・」

レイリアはそのまま数分固まった。

「な・・・なんで・・・？昨日一日だけなのに！セティエス様とお出かけしたのは・・・」

愕然^{がくぜん}と手紙を見つめるレイリアは、セティエスとお出かけは要注意事項だ！と頭に刻み込んだ。

（う、噂って怖い・・・）

部屋から出て再び居間へ行くと、何やらたくさんの荷物が届けられていて、ヴィトとガイアスはそれを片付けにかかっていた。

「あ、レイリィ。もういいの？」

振り返ったヴィトにそう言われ、レイリアは明るく笑った。

「うん、ありがとう。」

言いながら横に立って、床に置かれた荷物を眺める。

「・・・これ・・・すごいね・・・」

ガイアスは面倒くさそうに荷物を開けては箱を潰している。

「毎年なんだよ。イルア様は結構好かれているからさ。あっちこっちから贈り物が届くんのだ。」

「へえ・・・」

きよろきよろと物珍しそうに見回すレイリアに、ヴィトはくすくす笑いながら続けた。

「まあほとんどが下心で届いてるから、特に親しい人からでなければ、届き次第開けて、用途で選り分けておくんだ。」

「し、下心・・・？」

ちよつと頬が赤くなったレイリアに微笑んで、ヴィトは片付けを促した。

「ほら、ほとんどが男性からだろ？」

そう言って、手に取った贈り物の送り主を見る。

「・・・本当だ。これも。」

所狭しと置かれた贈り物は、二、三人しか女性の名前が見当たらなかった。

「イルア様・・・綺麗で可愛いものね・・・」
啞然としながら荷を解く。

「そう言えばガイアスももてるんだよね？」

思い出してそう言うと、ガイアスがもの凄く不機嫌になった。

「ご、ごめ・・・」

「黙って片付けろ。」

(うつ・・・)

「ガイアス・・・いい加減にレリイに当たるのはやめなよ。」

「うるせえ。」

がさがさと乱暴に包みを破り、中身を取り出して空箱をヴィトに放った。

「危ないな！レリイに当たるだろ？」

実はまったく当たる心配はなかったが、わざとそうやってやるとガイアスはちらりとこちらの様子を見た。それに、ヴィトが笑い出す。

「あははっ・・・心配なんだ？」

「おい、ヴィト。てめえ良い度胸だな！」

「レリイ、こっちに来てよ。」

「えっ？」

ヴィトに腕を引かれるまま移動すると、ヴィトとガイアスの間に挟まれた。

「うつ・・・ヴィト・・・！」

間近でガイアスがヴィトを睨んでいる。が、例え視線が合っていないくとも、レイリアには十分怖い。

ヴィトと言えばレイリアを盾に、挑戦的な笑みを見せていた。

「……………」
「……………」

ヴィトとガイアスが頭上で睨み合い、レイリアは蛇に睨まれた力エルの如く縮み上がっている。

（だ、誰か……もしくは早く終わって……！）

引かれた時に取られた手を、無意識に握り返す。すると、二人が睨み合いをやめ、その視線が握られた手に移り、レイリアもつられて視線を落とした。

「……………」

そして。

「……………ご、ごめんねヴィト！」

慌てて手を離して後ずさったレイリアは、思い切り空箱に足を取られた。

「あ」

「レイリィ！」

「レイリア！」

幸い、倒れたのは包み紙などの上。三人は面白いように色とりどりの紙やリボンをまき散らして倒れ込んだ。

「……………あーあ」

「……………」

「……………ちっ」

倒れたそのまま、三者三様に溜息を零した。

「……………」

その様が、自分たちで可笑しくなって。

「……………あははっ」

一様に笑い出した。

「やると思ったよ、レリイ！」

「だって、ガイアスが睨むから・・・！」

「俺のせいじゃねえだろ。ヴィトが巻き込んだのが悪い。」

寝転がったままヴィトに手を伸ばそうとするが、どう考えてもレイリアを巻き込むので諦めた。

「お前もほいほい流されるな。」

「えっ、私が悪いの？」

がしがしと頭を掻き回されながら、レイリアは反抗してみた。

「イルアにしてもセティエス様にしても、お前はちよつとでも気を許した奴の言う事、考え無しに聞きすぎだ。」

「でもそれってガイアスにも言えるよね？」

ガイアスの方へ向いていたレイリアの後ろから、ヴィトは上半身を起こしてガイアスに言った。意地悪く笑ってやると、ガイアスが露骨に嫌そうな顔をする。

そのガイアスが言葉を出す前に、ヴィトはにつこり笑って言うてやった。

「そう言えばさっき、初めてレリイの名前呼んだよね。」

「・・・！」

「え？・・・あ」

そう言えば、と言おうとしたレイリアの頭を乱暴に掻き回して、ガイアスは立ち上がって片付け始めた。

ヴィトはそれを可笑しそうに笑って見ていた。

（・・・やっぱ、ちよつと可愛く思えてきてるよなあ、レリイの事・・・）

ちらりと横を見ると、レイリアは不思議そうにガイアスを眺めた後で、こちらを向いて笑った。

「私たちも片付けしようよ。」

「ああ、そうだね。」

にっこり笑って、レイリアは立ち上がって手伝いに行く。

（うーん・・・イルア様の影響でそう思うのかな・・・）

ヴィトの視線の先でガイアスが、ぐしゃぐしゃにしたレイリアの髪を、乱暴に直していた。

？？ちなみに。

下心満載の贈り物達は、用途別に分けられ、速やかにあちこちの擁護院へ贈られるのだった・・・。

最終話 バルクス家の休日

「ユーセウス様、聞いていらっしゃいますか？」

名前を呼ばれて、ユーセウスは空から侍従に視線を移した。

「・・・ああ、何か言ってたか？」

窓から空を見上げて考え事をしていた為、何も耳に入っていないかった。侍従は大仰に溜息を吐く。

「ですから、どうなさるのかと聞いているのです。」

「どうって、何を？」

ぱちくりと瞬きすると、侍従はびしつと部屋に置かれたものを指差した。

「あれですよ！イルア＝バルクス様への贈り物です！」
言われて思い出した。

「ああ・・・」

「ああってなんですか？あれもこれも用意させたのは誰ですか！」
「僕だな。」

笑い混じりにそう言われ、侍従はがっくりと肩を落とした。

「もうその日になってしまいましたよ・・・？」

さめざめと訴えて、侍従はこちらを見つめる。

「・・・ウィル、悪かった。」

くすくす笑いながらそう言つと、侍従ことウィルは小さく溜息を吐いて、気持ちを切り替えた。

「・・・それで、どうなさいますか？」

部屋に置かれているのは、ドレス、香水、装飾品の数々。それらを眺め、ユーセウスは溜息を吐いた。

「・・・どうでも良くなってきたな・・・」

「ユーセウス様！なんて言い草ですか！」

がなるウィルを視界から抹消し、ユーセウスは再び考えに耽る。

しばらくぼんやりしていると、近くでウィルが呼んでいる声がして、ゆっくりと世界を広げた。

「
・
・
・
なんだ？」

「……………」
「ですから」

ウィルは、先程とは打って変わり、ちよつと悩んでいるような顔だった。

「どうした？」

⌈
•
•
•
•
•
•
⌋

何故か言いよどむ。

「言ってみるといい。話くらいは聞いてやるぞ?」

「……いえ、ですから。」

こほん、とちよつと咳払いをして、ウィルは静かに訊いた。

「・・・ユーセウス様はイルア嬢とあのレイリア様、どちらが大好きなんですか？」

言われて、ユーセウスは台詞を頭の中で反芻はんすうした。何度か反芻して、笑い出した。

「くくくっ……ウィル、なんだその質問は。」

「いやですから！お二人と特に仲がよろしいですよね？陛下も気に入っていらっしやいますし・・・」

「で？」

「え？」

質問した相手から逆に問いかけられ、ウィルは驚いて目を丸くした。そんなウィルの顔を覗き込み、ユーセウスはにやりと笑った。

「お前は？」

「・・・えっ!？」

「レイリアが気に入ったんだろう？」

「ええっ!？」

分かり易い反応だ。口を開けたり閉じたりするウィルをしばらく眺め、ユーセウスはぽつりと呟いた。

「・・・例えばレイリアが妻になったとして・・・彼女に政務が出来るかどうか。それに、父の側室達や、正妃の座を欲しがる者達の圧力に耐えられるとは思えない・・・」

「・・・ユーセウス様・・・」

珍しく現実的な事を語る主を見て、ウィルは複雑な思いに口を閉ざした。

「レイリィ？」

昼頃。

イルアは自室での読書を中断して、話してもしようかとレイリアを探しに廊下へ出た。

今日は休日だ。

イルアは朝からのんびりと屋敷で過ごしていた。

本当はレイリアを誘って出かけようかとも思っていたのだが、忙しそくに仕事をこなしていたので、諦めていた。

しかし。

「いないわねえ・・・」

何故か屋敷の中は静まり返っていた。

（なんなのかしら・・・。誰もいないなんて、ねえ？）

廊下を進みながら気配を探る。と、すぐ外に集まっている気配がした。

「なんなのかしらねえ・・・」

（今日って私の誕生日なのけど・・・）

ちよつとくらい構って欲しいというのが、イルアの本音だった。

（なんだか・・・レリイに構ってもらえないと寂しいのよね・・・）
騎獣舎の方へ繋がる回廊へ出る。と??

「イルア様！お誕生日おめでとぅございます！」

眩しい程の笑顔が、イルアを迎えた。

「え・・・？」

驚いて、思わず呆然としてしまう。するとレイリアはイルアの手を取って引いた。

「皆で用意したんですよ！こちらへどうぞ！」

「・・・え？レリイ？」

「イルア様、こっちです！」

突然のお祝いの雰囲気、イルアは戸惑ったままレイリアの手を握る。

レイリアは戸惑うイルアを楽しそうに見て、それ以上は何も言わずに進む。

何も言われずにただ手を引かれるなんて、不安な事この上ない。

でも。

（あり得ない事だけど・・・私を殺すのがレリイなら、本望かも知れないわね・・・）

そう思う自分が、可笑しくて笑った。

「さあ、こちらです！」

レイリアに手を引かれて辿り着いたのは、バルクス家の庭だった。

「ここ・・・？」

庭とは思えない・・・いや、一目で庭だと分かる姿に目を疑った。
すると、レイリアが得意げに笑った。

「さあ、どうぞ！」

レイリアが腕を伸ばして細い白塗りの鉄柵を開け、庭へと促す。

その先には、様々な植物が庭を彩っていた。

そして、セティエス、ガイアス、ヴィトの三人が食事の準備を整えていた。

「これ・・・」

「さあ、あちらへ！」

まだ戸惑いが消えないイルアは、レイリアに促されるまま足を進める。

卓の側まで行くと、レイリアが握っていた手を離し、三人の元へ駆け寄った。呆然と見つめるイルアの前で、レイリア、セティエス、ガイアス、ヴィトは並んで迎えた。

「・・・イルア様、おめでとうございます」「・・・」

約一名は“様”をつけないでいたが、そんな事はまったく気にならない。

「あ・・・ありがとう・・・」

啞然とそう返すイルアに、セティエスがくすくす笑う。

「ほら、レリイ。やっぱり驚かれているだろう？」

「そうですね」

セティエスとレイリアが笑い合っているのを見て、イルアはようやく自分を取り戻した。

「・・・なんだか猾いわ。」

「「猾い？」」

揃ってそう返した二人につかつかと歩み寄り、イルアはレイリアを引き寄せた。

「皆ととても仲良くなってるじゃない？猾いわ。」

「・・・イルア様・・・」

きよんとするレイリアとは別に、セティエスとヴィトは大笑いし、ガイアスは溜息と共に呟いた。

「ほんと、ガキみてえだな。」

「何か言った？」

イルアがにこりと笑いかけると、ガイアスは素知らぬ顔をした。

「それに、これもよ。なんだか悔しいわ。」

「これ？」

イルアが指差したのはレイリアの装いだ。

「このリボン。私が用意したものじゃないわ。ヴィトでしょ？」

レイリアの髪は肩口へ一つに纏められていて、そこには焦げ茶のレースのリボンがあった。

「えっ、よく分かりましたね・・・」

ずばり言われてヴィトが目を丸くした。イルアはレイリアに笑いかける。

「とっても可愛いわ！」

「・・・イルア様・・・ありがとうございます！」

じーんとするレイリア。

「それだけに悔しいわね。」

「「・・・」」

「この首飾り！これはセティでしょ？」

レイリアの首にはとても細い鎖の首飾りがあった。小さな石が付いていて、よく見なければ気付かない程ささやかなものだが、さりげなく首もとを飾っている。

「レリイはいつも頑張っていますからね。」

「とつてもよく似合ってるわ。」

「あ、ありがとうございます・・・」

次々褒められるとなんだか恥ずかしい。照れ始めたレイリアに微笑みかけ、イルアは最後に靴を指差した。

「そして、これ。ガイアスでしょ？」

言われたガイアスは、不機嫌そうに顔を逸らした。レイリアの履いているのは膝下までの編み上げブーツだ。しっかりしていて、いかにも丈夫そうだ。

「ガイアスだけだと男物の様なのを選ぶから、セティエスが助言したんでしょうけど、ね。」

くすりと笑うと、ガイアスがさらに不機嫌になった。今日はここで逃げられてはいけない！とレイリアは慌ててガイアスに駆け寄って笑った。

「あの！これ、すごく動き易くて、私、好きだよ。大切にすることから！」

「っ・・・！」

満面の笑顔で言われ、ガイアスは思い切り固まった。完全に思考が止まっている。

「ガイアス・・・！」

ヴィトが堪らずにお腹を抱えて笑った。セティエスもイルアも、ガイアスを見て笑う。

「良かったな、ガイアス。」

「猾いわねえ、ガイアスったら。わざと？」

「・・・何がだ！」

イルアに向かってガイアスが吠えろと、イルアがわざとセティエスの後ろへ回った。

「セテイ、ガイアスが怒ってるわ。」

「ガイアスはお嬢様にも構って欲しいのですよ。」

「あらあ、そうなの？」

「イルア！いい加減にしろ！」

掴み掛かりそうなガイアスを、ヴィトとレイリアで抑える。

「ガイアス、落ち着いて。」

「今日は我慢して！イルア様のお誕生日だから、ね？」

「ぐっ……」

二人に宥められ、ガイアスは少し大人しくなる。そして、二人はイルアとセテイエスにも釘を刺した。

「お二人も、無闇にガイアスをからかわないで下さい。」

「そうですね！今日はほら、お祝いなんですから！」

怒られたイルアとセテイエスは、顔を見合わせて笑った。

「はあい。仕方ないわね。」

「仕方ありませんね。」

そうしてイルアを席へ誘って、四人で料理を取り分けて、イルアを囲む。

「さあ、食事にしましょう？」

イルアを中心に四人も座り、賑やかな食事が始まった。

「それにしてもレリイ、よくこの庭を綺麗に出来たわねえ。」

「イルア様に、お花も植えて良いし、好きにして構わないって言って頂けたので……以前いたお店のおばさんに習って、色々植えてみたんです。」

「イルアが飼料を枯らした時は、この土地も悪いのかと思ったけどな。」

「も、って何？も、って。」

「ガイアスが少しましにしたんだよな。」

「俺は植物は苦手だ。」

「レリイが来てくれて、本当に良かったですね、お嬢様。」

「ほんとよねえ・・・」

「お庭、気に入って頂けましたか・・・？」

「もちろんよ！」

眩しい程美しい笑みで、イルアはレイリアを見つめる。

穏やかな笑み。穏やかな時間。穏やかな風景。
なんだか感慨深くなって、レイリアは胸がじいんと温かくなるのを感じた。

そつと胸に手を当てて、その温かさを噛み締める。

「レリイ？どうしたの？」

気付いたイルアが心配そうにするので、レイリアはくすりと笑った。

「いえ、幸せだなあと思って・・・」

突然の言葉に目を丸くしたイルアは、次には楽しそうに笑った。

「レリイったら・・・それは私の台詞よ？」

「あつ・・・」

なんと言っても、今日はイルアの誕生日で、今まさにお祝いの真

っ最中なのだ。

「けど・・・そう思ってくれているのなら、こんなに嬉しい事はないわ。」

「イルア様・・・」

そう言われて、目頭が熱くなる。

ああ、贅沢だなあ、とレイリアは思った。

思えば。

こうしてバルクス家で過ごす事が、当たり前に感じられるようになるだなんて、思いもしなかった。

ちゃんと生活出来るか不安だったし、続けられるかどうかも自信がなかった。

けれど今は、毎日の生活が、とても自然な事に思えて。

色々と怖い事もあったけれど、主人にも仲間にも恵まれて、とても、幸せだと思う。

なんの取り柄もなくて、人より劣る事はあっても優れた所のない自分が、こんな人達と、素敵な時間を過ごせるのだ。

こんな贅沢が許される日があるだなんて・・・。

まさに、夢のようで。

けれど、現実だなんて。

「レリイ、大丈夫？」

思いに耽っていたら、また心配されてしまった。

「あ、はい！大丈夫です、イルア様。」

「・・・そう？」

「はい、あの・・・なんだが、幸せ過ぎて・・・いつまで保つんだろうつて・・・」

その言葉にイルアはきよんとして、不敵に笑った。

「それじゃあ、死ぬまで続くようにしましょう？」

「・・・死ぬまで、ですか？」

今度はレイリアがきよんとしてしまった。セティエスとヴィトが笑う。

「いいですね。」

「・・・死ねないな。」

そんなイルアと二人を見て、ガイアスが呆れて言った。

「大げさだろ。」

イルアを中心に、皆が語らう。笑みが零れる。

こんなささやかな、けれどもこれ以上ない程の贅沢。

そう感じて、生きていて良かったと心から思った。

そう思える事も、かなりの贅沢、かも知れない。

?? 願わくば運命の女神よ、どうか、
気が変わりませんように。

最終話 バルクス家の休日（後書き）

『風の歌声』は、これにて一先ず完結となります。

最後までお付き合いくださった皆様、本当にありがとうございました。
す。

息抜きにはなりましたでしょうか・・・？

ほのぼのしたり、ときどきしたり、はらはらしたり。

ちよつとでも読んでみて良かったと思って頂ければ、幸いです。

お気に入りしてくださったり、評価をしてくださったり、とても励みになりました。今でも励みになります！

11・04現在、30,000PV 45,000ユニーク突破

！！

正直これだけ興味を持って頂けるとは思ってもみませんでした（

びっくり)

嬉しいです。ありがとうございます！

これからも、これを励みに頑張ります！

ちなみに続編となる『風の歌声 - シュル・ヴェレルの手招き -』
を連載し始めました。こちらはストック無し。そして亀更新になります
ますが、よろしければお付き合いください。

それでは、また別のお話でお会い出来たら光栄です！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9946w/>

風の歌声

2011年11月12日03時23分発行